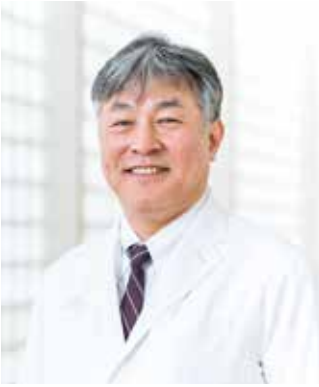
北海道大学大学院 消化器外科学教室 I
～教室年報：2019年～

Department of Gastroenterological Surgery I
Hokkaido University Graduate School of Medicine
Annual Report 2019



北海道大学大学院
消化器外科学教室Ⅰ
教授　武冨　紹信

巻頭言

例年、教室年報の巻頭言を書くのは春先です。教室年報の担当者が１年分の業績や教室行事など、多くの労力を割いて草案を作り、それを見ながら１年を思い起こしつつ、この巻頭言で何を書こうか、何を伝えようか考えます。通常であれば、長い冬がようやく終わり、太陽の光も力強く感じられるようになった時期で、さあいよいよこれからだという、本当に清々しく、北海道にとって力に溢れたとても良い時期です。

しかし、今年は２月の中頃から新型コロナウイルス感染が日本に飛び火してきました。その最初の地が思いもよらぬ北海道でした。感染のきっかけは事後の詳細な解析を待たねばならないでしょうが、２月初旬に行われたさっぽろ雪まつりだったと言われています。令和２年２月22日には全道での感染者数が10人になり、その後も増加し続けたため２月28日から北海道独自の非常事態宣言が発出されるに至りました。中国武漢や韓国の様子をニュースで見聞きしていましたが、若き鈴木知事により発せられた「非常事態宣言」という言葉が重くのしかかり、これはただごとではないと道民の多くが危機感を共有したことでしょう。平日夜間や週末の外出自粛が要請され、その後、幸いにして陽性患者数は漸減し予定通り３月19日には宣言解除となりました。しかし、北海道は沈静化したものの、本原稿を書いている現在、東京都をはじめ７つの都府県で緊急事態宣言が出される事態にまで拡大しており、まだまだ予断を許しません。おそらく北海道にも第２の感染の波が押し寄せてくることでしょう。今後、この新型コロナウイルス感染が欧米のように医療崩壊・社会崩壊まで行くのか、軟着陸させることができるのかは、我われ国民の良識ある行動にかかっています。

外出自粛、会食自粛、出張自粛、social distanceなど通常の生活に制限がかかると精神的にも参ってしまいます。私は教室員に「このような時こそ普段できないことに取り組む大きなチャンスである。困難な状況にどのような行動、過ごし方をするかでその人の価値は試される。ピンチはチャンス！」と伝えています。９年前の東日本大震災は多くの人的・物的損害をもたらした未曽有の災害でした。しかし、その中でも多くの人が歯を食いしばり、元の生活を取り返すため死に物狂いで頑張っています。津波で壊滅的被害をきたした宮城県南三陸町はカキ養殖の産地だったそうです。ほとんどのカキ養殖のための筏は津波で失われてしまい、南三陸町の漁師たちは一時廃業まで覚悟したようです。しかし、彼らは震災前よりさらにカキの品質を良くしようと筏の数を半分に減らし過密養殖からの脱却を図りました。すると震災前は収穫まで３年かかっていたのが、過密養殖をやめてからは１年で良質なカキが収穫できるようになったとの事。ピンチをチャンスにかえることに成功したのです。新型コロナウイルスによる多くの人的・経済的被害は、もしかすると東日本震災級の爪痕を残すことになるかもしれません。しかし、我々日本人はくじけず、冷静に、努力する能力を持っています。どのような困難が待っていても、自分を信じ、仲間を信じて、ピンチをチャンスに変え、よりよい未来を皆で築いていきましょう。

（2020年４月14日）

contents

目次

1 巻頭言

2 目次

3 2019年教室紹介

4 2019年度 教職員役職一覧

7 2019年度 教室体制

8 2019年年間業績一覧
消化器外科Ⅰ・週間予定表
2019年ジャーナルクラブ
2019年M&Mカンファレンス

〈診療部門〉

10 肝胆膵グループ

17 移植グループ

22 消化管グループ

28 小児グループ

〈研究部門〉

34 リサーチ統括部長より

35 研究紹介

〈留学生〉

45 国内留学

50 海外留学

56 2019年入局後期研修医・専攻医

62 秘書・実験助手

63 業績紹介

64 学会・論文

77 研究費一覧

80 学位取得者

83 2019年の年表・年間行事

84 年表

85 年間行事

122 学会・研究会主催

129 関連病院紹介

130 学会資格

136 2018年関連病院手術数

138 関連病院総手術件数(2010年～2018年)

139 関連病院紹介

156 編集後記

２０１９年教室紹介

2019年度 教職員役職一覧

Faculty

大学教員

Taketomi Akinobu
医学研究院/
消化器外科学教室Ⅰ
教授
武冨　紹信

Kamiyama Toshiya
医学研究院/
消化器外科学教室Ⅰ
准教授
神山　俊哉

Shimamura Tsuyoshi
病院/
臓器移植医療部
准教授
嶋村　剛

Takahashi Norihiko
病院/手術部
准教授
高橋　典彦

Kamachi Hirofumi
病院/
消化器外科Ⅰ
講師
蒲池　浩文

Fukai Moto
医学研究院/
消化器外科学教室Ⅰ
特任講師
深井　原

Homma Shigenori
医学研究院/
消化器外科学教室Ⅰ
講師
本間　重紀

Honda Shohei
病院/
消化器外科Ⅰ
講師
本多　昌平

Orimo Tatsuya
医学研究院/
消化器外科学教室Ⅰ
特任助教
折茂　達也

Goto Ryoichi
病院/
消化器外科Ⅰ
助教
後藤　了一

Masaaki Watanabe
医学研究院/
移植外科学分野
特任講師
渡辺　正明

Yoshida Tadashi
病院/
消化器外科Ⅰ
特任助教
吉田　雅

Kawamura Norio
医学研究院/
移植外科学分野
特任助教
川村　典生

Ichikawa Nobuki
医学研究院/
消化器外科学教室Ⅰ
特任助教
市川　伸樹

Shimada Shingo
医学研究院/
消化器外科学教室Ⅰ
特任助教
島田　慎吾

Hayasaka Takahiro
医学研究院/
消化器外科学教室Ⅰ
特任助教
早坂　孝宏

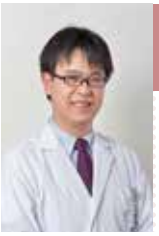
Instructors

インストラクター

Nagatsu Akihisa
病院/消化器外科Ⅰ
医員
長津　明久

Asahi Yoh
病院/消化器外科Ⅰ
医員
旭　火華

Ara Momoko
病院/消化器外科Ⅰ
医員
荒　桃子



Ganchiku Yoshikazu
病院/消化器外科Ⅰ
医員
巖築　慶一

Sakamoto Yuzuru
病院/消化器外科Ⅰ
医員
坂本　譲

Miyaoka Yoichi
病院/消化器外科Ⅰ
医員
宮岡　陽一

Imaizumi Ken
病院/消化器外科Ⅰ
医員
今泉　健

Okumura Kazuyoshi
病院/消化器外科Ⅰ
医員
奥村　一慶

Matsui Hiroki
病院/消化器外科Ⅰ
医員
松井　博紀

Kondo Takafumi
病院/消化器外科Ⅰ
医員
近藤　享史

Residents

後期研修医・専攻医

Hamada Kazuya
病院/消化器外科Ⅰ
医員
浜田　和也

Ishizuka Chihiro
病院/消化器外科Ⅰ
医員
石塚　千紘

Takahashi Ryo
天使病院/
外科・小児外科
医員
高橋　遼

Hamada Takumi
病院/消化器外科Ⅰ
医員
浜田　卓巳

Fukazawa Takumu
病院/消化器外科Ⅰ
医員
深澤　拓夢

Yamamoto Keiichiro
病院/消化器外科Ⅰ
医員
山本啓一朗

Ph.D.Course Students

大学院博士課程

Sugiyama Ko
3年目
杉山　昂

Shibata Kengo
3年目
柴田　賢吾

Wakizaka Kazuki
3年目
脇坂　和貴

Shibuya Kazuaki
3年目
渋谷　一陽

Sawada Akifumi
2年目
沢田　尭史

Fujii Yuki
2年目
藤居　勇貴

Kanazawa Ryo
2年目
金沢　亮

Kato Koichi
2年目
加藤　紘一

Tani Michio
2年目
谷　道夫

Ohira Masafumi
2年目
大平　将史

Oota Takuji
1年目
太田　拓児

Kato Takuya
1年目
加藤　拓也

Sakamoto Soudai
1年目
坂本　聡大

Shichi Shunsuke
1年目
志智　俊介

2019年度（令和元年度）教室体制

教　授	武冨紹信

医　局	医局長	副医局長
	本多昌平	折茂達也 後藤了一

（2019/4/1～2019/12/31）

病　棟	病棟医長　蒲池浩文		副病棟医長　吉田　雅	
Group	小　児	消化管	肝胆膵	移　植
Chief	本多昌平	本間重紀	神山俊哉	嶋村　剛
Sub chief		吉田　雅 市川伸樹	蒲池浩文 折茂達也 島田慎吾	後藤了一 渡辺正明 川村典生
Instructor	荒　桃子 奥村一慶 近藤享史	宮岡陽一 今泉　健 松井博紀	長津明久 旭　火華 坂本　譲（7.1 ～） 吉田祐一（～ 6.30）	巖築慶一

Junior Fellow	浜田和也、石塚千紘、深澤拓夢、浜田卓巳、山本啓一朗

Super Rotation	（2年目）大泉里奈

外　来	外来医長　本間重紀		副外来医長　後藤了一
	新　来	再　来	
月	○	小　児　外　科 肝　胆　膵	本多昌平、荒　桃子、奥村一慶、近藤享史 神山俊哉、蒲池浩文、折茂達也、島田慎吾、長津明久、旭　火華、坂本　譲（7.1 ～）、吉田祐一（～ 6.30）
火	—	—	外来医長、副外来医長
水	—	—	—
木	—	— 移　植	外来医長、副外来医長 嶋村　剛、後藤了一、渡辺正明、川村典生、巖築慶一
金	○	小　児　外　科 消　化　管 移　植	本多昌平、荒　桃子、奥村一慶、近藤享史 本間重紀、吉田　雅、市川伸樹、宮岡陽一、今泉　健、松井博紀 嶋村　剛、後藤了一、渡辺正明、川村典生、巖築慶一

Research	（Chief）深井　原（Sub chief）早坂孝宏 （3年目）柴田賢吾、脇坂和貴、渋谷一陽、杉山　昂 （2年目）沢田尭史、藤居勇貴、金沢　亮、加藤紘一、谷　道夫、大平将史 （1年目）太田拓児、加藤拓也、坂本聡大、志智俊介

2019年年間業績一覧

○手術：615例
2019年総手術件数：
・消化管：221例
・小児　：199例
・肝臓　：142例
・胆膵　：　23例
・移植　：　30例

○学会発表：180
国内：137
国外：43

○論文発表：53
和論文：29
英論文：24

消化器外科Ⅰ・週間予定表

	7:30 – 8:30	8:30 – 8:50	8:50 – 13:00	13:00 – 14:30	14:30 – 15:00	15:00 – 17:00	17:00 –
月曜日	術前症例検討会	当直報告		総回診	学生指導（縫合結紮実習）		・薬剤説明会 ・MRIカンファレンス ・ほくたけセンター
火曜日	リサーチカンファレンス	当直報告	手術日/病棟業務				
水曜日	術前症例検討会	当直報告	手術日/病棟業務				
木曜日	M&Mカンファレンス 学会予演会	当直報告	手術日/病棟業務				・消化器腫瘍内科との合同カンファレンスなど
金曜日	抄読会 /術前症例検討会 （予備日）	当直報告	手術日/病棟業務	13:00 クルズス			・消化管カンファレンス

2019年ジャーナルクラブ

1月18日　高橋　直規　クロストリジウム・ディフィシル感染症の最新の動向
1月25日　蒲池　浩文　Metforminの（膵）癌治療への応用 - targeting cancer stem cell -
2月1日　市村健太郎　抗菌薬Q&A
2月15日　南波　宏征　DICの病態と治療変遷
3月1日　田仲　大樹　イレウス・腸閉塞と高気圧酸素療法 Hyperbaric Oxygen Therapy（HBOT）
3月8日　神山　俊哉　Plate system・レネック・肝門部胆管の解剖臨床応用
5月10日　旭　火華　血液透析患者の腹部臨時手術
5月17日　宮岡　陽一　第59次日本南極地域観測隊に参加して
5月24日　島田　慎吾　腸内細菌叢と疾患 最近言われていること
5月31日　市川　伸樹　直腸癌術前化学療法の有用性に関する検討
6月14日　荒　桃子　本当にいい鎖肛根治術とは
6月21日　吉田　雅　大腸癌術前の機械的腸管洗浄について
7月5日　今泉　健　骨盤解剖と直腸癌外科治療
7月12日　近藤　享史　Biliary atresia up to date ～手術からみた小児外科医にできること～
7月19日　浜田　和也　diverting ileostomyの合併症～ outlet obstruction ～
7月26日　近藤　享史　Biliary atresia up to date
8月2日　折茂　達也　肝臓外科とサルコペニア
8月29日　渡辺　正明　膵島移植　Pancreatic Islet transplantation
9月6日　厳築　慶一　免疫抑制
9月27日　深澤　拓夢　心房細動患者の周術期抗凝固療法
10月4日　本多　昌平　腸回転異常症
10月25日　後藤　了一　副刺激経路（CD40-CD154）と移植
11月8日　本間　重紀　ロボット手術 ～直腸癌について～
11月29日　山本啓一朗　直腸手術における腹腔内，経肛門ドレーンについて
12月6日　川村　典生　Liver Transplantation for locally advanced Hepatocellular Carcinoma
12月13日　蒲池　浩文　肝門部の解剖

2019年M&Mカンファレンス

1月10日　小　児G　救命できなかった新生児壊死性腸炎の一例
2月7日　移　植G　生体肝ドナー開腹後、生検所見にて肝移植を断念した一例
2月14日　消化管G　直腸癌術後縫合不全の一例
2月28日　移　植G　生体肝ドナー胆管狭窄の症例
3月7日　肝胆膵G　術中出血から肝不全となった肝門部胆管癌の1例
3月14日　消化管G　術後ヘルニアを発症したpersistent descending mesocolonの1例
3月28日　小　児G　PICCの迷入を認めた2例
5月16日　移　植G　胆管空腸吻合不全の1例
5月23日　肝胆膵G　術後出血を来した肝切除の1例
5月30日　消化管G　右側結腸癌術後縫合不全の一例
6月6日　移　植G　小児生体肝移植後、穿孔性腹膜炎、門脈狭窄、ストーマトラブルで難渋した症例
7月4日　肝胆膵G　術中動脈損傷と胆汁漏の一例
8月1日　消化管G　腹腔鏡下ハルトマン術後傍ストマヘルニアの1例
8月8日　肝胆膵G　術後脳梗塞を来した肝細胞癌肋間筋･横隔膜再発の1例
9月5日　肝胆膵G　GIST肝転移に対する肝切除の術後出血
9月26日　移　植G　脳死肝腎同時移植の術後再手術症例
10月10日　小　児G　術後出血
10月31日　移　植G　造血幹細胞移植後に発生した類洞閉塞症候群による急性肝不全に対し、生体肝移植を施行し死亡した症例
11月21日　小　児G　狭窄形成術後の縫合不全

２０１９年教室紹介

〈診療部門〉

肝胆膵グループ

《スタッフ紹介》

神山 俊哉（チーフ）

今年度も、数多くの症例を御紹介いただき、今年も肝切除mortality zeroを達成できました。今後は、さらに胆膵外科手術手技、周術期管理を進歩させ、後進へ伝え、多くの肝胆膵外科スペシャリストを育てたいと思っています。高度進行肝細胞癌、胆管細胞癌、大腸癌肝転移に対する肝切除を中心としたmultidisciplinary treatmentを確立したい。特に発展が著しい分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤のneoAdjuvant、Adjuvantとしての可能性を探り、新たな肝細胞癌外科治療を確立するほか、アドバンス腹腔鏡下肝切除、肝エキノコックス症に対する減量手術成績の向上にも取り組みたい。研究では、肝細胞癌の進展におけるβ-カテニン非依存性経路を活性化するWnt5aの発現と、肝細胞癌の生物学的悪性度、予後との検討を指導し、機能性食品AHCCの肝細胞癌切除後再発予防効果の検討も行っている。

蒲池 浩文（サブチーフ）

肝胆膵グループの胆膵領域を担当しています。胆膵悪性腫瘍を主に治療しておりますが、今年度はご紹介いただいても切除適応からはずれてしまう患者さんが多く、肝門部領域胆管癌はHPD2例を含め例年と大差はなかったですが、膵癌の切除症例が減少したことが特記されます。現在、局所進行膵癌に対するメトホルミン併用NACRTの特定臨床試験を実施中ですが、中間解析での3年生存率は、全エントリー症例では79.3%、切除症例に限定しては90.1%と非常に期待できる成績になっております。来年度から病院主導の臓器別診療体制の中で胆膵領域は診療体制に変化があるかと思いますが、このプロジェクトを含め、変わらずご支援いただければ幸いです。

折茂 達也（サブチーフ）

臨床では肝胆膵疾患の外科治療を担当しています。大学で肝胆膵外科を専門として7年目になります。赴任当時の教室年報には大学での拡大手術に驚いたと記載しましたが、今や全く普通に日常的にそのような手術が行われており、時間の流れを感じています。研究では何とか質の高い英語論文を作成しようと考えていますが、結果が伴っておらず反省しております。今後は、さらに全体を見渡す視野を持つことが求められるため、自身のみならず全体の発展を見据えて尽力いたします。

島田 慎吾（サブチーフ）

島田慎吾です。自分が大学に戻ってきて5年目になってしまいました。時間の流れの速さを感じております。今年度は、4月より特任助教にさせていただきました。これまでの日常臨床業務、研究に加えてグループ、教室全体に関わる仕事をしたり、自分の中で深く考えたりさせていただく貴重な機会が多い年となりました。肝胆膵外科医としては、徐々に習熟してきたかなとは思う反面、やはり手技や判断の点で力不足を実感する場面もあり、より一層の精進が必要であると感じています。研究面では、これまで行った基礎研究・臨床研究が数本の論文として形になった年でしたが、まだまだ満足のいく内容・結果ではなく、地道な努力を続けていくことを目標にしたいと思います。小さなことでも、少しずつ新しいエビデンスを築いていければと思っています。

今後ともグループ、教室全体の発展に寄与できるように微力ながら尽力したいと思います。ご指導よろしくお願いします。

長津 明久（インストラクター）

今年で3年目の肝臓グループ勤務になりました。肝切除、中でも特に腹腔鏡下肝切除を主に担当しています。現在は葉切除や区域切除、亜区域切除へのさらなる適応の拡大と手術の定型化・手術成績の安定を課題として頑張っております。当科での腹腔鏡下肝切除は2001年に始まりましたが、順調に症例数を増加してきており、2019年は過去最多になりました。今後定型化と適応の拡大が済んだ後は、将来的に年に１人くらいのペースで内視鏡外科の技術認定医の申請をグループから申請できるような施設にできればと思います。また、ロボット手術などを含め新しいことに挑戦する気持ちを失わないようこれからも精進して、微力ながら北海道の医療と医局の発展に貢献していく所存です。また個人的なことになりますが、肝胆膵の高度技能専門医の受験資格を得ましたので早急に取得しようと考えております。

旭　火華（インストラクター）

「今は嫌い oh yeahでも私は生きている　簡単に手にはいるほど未来は楽じゃない！」（Superfly Ambitious）を無理矢理今年の自分風にすると、「実験は辛いoh yeahでも自分はまだ院生　簡単に手に入るほど学位は楽じゃない！」ですかね？今年は学位の取得のために医局からチャンスをいただけたので、それを目標に過ごしています。「遠回りしても守るべき道を行け！」（Superfly Beautiful）留年してギリギリ限界ですが、データに対して敬意を持って接している自分には満足しております。直接御指導いただいている武冨教授、病理の畑中佳奈子先生、畑中豊先生、実験の際に快く送り出してくださる肝グループの先生方、御協力くださった一外の先輩後輩方、そして帰ったときに暖かく迎えてくれる家族に感謝の気持ちを忘れないで目標を達成したいと思います。

坂本　譲（インストラクター）

私は、2019年6月末まで肝炎・免疫研究センターで肝臓免疫の研究に従事し、7月より肝胆膵グループに配属となりました。本グループで働き始め約半年が経ちましたが、肝胆膵領域の専門的な知識と技術を少しでも多く学ぼうと毎日必死です。今年度の目標であった研究内容の論文化、ならびに学位申請を行えたことには、ひとまず満足しております。しかしながら、肝胆膵外科医としては修練も始まったばかりであり、研究者としても自分だけで発想し研究を推し進められる能力もありません。来年度は、臨床・研究・教育ともに、何かひとつでも自分に出来ることを身につけるべく、日々の診療に取り組みます。また、今後の研究テーマとしても、肝がんをはじめとした各病態における肝浸潤リンパ球の働きに興味があり、医師だからこそ、外科医だからこそ、自分だからこそ出来る研究、というものを常に模索し検討していく姿勢を忘れないように精進いたします。

現在の取り組み

肝グループ

臨床

1. チームとしての取り組み

北海道の特徴としてHBV関連HCCが多く、大型HCCの外科的治療を行う機会が非常に多く、経過観察されていないNBNC症例も大型が多い。これらの手術は高難度手術とされ、高い技術を要求されるため、手術の安全性の向上を常に目標にしながら日々の臨床を行っている。大型HCCの切除方法の工夫、肝移植の手技（体外バイパス下での肝切除）などを取り入れている。Major肝切除が必然的に多くなることから、新規の肝予備能評価法としてGSAシンチを用いた機能的肝予備能評価、MRIからの肝予備能評価の有用性を検討している。特に発展が著しい分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤のneoAdjuvant、Adjuvantとしての可能性を探り、外科的な減量切除の立ち位置を再検討することにより新たな肝細胞癌外科治療を確立する。また北海道特有の肝エキノコックス症に対する手術成績の向上にも取り組んでいる。一方、肝切除の低侵襲化を目指し腹腔鏡下肝切除を積極的に導入し、アドバンス腹腔鏡下肝切除の手技向上：大肝切除やS7、S8などに存在する難易度の高い術式の定型化を図っている。周術期管理はERASプロトコルをクリニカルパスに導入している。胆管細胞癌では肝門型、末梢型の生物学的特徴の評価とリンパ節廓清の有無を含めた治療方針を検討し、術後Adjuvantとしてのゲムシタビンの有用性の検討を行っている。多発転移性肝癌に対しては、抗がん剤をどのタイミングで行うか、腹腔鏡下同時大腸肝切除など、新しい治療方針の策定を目指している。

2. 術式別手術件数

2018年度は111例であり

肝細胞癌　53例

肝内胆管癌　17例

大腸癌肝転移　30例

肝エキノコックス症　9例

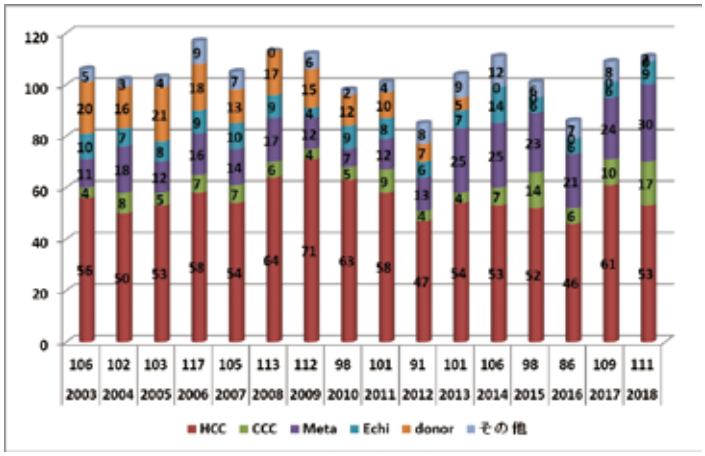
その他　2例

年次別の推移は図に示す通りとなっています。

腹腔鏡下肝切除　16例

平均手術時間　4時間25分

平均出血量　425ml



3. 肝切除症例の合併症発生率

2000年から2018年9月までの肝切除症例は1812例でありClavien-Dindo分類でClass IIIa以上のものを以下に示します。

高ビリルビン血症（T-Bil 10.0mg/dl以上）　10例(0.7%)

後出血　25例(1.4%)

腹水　17例(0.9%)

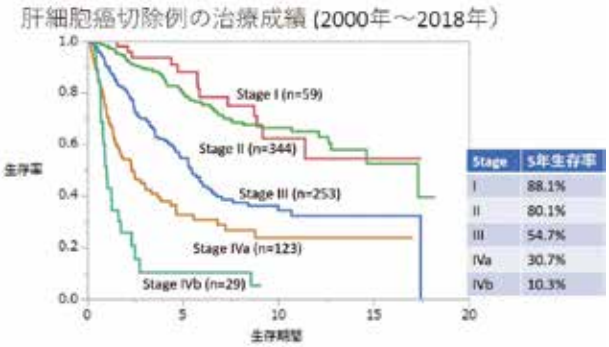
胆汁瘻　114例(6.3%)

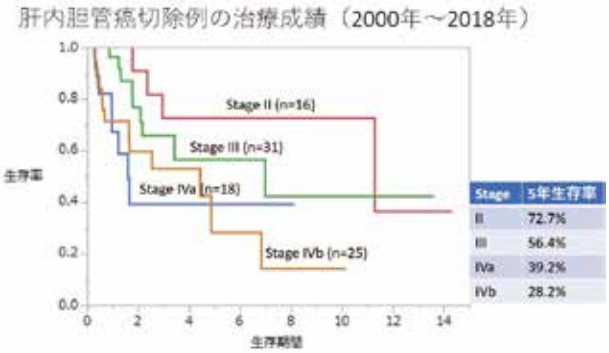
消化管（穿孔、イレウスなど）11例(0.6%)

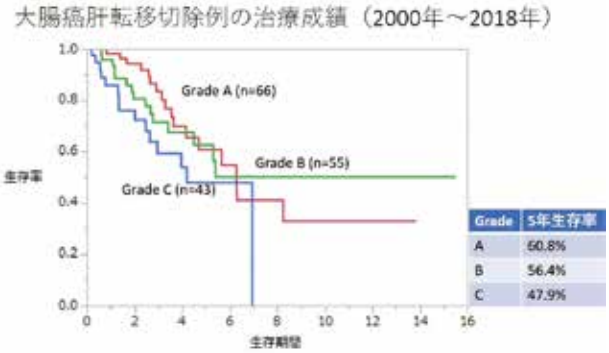
創感染　31例(1.7%)

4. 肝細胞癌、肝内胆管癌、大腸癌肝転移の治療成績

各疾患のStage別、Grade別の成績は図に示す通りです。







研究

1．主な進行中の研究

PRAHAC Test（肝細胞癌根治切除後における機能性食品AHCC摂取による再発予防効果の検討）

機能性食品であるAHCC（Active Hexose Correlated Compound）は、「免疫力を維持・回復させること」に関与するといわれ、免疫賦活作用 、自然免疫（DC細胞）増強作用 があり、AHCCは進行性肝がん患者の生存期間を延長させ、QOLを改善するとも報告されている 。今回, 再発高危険群である進行したBCLC Stage B症例、A症例中高危険群(AP-Factor：AFP×PIVKA-Ⅱ≧10＾5　の患者)に対する肝切除後の再発に対する機能性食品AHCC摂取の意義を検討するために、2016年から50例のエントリーを予定している。

2．その他進行中の臨床研究

1）根治的肝切除又はアブレーション後の再発高リスク肝細胞がん患者を対象に術後補助療法としてのニボルマブとプラセボを比較する無作為化二重盲検

2）初発肝細胞癌に対する肝切除とラジオ波焼灼療法の有効性に関する多施設共同ランダム化並行群間比較試験(SURF trial)(登録終了、現在フォローアップ中)

3）MRI画像からの新たな肝予備能評価法の開発

4）GSAシンチを用いた機能的肝予備能評価の有用性；PTPE前後の変化も含めて

5）高度進行肝細胞癌に対する減量切除と分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤のneoAdjuvant、Adjuvantとしての新たな肝細胞癌外科治療の確立

6）腹腔鏡下肝切除を積極的に導入し、葉切除、区域切除やS7、S8などに存在する難易度の高い術式の定型化

7）胆管細胞癌における肝門型、末梢型の生物学的特徴の評価とリンパ節廓清の有無を含めた治療方針を検討し、術後Adjuvantとしてのゲムシタビンの有用性の検討

8）HbA1cの肝細胞癌切除患者の周術期、予後に対する影響の関する研究

9）高齢者肝細胞癌の臨床病理学的特徴に関する研究

教育

肝胆膵高度技能専門医取得プログラム

内視鏡外科技術認定取得プログラム

肝臓学会専門医取得プログラム

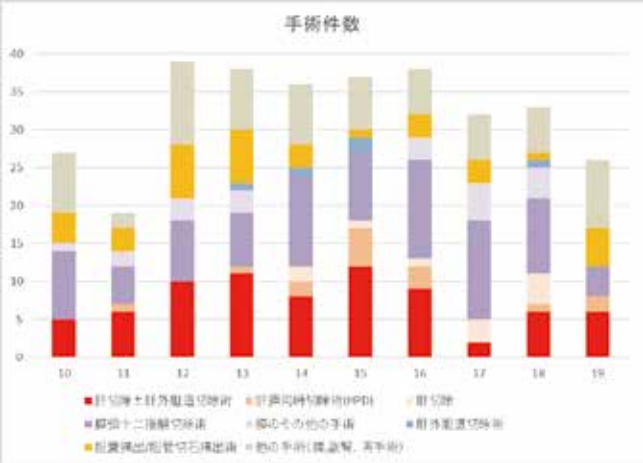
胆膵グループ

1、チームの取り組み

肝胆膵グループのサブグループとして胆膵領域疾患の治療を担当しています。症例としては大学病院という背景もあり、他病院では対応が難しい進行胆道系癌や進行膵癌などの悪性疾患、合併症を有する良性疾患など、ご紹介いただいた症例を治療対象としています。胆道系癌に関しては肝葉切除、血管合併切除を要する胆門部領域の腫瘍が主体となり、膵癌に関しては血管・神経叢浸潤を有するボーダーライン切除症例や、神経叢浸潤が進んだ非切除症例に分類される症例の一部に対し術前放射線化学療法後に切除を行っており良好な成績が得られております。いわゆる肝胆膵外科学会で認定している高度技能手術を対象にしておりますが、中堅の先生にも積極的に手術に取り組んでもらっています。疾患の特性上、ご紹介いただいても切除対象外となってしまう症例も多いですが、マンパワーと技術を要する肝門部領域胆道系癌症例、今後増加していくと考えられ治療成績向上への努力が必要な膵癌症例に関して、臨床・基礎の面からアプローチしています。病院主導の臓器別診療体制が始まる中で診療形態に変化があるかと思いますが、「患者の予後向上を目指す」という根幹的役割を軸に診療を進めていきたいと考えています。

2、術式別手術件数、短期成績、長期成績

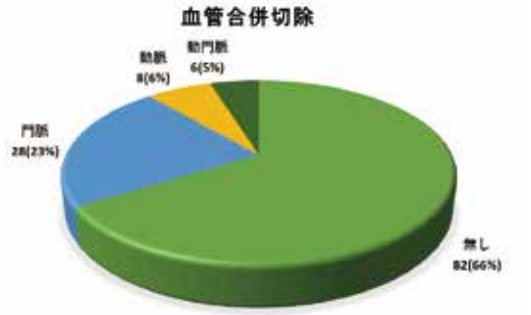
手術件数

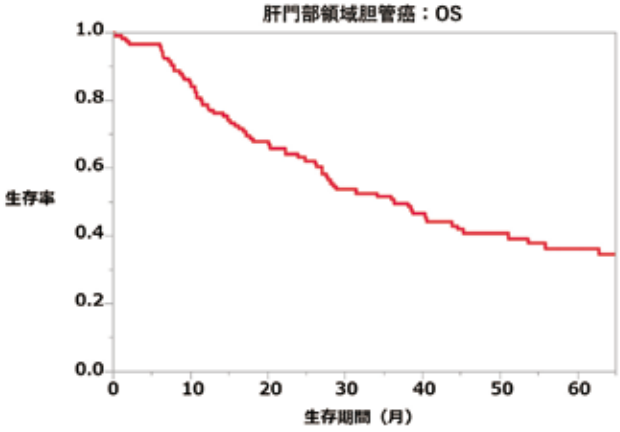


大量肝切除を要する肝門部領域胆道系腫瘍

外科的切除が最も有効な治療を考えられている肝門部領域胆管癌に対しては、その手術適応を拡大させる目的で肝門からの展開が困難な左葉系切除を要する症例に対し、肝実質切離を先行しグリソンを露出後に胆管切離・門脈/肝動脈を分離する術式（TGA: Transparenchymal Glissonean Approach）を考案し切除適応を拡大し治療を行っています。

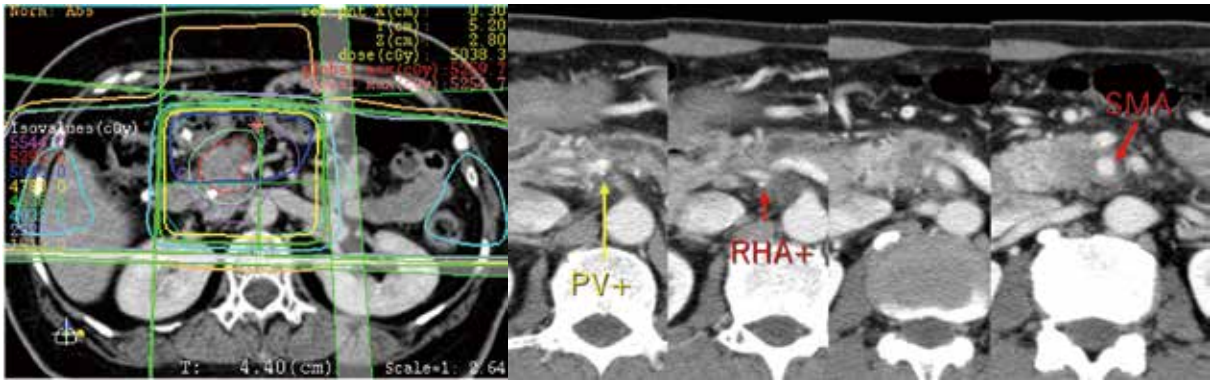
TGA

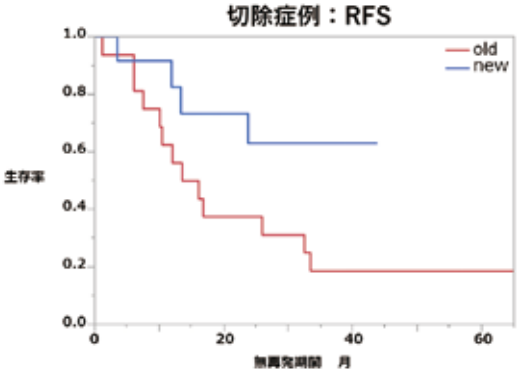


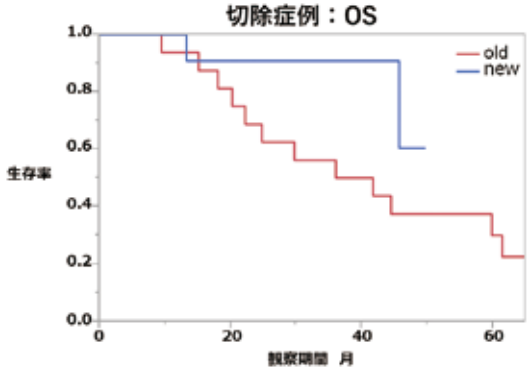


局所進行膵癌に対する術前化学放射線療法

全症例でR0切除が得られており、新規プロトコールによる成績の向上が期待されます。







研究

1．進行中の研究（臨床研究、基礎研究）

臨床

- ✓ 局所進行膵癌患者に対するMetformin併用術前放射線化学療法の有効性の検討（特定臨床研究：jRCTs011180011）
- ✓ 進行胆道癌に対する術前化学療法の検討
- ✓ 胆膵悪性腫瘍に対する術前栄養強化療法の検討

基礎

- ✓ 抗mesothelin抗体を用いた膵癌肝転移予防効果の検討
- ✓ 癌幹細胞を標的とした膵癌術前治療の開発

教育

大学に紹介される胆膵悪性疾患の手術は時間も長く、難易度も高いものが多いですが、すべては基礎的な技術の積み重ねによって成り立っています。特に大切に事はアプローチ法であり、この点に関し術中に理論的な思考回路を口頭で説明することで若手の先生の理解度を上げるように心がけています。また肝胆膵高度技能医取得を目標とした先生が集中的に手術経験を積むことで、当座の目標を成就できるようにしております。

学会発表

・2019/4/18-20第119回日本外科学会　大阪、サージカルフォーラム（8）「胆道-胆道癌-1」大量肝切除を伴う肝門部領域胆道系腫瘍の手術成績と周術期管理の要点　蒲池浩文、折茂達也、長津明久、島田慎吾、旭　火華、後藤了一、神山俊哉、武冨紹信
・2019/6/13-15第31回日本肝胆膵外科学会　香川、肝膵同時切除の周術期管理と成績　蒲池浩文、折茂達也、長津明久、島田慎吾、横尾英樹、後藤了一、神山俊哉、武冨紹信
・2019/7/17-19第74回日本消化器外科学会　東京　肝胆膵悪性腫瘍に対する異時性肝葉膵頭十二指腸切除症例の検討　蒲池浩文、折茂達也、長津明久、島田慎吾、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

論文

Intermittent pneumatic compression versus adding prophylaxis with enoxaparin for preventing venous thromboembolism after laparoscopic surgery for gastric and colorectal malignancies: A randomized multicenter clinical trial.

Hirofumi Kamachi, Shigenori Homma, Hideki Kawamura, Tadashi Yoshida, Yosuke Ohno, Nobuki Ichikawa, Ryoichi Yokota, Tohru Funakoshi, Yoshiaki Maeda, Norihiko Takahashi, Toraji Amano, and Akinobu Taketomi.（投稿中）

移植グループ

《スタッフ紹介》

嶋村　剛（チーフ）

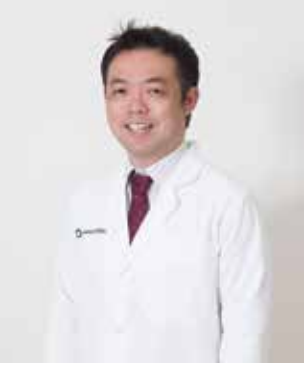
北大病院における第１例目(1991年)の生体肝移植に続き、1997年から本格的に始動した肝移植プログラムに開始当初から参加し、生体肝移植271例、脳死肝移植58例、膵腎同時移植6例、膵単独移植3例に臓器移植医療部部長（実施責任者）として従事しました。肝移植総数は329例となり、2011年に藤堂先生から引き継いだ8年間の術後生存率は生体・脳死肝移植ともに95%以上となりました。2010年の臓器移植法改正に伴い、わが国の肝移植も生体移植から脳死移植にゆっくりと移行しつつありますが、成功率を考慮しつつ生体肝移植と脳死肝移植を症例毎に的確に選択しつつ、関連各科と連携しながら進めてきた結果です。北大病院外科の診療体制の変化に応じた後進へのハンドオーバーを進めています。今後は北大病院における臓器移植全般の推進を目的とした諸活動に積極的に参加する予定です。

後藤 了一（サブチーフ）

2019年の生体肝移植は6例実施し、4例が胆道閉鎖症（BA）に対する移植でした。4例のBAの症例のうち１例はcarryoverの成人BAでしたが、残りは小児症例で、生体移植ならではの医療を実践できたと感じています。脳死肝移植は5例の実施になりましたが、今年の5月よりアロケーションシステムがMELD制に変更された影響もあり、high MELDになりやすい原発性胆汁性胆管炎の移植実施が多くなりました。特に腎不全を伴う症例が多く、当院で初となる肝腎同時移植も実施しました。今後は益々このような症例が多くなると予想されます。腎移植チームを含め、当院の強みである診療科を横断した`one team’としての移植医療を提供し、一人でも多くの症例を救命できるよう、継続・努力していきたいと思います。研究面ではグラフト微小環境の理解を細胞レベルで進めています。制御または促進すべき免疫細胞の特徴を明らかにすることで、免疫寛容誘導な新たな知見を創出すべく取り組んでいます。

渡辺 正明（サブチーフ）

肝移植で救命する症例を増やすため、内科との連携をさらに推し進めたい。本年は肝腎同時移植を施行できた。泌尿器科と合同で新しい移植領域を広げたい。膵臓移植は本年施行できなかったが、待機患者は増加しており、安定した成績に向けて準備を進める。臨床研究に関しては、肝移植における自己由来制御性T細胞治療を用いた免疫寛容誘導法の多施設共同臨床研究に関わるとともに、肝移植における凝固因子活性の検討や、小児肝移植後患者に対する弱毒生ワクチンの安全性に対する臨床研究を進めている。基礎研究は、渋谷一陽先生と共に肝細胞移植の新しい知見を報告できる見込みである。今後も細胞移植、膵島移植の基礎的研究をさらに進め、新しい知見を発信していく。現在、これまでの膵島移植の成績向上に向けた基礎的研究を踏まえ、北大病院の臨床膵島移植施設認定に向けて申請を行なっている。新しい選択肢としての細胞移植医療を提供すべく準備を進めたい。



川村 典生（サブチーフ）

2010年に改正臓器移植法が施行され、2020年で節目の10年を迎えます。2010年には年間28例であった脳死肝移植が、2019年(12月中旬現在)では83例まで増加しました。内科の先生の間にも「肝移植」という治療オプションが絵空事ではなく現実的なものとして受け入れられつつあるのが感じられます。それに伴い、これまで内科で「緩和ケアの対象とされていた末期肝不全の患者」を「移植待機患者」として当院で受け入れることが増えてきております。少しずつですが臓器不全診療・移植医療が前に進んでいる一方で、当院の脳死肝移植数は今年まだ５例であり、まだまだ頑張らなくてはと思っております。

研究面では、ILTS（国際肝移植学会）に私の他、原田拓弥先生、市村健太郎先生の演題が採択されカナダ・トロントで発表してくることができました。来年はこの3題を英文論文として上梓することを目標としております。

巌築 慶一（インストラクター）

今年は3月でリサーチを終え、4月から3年ぶりの病棟勤務となりました。臨床と研究との両立が大学勤務者に課せられた仕事と捉え、日々の診療にあたっています。臨床面では、術後合併症ゼロと、術前症例の待機中死亡ゼロを目標として診療にあたっていますが、臓器不全患者の全身管理の難しさを実感しております。特に脳死ドナーのアロケーションシステムの変更により予後不良な症例に対しての移植が増加し、そのような患者の耐術能を維持しながら移植を待ち続けることがより重要になっています。研究面では、リサーチでの結果を論文としてサブミット出来たことは一つの成果だと思いますが、時間の読めない臨床のさなかに時間の制約の多いin vivoの実験を行うことがなかなか難しく、実験をさらに前進させることが出来なかったのが不満です。当教室の売りである、Bench to bedsideの研究を発展させるべく、これからも頑張っていこうと思います。

現在取り組んでいること

臨床

チームの取り組み

移植グループはチーフ嶋村のもと、サブチーフ 後藤、渡辺、川村、インストラクター 巖築、ローテートの後期研修医、移植コーディネーター 山本、柏浦、臨床工学技士 太田、岡本、千葉と共に、質の高い移植医療「0(ゼロ) morbidity and mortality」の提供を目指して日々精進しております。2019年は6例の生体肝移植（小児(18歳以下) 4例、成人2例)、5例の成人脳死肝移植を実施し、総計で11例、当院の生体移植は269例、脳死58例、ドミノ2例でトータル329例 (図１)となりました。最近5年間の生体肝移植の成績は約9割の生存率（図２）で、脳死肝移植は法改正後の40例で5年生存 95%（図3）と良好な成績を維持しています。2019年には脳死移植のallocationシステムがMELD制に変更となり、MELD高値の重篤な肝不全症例は優先的に脳死肝移植実施可能となりました。腎不全を伴う末期胆汁うっ滞性疾患は特にHigh MELDになるため、脳死肝移植の実施が増加しています。中でも透析期間が長く、不可逆的な腎不全症例は腎移植も適応となり、2019年5月には当院初となる肝腎同時移植を実施致しました。また2019年から肝硬変に対しても直接作用型の抗HCV薬が認可され、移植前から肝炎ウィルスの根絶が可能となりました。10月にはHCV肝硬変症例に対し、移植グラフトがウィルスに暴露されることのない、より安全な治療戦略に基づく生体肝移植を実施致しました。医療機関や複数の診療科にまたがるチーム医療の強化、綿密な治療計画の実施、脳死ドナーからの臓器提供推進・啓蒙活動の推進により、更なる移植成績の向上と包括的な移植医療の発展に努めています。

図1. 肝移植症例数 北海道大学病院 (1991.12-2019.11)

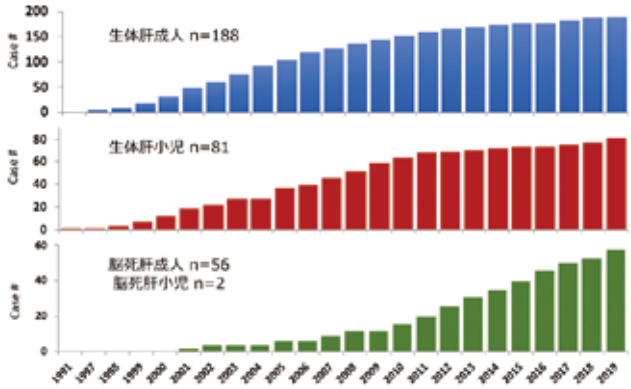


図2 A. 成人生体肝移植　B. 小児生体肝移植

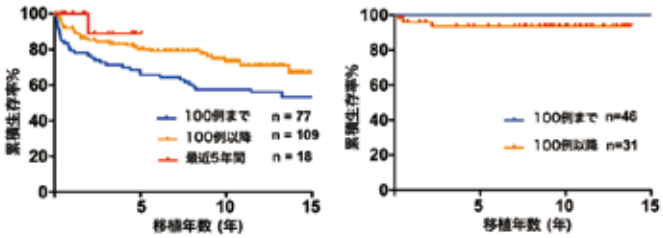
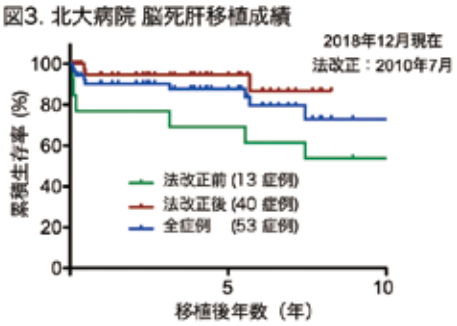


図3. 北大病院 脳死肝移植成績



研究

臨床研究

新しい肝細胞癌の移植適応“5-5-500基準”の創設

肝細胞癌に対する移植適応は長らくミラノ基準が保険適応とされていましたが、ミラノ外でも移植可能な症例が少なからず存在することは知られていました。そのためミラノ基準に代わる拡大基準の提唱が求められていましたが、当グループチーフ 嶋村を中心に本邦の多施設から集積した肝細胞癌に対する肝移植症例を解析した結果、生物学的悪性度を反映するとされる腫瘍マーカー、AFPを組み入れた新しい基準：腫瘍の最大径 5cm以内、腫瘍個数 5個以内、AFP 500ng/ml以内とする、いわゆる5-5-500基準を採用した時にミラノ基準相当の5年再発率 10%以下で、ミラノ基準よりも20%適応を拡大できる可能性が示されました。この研究成果は2019年のTransplant international（Shimamura T, et al）に報告され、早くも本邦の肝細胞癌に対する移植医療における新しい保険適応の基準として認可されました。北海道発の新しい基準が全国で認められ、今後データが集積されることになります。北海道大学から発信した新基準が国際的にも認められるか、注目されています。

生体肝移植における脾摘の功罪

生体肝移植後の早期グラフト機能不全の最大の要因としてSmall-for-size syndrome(SFSS)が挙げられます。SFSSは移植肝グラフトに対して相対的に過剰な門脈血流が流入することにより発生する障害であり、SFSSの発生予防として有効な手段に脾摘があります。しかし脾摘には術後門脈血栓症の発症、Overwhelming Post-Splenectomy Sepsis、膵液漏など重篤な合併症が起きうるため適応は慎重に決定されなくてはなりません。その適応決定の指標として、門脈血流/Graft Volume(GV)>250ml/min/100gGVがSFSSの発生予防に有用であり、またこの基準を満たさない症例では脾摘は必須ではないことを、国際肝移植学会(ILTS)ならびに日本肝胆膵外科学会にて報告させて頂きました。今後はこの研究結果を臨床応用させて頂き、生体肝移植の安全性向上に努めたいと考えています。

小児肝移植後患者に対する弱毒生ワクチンの安全性に対する臨床研究

胆道閉鎖症などの肝不全患者に対する唯一の根治治療として小児肝移植が実施されていますが、肝移植後には終生の免疫抑制剤の内服

が必要です。しかし移植後、特に学童期にvaccine preventable disease（VPD）へ罹患し、重大な感染症へと至ることがあります。移植前のワクチン接種が推奨されていますが、小児肝移植はワクチン接種を完遂する前に行われることが多く、移植前に予防接種を完了できるケースは限られています。麻疹、風疹、水痘、ムンプスは弱毒生ワクチンが用意されており、ある一定の条件を満たせば移植後であっても安全かつ有効な接種が可能であると報告されています。2014年に発表された「小児の臓器移植および免疫不全状態における予防接種ガイドライン」（日本小児感染症学会監修）でも、固形臓器移植後の生ワクチン接種は原則として推奨されないものの、弱毒生ワクチンである水痘・麻疹・風疹・ムンプスワクチンについては、流行状況などを加味したうえでの実施を考慮すべきであると提言されています。弱毒生ワクチン接種の安全性と有効性を体系的に検討すべく、当院でフォローしている肝移植後小児レシピエントの各抗体価を測定し、抗体価が陰性もしくは弱陽性の肝移植後の児に対し、それぞれの疾病に対する弱毒生ワクチンを投与し、その有効性、安全性を評価しています。

臨床膵島移植の施設認定に向けて

１型糖尿病に対する膵島移植は、膵臓移植とともに、糖尿病に対する移植による根治的治療法です。欧米では一般的な移植医療として確立しており、その移植成績も膵臓移植と同程度にまで向上しています。本邦では、これまで先進医療として実施され、それらの良好な治療成績から早期の保険収載が期待されています。移植チームでは、これまでおよそ10年間にわたって、膵島移植の成績向上を目指す小動物を用いた基礎的研究、さらにサル膵島移植における新規抗体の効果を検討し、報告してきました。これまでの蓄積された経験や研究成果を踏まえ、北海道大学病院における臨床膵島移植の施設認定に向けて準備、申請を行なっています。１型糖尿病患者さんに膵島移植という新たな治療選択肢を提供するため、準備を行なっております。

抗ドナー特異的HLA抗体のグラフト線維化への関与

移植後は生涯にわたる良好なグラフト機能の維持が必要ですが、長期成績改善のためのモニタリング、治療計画が見直されつつあります。特に移植後長期経過後に検出されるドナー HLAに特異的に結合する抗ドナー HLA抗体に対する治療戦略が注目されています。最近の当科のデータ解析により、de novoで出現するドナー HLA抗体症例の中でもドナー年齢、グラフト年齢が高齢の症例は線維化の進行に関与する可能性が示唆され、第74回日本消化器外科学会総会（2019年）で報告致しました。今後、ヒト化マウスなどの基礎研究に基づく抗ドナー抗体の関与を明らかにしたいと考えています。

その他進行中の研究リスト

1．肝移植における自己由来制御性T細胞を用いた免疫寛容誘導法の多施設共同臨床研究
2．肝移植後の免疫モニタリング法開発に関する研究
3．脳死肝移植待機患者の栄養評価および栄養療法の最適化に関する臨床研究
4．小児肝移植患者に対する、疾患・服薬教育システムの確立
5．血液型不適合肝移植の確立
6．肝移植後の微小血管傷害（TMA)に対するアンチトロンビンIIIの効果に関する研究
7．50歳以上ドナーを用いた生体肝移植におけるレシピエント救命のために必要な因子とドナーリスク
8．生体肝移植ドナー安全性についての研究
9．膵臓移植後の１型糖尿病再発についての多施設共同研究
10. 血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者の肝移植に関する研究：厚労省エイズ対策事業・江口班
11. 多施設共同研究による肝移植後肝炎ウイルス新規治療の確立と標準化：前原班
　・肝移植後のde novo肝癌発生と肝炎治療に関する評価
12. CKDに対するDAA, HBVに対するワクチン, 拒絶反応とDAAなど。
13. 原発性胆汁性胆管炎に対する肝移植後予後因子に関する多施設前向き研究（多施設共同試験）
14. 生体肝移植後リンパ増殖性疾患の全国調査
15. 肝移植後サーティカン®（シロリムス）に関する安全性、腎機能保護効果の検討
16. 肝移植後原発性硬化性胆管炎再発予防のための免疫抑制治療の検討
17. 肝移植後de novo悪性腫瘍の発生についての研究
18. 臓器移植における抗体関連拒絶反応の新規治療法（リツキサン）の開発に関する研究（多施設共同試験）
19. 切除不能な大腸癌肝転移に対する生体肝移植（多施設共同試験）
20. 切除不能な肝門部胆管癌に対する生体肝移植（多施設共同試験）

教育

肝移植については大学以外で学ぶ機会が無いため、ローテートで回ってくる後期研修医、学生には、移植適応、本邦の脳死肝移植のシステム、移植前の非代償性肝硬変、劇症肝炎の管理、予後予測、移植後の血流評価と感染対策、脾腎シャントなどの側副血行路、術式を考慮した動脈・門脈の解剖など、基本から理解してもらうように努めています。最近は移植チームスタッフでCASTを利用した解剖、術式と定型手技を確認し、研鑽を積んでいます。後期研修医の先生方には、世界最高峰の移植施設であるアメリカのCleveland clinicやMGHなどの移植施設へ短期留学（2週間）し、海外の臓器移植の現場に触れる機会があります。また脳死ドナーの臓器摘出の際には大

学院生の先生方と摘出チームを編成し、若い先生方にもドナー手術の経験を積んでもらっています。またチーフ 嶋村が中心となり、北海道の移植医療を推進すべく、道民に対して移植医療について関心を持ってもらう機会を創出しています。道内の消化器内科、肝臓内科Drとは症例カンファランス「肝不全懇話会」を約3ヶ月に一度開催し、北海道の肝不全の治療成績改善に努めています。今後の課題として、北海道の未来の肝移植を担う逸材を育てるために特化したカリキュラムの構築が必要と考えています。

消化管グループ

《スタッフ紹介》

本間 重紀（チーフ）

今年は新しい術式の導入をおこないました。da Vinciを用いたロボット支援下での直腸癌手術と、経肛門的直腸間膜切除術(TaTME：Transanal total mesorectal excision)です。両術式とも骨盤内、特に肛門から下部直腸までの数センチをどのように対応していくかという命題を解決するためのものです。即ち、癌の根治性を高めることと、可能であればQOLを損なわずに肛門を温存することです。新規術式を導入するうえで最も重要なことは、患者さんの安全性の担保です。幸い大きなトラブルなく両術式とも導入することが出来ました。麻酔科医、看護師、臨床工学士の皆様のご協力の賜物です。本当にありがとうございました。手術時間の延長に伴う手術件数の減少が懸念されましたが、初発大腸癌切除症例数は過去最高の症例数を達成することが出来ました。両術式の安定導入、定型化をおこない、新規術者の輩出、第一外科関連施設での安全な導入と普及に協力していきたいです。

地域の先生方からのご紹介、ご支援をいただき、着実に手術件数を積み上げてきております。安全第一をモットーに、また迅速に対応できるよう、グループ一丸となって尽力いたします。

第一外科関連施設の皆様とともに、多施設共同臨床試験をおこなっていき、北海道から独自のエビデンスを発信できればと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

吉田　雅（サブチーフ）

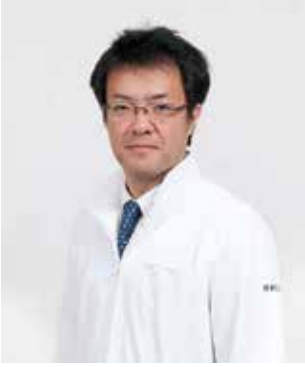
今年は、ロボット支援下直腸切除、Ta-TMEを用いた経肛門的手術などの新しい手術手技を積極的に行った年でした。安全に手術を遂行出来るのはもちろんですが、肛門機能などのQOL向上、生存率向上などのメリットを患者さんに還元できるレベルまで手術の精度を上げていけるよう、チームで更に前進して行きたいと思っています。新しいことをやりっぱなしにするだけでは無く、学会発表や論文で成果を発表して参ります。個人的には、2017年から進めてきた特定臨床研究TLUMP試験が、2020年で症例集積が終了する予定です。試験実施への手続きや有害事象への対応など大変なことが目白押しでした。ご協力頂いている皆様へ恩返しが出来るように、良い結果をまとめたいと思います。

市川 伸樹（サブチーフ）

臨床での収穫は、直腸癌に対するロボット手術と国立がんセンター東病院への短期留学でした。ロボット手術では関節機能を生かした効率の良い展開により、質の高いTMEの可能性を感じています。東病院では、直腸癌への経肛門アプローチと拡大手術を多く見せて頂き、視野が格段に広がりました。引き続き直腸癌の手術を追求して参ります。

研究では、関連病院の先生方との共同研究（R-NAC01試験主評価、切除不能大腸癌原発切除による免疫変化と予後、大腸癌肝転移切除での術前化学療法、腹腔鏡下大腸切除における技術認定の有用性）が漸くゴールにたどり着きました。忙しい日常臨床の間で多くの時間と労力を割いて御協力くださった先生方には心より感謝申し上げます。次年度は、①R-NAC02のキックオフ、②全国展開の研究会で事務局をしている臨床研究の遂行、③関連病院の先生方との良質低エフォート共同研究の体制作りが目標です。

今後とも御指導の程、宜しくお願い致します。

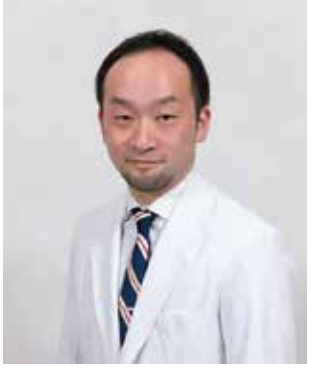


宮岡 陽一（インストラクター）

4月より大学病棟消化管グループでインストラクターとしてお世話になっております宮岡陽一です。3月まで1年半近く南極観測隊員として南極で滞在し臨床から遠ざかっておりましたので、様々な方にご迷惑をおかけした1年になったと反省しております。学会発表・ダヴィンチによるロボット支援下直腸切除術やTaTMEといった最先端の治療に触れる機会を頂くことで徐々にではございますが、医師としてのスキルや勘を取り戻しつつあります。

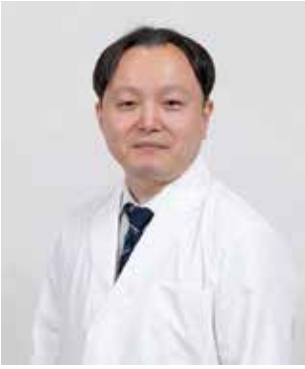
現在大学院生でもあり、現在南極で採取した隊員の便の腸内細菌叢解析を行っております。来年度中に論文としてまとめ上げ、面白い報告ができるよう努力致します。

私の強みは南極で医療職以外の職種の方と密に接する機会が多く、様々な方の考え方を学べた事です。臨床や研究は勿論の事、他者とのコミュニケーションをうまくとりつつ円滑な業務が行えるよう微力ながら尽力いたす所存ですので、何卒よろしくお願い申し上げます。



今泉　健（インストラクター）

今年度は、4年ぶりに大学病棟で勤務させて頂き、大学でのロボット支援下手術の再開や経肛門内視鏡下直腸切除術 (TaTME) の導入などに関わらせて頂き非常に良い経験をさせて頂きました。個人的には、大腸肛門病学会・消化器内視鏡学会・内視鏡外科学会の専門医・技術認定医の受験や学位申請のための準備など学術的な面での負担が大きく臨床との両立に苦労しましたが、幸い学術面では良い結果を得られていますので、この経験を生かして今後は臨床と更なる学術活動に邁進していきたいと思っています。現在、私が携わっているProjectは、「局所進行直腸癌に対するメトホルミン併用術前化学放射線療法に関する多施設共同試験」、「腹腔鏡手術トレーニングプログラムの効果の検証」、「大腸癌術前診断における経皮的超音波検査の有用性に関する後ろ向き研究」になります。それぞれ進捗をご報告できるように尽力してまいります。今後ともよろしくお願い致します。



松井 博紀（インストラクター）

今年度から消化管グループに配属されました松井 博紀と申します。インストラクターとして臨床業務に従事するとともに、大学院生として臨床研究を行っております。臨床では大腸癌の腹腔鏡手術を中心に学んでおります。関連病院で大腸癌に対する腹腔鏡手術の執刀経験をある程度させていただき、それなりに腹腔鏡手術ができるようになってきたと思っておりましたが、大学でエキスパートの先生方の手術を目の当たりにし、自身の未熟さを痛感させられる毎日を送っております。また、臨床研究では大腸癌の新規予後予測因子である線維性癌間質反応(DR)と低分化胞巣(PDC)に着目し、当科の大腸癌症例においてもそれらが予後の層別化に有用であることを確認した上で、それらの因子によって予後の違いが生じるメカニズムを解明すべく研究を継続しております。大学病院という恵まれた環境で臨床、研究に携われることを感謝し、自己研鑽をして参ります。

グループでの取り組み

臨床

1、チームの取り組み

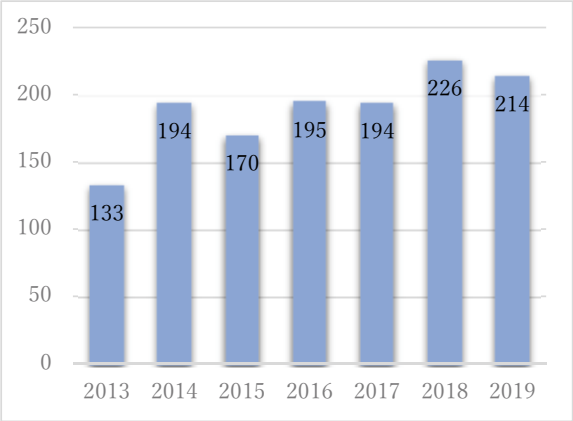
本年も、チーム一丸となって、更に質の高く、術後合併症ゼロを目指した安全な手術を追求し、地道に症例を積み重ねて参りました。本年の総手術件数は214件、初発大腸癌手術切除件数120件で、大腸癌手術症例は増加傾向を維持しております。この中で直腸癌は64例と半数以上を占める事が特徴です。また、放射線化学療法施行直腸癌症例や、再発大腸癌症例・局所浸潤癌症例における拡大手術、潰瘍性大腸炎に対する大腸全摘、術前併存疾患の多い症例に対する手術も鏡視下手術を基本として積極的に行っております。初発大腸癌切除における鏡視下手術は95.8%で、開腹移行率3.4%、合併症4.3%、縫合不全1.1%と良好な短期成績が得られております。今後も、現状に甘んじることなく、良質な手術を提供して参りたいと思います。

また、本年は、TaTME（経肛門全直腸間膜切除）、ロボット支援手術を導入し、それぞれ23例、28例を施行しました。TaTMEでは、これまで術者の手の内でしか分かり得無かった会陰操作を手術チーム全体で視認しながら正確な剥離ラインでISR（括約筋間直腸切除術）が行えるようになりました。また、狭骨盤や肥満症例では特に、より口側でも経肛門的TMEの有用性が期待されます。ロボット支援手術では、関節機能を生かし、特に骨盤深部での展開が効率よく行い得る為、より精度の高い直腸癌手術が行えており、今後の直腸癌手術で更なる成績向上の可能性を感じます。今後、症例数を重ね、両術式を円熟させて参ります。

2、術式別手術件数、短期成績、長期成績

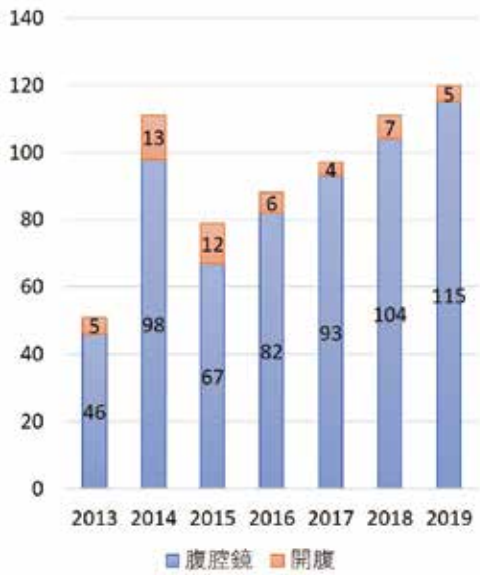
（年間全手術件数）

年	全体
2013	133
2014	194
2015	170
2016	195
2017	194
2018	226
2019	214



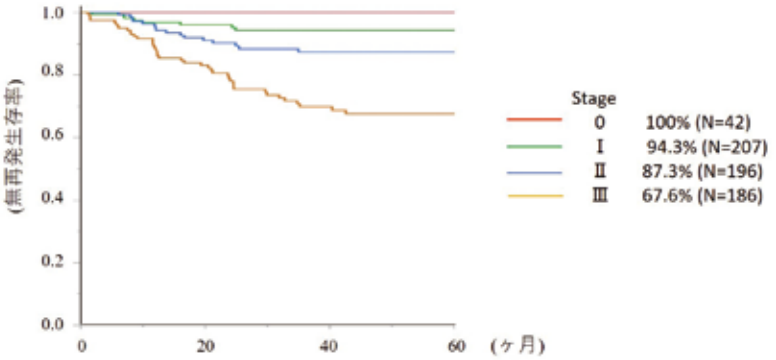
（初発大腸癌手術件数）

年	腹腔鏡	開腹
2013	46	5
2014	98	13
2015	67	12
2016	82	6
2017	93	4
2018	104	7
2019	115	5



短期成績　初発大腸癌切除症例（n =760）

年齢（才）	68(60-75)
性別　男性/女性	58%/42%
BMI（m^2/kg）	22.5（20.2-24.8）
結腸/直腸	60%/40%
Stage 0/Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ	6%/27%/26%/24%/17%
D1/D2/D3 郭清	6%/28%/66%
ASA　1/2/3	18%/71%/11%
手術時間（min）	181（146-235）
出血量（mL）	0（0-35）
開腹移行	3.4%
リンパ節郭清個数（個）	16（10-23）
全合併症(G3 以上)	4.3%
縫合不全	1.1%
再手術	2.8%



研究

1．現在企画中の研究

非糖尿病患者の進行直腸癌を対象としたメトホルミン併用術前化学放射線療法の安全性・有用性に関する多施設共同試験

局所進行直腸癌に対する世界的な標準治療は術前の化学放射線療法である。この術前治療にて病理学的完全奏功（pCR）となった症例は有意に予後が良好なことが報告されているが、現在のレジメンのpCR割合は10-15%前後である。このpCR割合の向上を目的として、糖尿病治療薬であるメトホルミンを併用する臨床試験を考案した。メトホルミンは、大規模コホート研究にて大腸癌をはじめとした各種固形癌において発癌抑制効果があることや、放射線治療の感受性を高め、免疫系にも作用することで抗腫瘍効果を高めることが報告されている。過去の後ろ向き研究では、直腸癌に対する術前化学放射線療法のpCR割合がメトホルミン内服患者において有意に高率であったことが報告されている。メトホルミンは、インスリン抵抗性を改善させて血糖降下作用を示す薬であり、非糖尿病患者においても安全に使用可能であると考えられている。以上から、非糖尿病患者を対象とした本試験を計画している。

R-NAC試験

R-NAC01試験では局所進行直腸癌において、術前mFOLFOX6療法後4コース施行後の手術の安全性を検討し、グレード3以上の術後合併症が10.5%と許容される結果であった。RNAC02試験では、側方リンパ節の腫大を伴わない局所進行直腸癌を対象に、術前術4コース術後8コースずつのmFOLFOX6療法による補助化学療法を施行し、術後12コースのmFOLFOX6療法に対する、無増悪生存率における優越性を検討する多施設共同無作為割り付け比較試験を想定している。主要評価項目は、3年無増悪生存の割合とし、副次的評価項目は、術前後化学療法の完遂率、術後3年局所無再発率、ステージ別・部位別の3年無増悪生存/局所無再発生存率、末梢神経障害に関するQOLと計画している。この治療戦略によって、潜在的転移症例において局所リンパ節転移のみならず、遠隔転移を抑制し生命予後を改善させる事を目的とする。また、通常、側方郭清や放射線化学療法の適応とならない上部直癌も対象としている事も独創的である。

心血管疾患を有する大腸癌患者に対する腹腔鏡下大腸切除における塞栓性合併症の発症リスクに関する検討

抗血栓薬内服中は出血傾向が強くなる事が懸念される為、適切に抗血栓薬を休薬して手術を行う事が推奨されている。しかし、一方で休薬により塞栓性合併症のリスクが増加する事が再度注目されてきている。例えばアスピリンの中止により心血管イベントや脳梗塞が約3倍に増加するとされ，脳梗塞の発症はアスピリンの休薬10日以内が70%を占める。あるいは、ワルファリン休薬100回につき1回の

割合で血栓塞栓症が発症するとされ，発症すれば重篤で予後不良である場合が多い。このように抗血栓薬使用者に対する手術では，抗血栓薬による出血リスクのみならず休薬による血栓塞栓症発症のリスクにも配慮する必要がある。しかしながら、腹腔鏡下手術後の血栓塞栓症発症イベント発症リスクについては報告に乏しい為、大腸癌患者に対する腹腔鏡下大腸切除での血栓薬常用患者の周術期心臓/脳塞栓性合併症の発症リスク、抗血栓薬休薬期間と合併症発症の関係に関して検討する。

2. 主な進行中の研究

腹腔鏡下大腸切除における技術認定医介入の有用性に関する検討

内視鏡外科学会技術認定制度は日本の腹腔鏡下大腸切除の技術の伝承および質の担保に貢献していると考えられるが、多施設の大規模研究は存在せず、その文献的根拠は乏しいと考えられる。今回2010年1月1日から2013年12月31日までの4年間に当科および関連病院10施設に於いて、ステージ０－Ⅲの大腸癌に対し腹腔鏡手術を受けた患者を対象とし、認定取得医が術者または指導的助手として手術参加した症例（n=586）と参加してない症例（n=842）の成績を比較した。内視鏡外科技術認定医手術参加は、手術時間短縮、術中偶発症、術後合併症率低下（4.6% vs. 7.5%,p= 0.03)、再手術率低下の点において有用で、手技的安全性に寄与していた。また、この認定医の有用性は、特に直腸癌手術に於いて差が大きかった。これらの結果は、Propensity Score Matchingを用いた解析でも同様であった。長期成績では、ｐStageII症例の局所再発抑制において、技術認定医の介入は有用であった（オッズ比12.3, p=0.03)。(BJS Open誌にアクセプト）

TLUMP試験

「腹腔鏡下大腸手術前処置におけるアスコルビン酸含有PEG腸管洗浄剤の有効性と安全性に関する検討（通称：TLUMP試験)」は、2017年に自主臨床研究として開始しました。大腸癌に対する腹腔鏡下手術症例を無作為に2群に割り付け（各群94例)、モビプレップ®、或いはニフレック®を服用します。主要評価項目は「中央判定委員会の評価による腸管洗浄効果の有効率」とし、モビプレップ®のニフレック®に対する非劣性試験です。現在は、北海道大学病院消化器外科Ⅰ、札幌厚生病院外科、岩見沢市立総合病院外科、KKR札幌医療センター外科の多施設共同研究を行っております。2019年2月から、特定臨床研究として研究を行っています。2020年1月5日現在、156例の症例登録が行われており、目標の188例到達まで32例を残すのみとなりました。本年9月の症例登録期間終了日までに何とか達成したいと思っています。

VOLTAGE試験

本試験は、切除可能局所進行直腸癌を対象とし、術前化学放射線療法後の術前待機期間中に抗 PD -1抗体薬投与を行い、手術治療の安全性有効性を検討する臨床第Ⅰb/Ⅱ相試験であり、がんセンター東病院、大阪医療センターと共に多施設共同研究をおこなっている。切除可能局所進行直腸癌に対する世界的標準治療は、術前化学放射線療法(chemoradiotherapy: CRT)と直腸間膜全切除(total mesorectal excision: TME)である。一方、免疫系の負の調節因子をブロックするImmune-checkpoint inhibitorは、他癌種で有効性が証明され、大腸癌においては、抗PD-1抗体薬の効果がマイクロサテライト不安定性と強く関係することや、放射線との併用による治療効果上昇が注目を浴びている。本試験ではカペシタビン(1650mg/m2相当x5日/週)を併用した50.4Gyの骨盤腔照射の後、プロトコール治療としてニボルマブを2週間毎5コース投与し、CRTから14週以内にTMEを基本とした手術を行う。primary endpoint はpCR 割合 で、一般的な10 -15 % のCRT後ｐCR 率に対し、30%以上のｐCR 率が見込まれている。

Eno-LAP試験

胃・結腸・直腸の悪性腫瘍手術では静脈血栓塞栓症発生リスクがあり、薬剤抗凝固療法の対象となる。しかし、静脈血栓症の発生頻度が低い腹腔鏡下手術における薬剤抗凝固療法に対するエビデンスは確立していない。今回、胃・大腸・直腸の悪性腫瘍に対する腹腔鏡手術における術後肺血栓塞栓症予防としての理学的予防法と抗凝固療法(エノキサパリン)の併用療法の臨床的有用性について、理学的予防法単独との無作為化比較試験により検討した。関連病院15施設から448例がエントリーされ、理学的予防法群223例とエノキサパリン併用療法群225例に分け、最終的に前群208例、後群182例を解析した。術後1週目の造影CTで評価した静脈血栓塞栓症の発生頻度は4.1%であり、すべて無症候性であった。2群間での静脈血栓塞栓症の発生頻度には統計学的有意差を認めなかったが、重篤化につながる近位＋肺動脈血栓症の発生頻度に関してはエノキサパリン併用療法群において低い傾向を認めた。(投稿中）

3. その他進行中研究のリスト

1．腹腔鏡下直腸癌切除における技術認定医手術参加の有用性に関する検討 (EnSSURE study)
2．肥満大腸癌患者に対する腹腔鏡下手術の腫瘍学的安全性を評価する後ろ向き試験（LOVERY試験）
3．腹腔鏡下直腸癌術後性機能障害に関する多施設前向き観察研究 (the LANDMARC Study)
4．腹腔鏡下右側結腸切除における挟み撃ちアプローチの有用性
5．腹腔鏡下低位前方切除の難易度と狭骨盤の関係に関する検討
6．炎症性腸疾患活動性関連因子に関する基礎的研究
7．若年性大腸癌の臨床病理学的特徴に関する探索的研究
8．大腸癌において浸潤能を評価する新規病理学的因子である線維性癌間質反応と低分化胞巣に関する研究
9．大腸癌術前深達度診断及びリンパ節転移診断における体外式造影超音波検査の有用性に関する研究

10. 外科医・医学生の実践的な手術手技向上にむけた手術前トレーニング (Off the Job Training) の効果の検証に関する研究
11. 直腸切除に伴う人工肛門造設後合併症に関連した病態の解明

教育

チーム、医局員、学生へ向けて行っている教育活動など

大学内での手術指導の他、消化器外科Ⅰ関連施設への手術応援と手術指導、関連施設でのロボット手術導入の援助を行っております。全道各地へ赴き、教室員の日本内視鏡外科学会技術認定医取得にむけた手術指導にも力を入れております。また、学生、初期研修医、後期研修医に対する鏡視下手術の基本手術手技の指導の為、年間を通して後期研修医を中心に内視鏡外科技術・外科縫合技術をトレーニングするためのプログラムを作成し、若手外科医師の能力向上に努めています。隔週、環境の良いトレーニング施設で自主練習する機会を作っているほか、年1回のWet labo、年3回のブタを用いたAnimal labo、年3回開催の鏡視下トレーニングcompetitionを通し、鏡視下トレーニングを充実させております。本年は、新規ドライボックスタスクとトレーニング成果のフィードバックシステムを整備しました。また、胃・ヘルニア・大腸の腹腔鏡手術の基礎を学ぶ研修医向けVTRカンファレンスを新設し好評を得ています。

<ドライボックスでの腹腔鏡手術のトレーニングタスク>

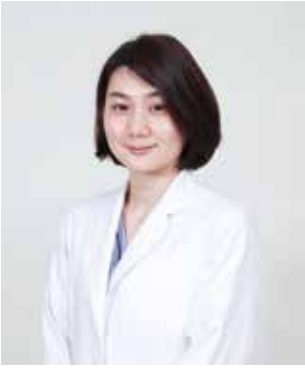
小児グループ

《スタッフ紹介》

本多 昌平（チーフ）

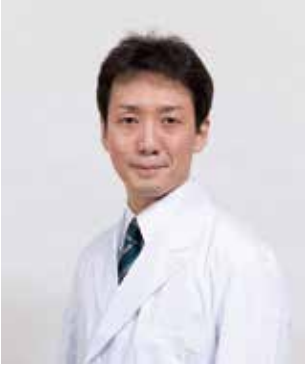
医局長業務により時間と心が擦り減っていく中、獅子奮迅の働きをしてくれている荒医師の下に、2019年4月からは奥村・近藤両氏が当グループの専従として参入してくれました。成人外科とは異なる特殊な領域において、共通言語で話せるメンバーが増えたことは肉体的・精神的に大きなアドバンテージとなりました。グループとして臨床・研究・教育の全てにおいてバランスを保ちながらレベルアップしていくことを念頭に、小児医療が好きだからこそ楽しめる、楽しいからこそ頑張れる環境を実感できるよう、日々努力して参ります。

個人的には当グループを任されて既に5年が過ぎ、目に見える形での成果が求められている事をひしひしと感じます。良い意味でのプレッシャーを自覚しながら、常に向上していく姿勢を後輩たちに魅せられるよう全力で取り組んでいきたいと思います。



荒　桃子（インストラクター）

4月から河北先生を神奈川へ送り出し、奥村先生、近藤先生の加入により新たな体制となり、私自身も小児外科グループに来て3年目となりました。頼もしい後輩が増えたことにより、指導していただくより指導しなければならない立場にシフトしつつあり、指導の難しさを実感しています。診療ではこの1年は様々な理由から再手術を要した症例を数例経験しました。手術の理解、精度を上げるべく、精進を続けていかなければならないと感じております。また、毎週の周産期カンファレンスに参加していますが、新生児早期に手術を要する症例に対する出生前のアプローチや出生後の段取りなど、まだまだ勉強すべきことがたくさんあると感じています。一例ずつ真摯に取り組み、患者さんから信頼してもらえる小児外科医になるべく、今後も精進してまいります。



奥村 一慶（インストラクター）

前年度までは成人外科で研鑽し、今年4月より小児外科専従となりました。小児外科医療、特に体液管理や定型的でない手術が多い事などに関しては不慣れなことも多く、上級スタッフに指導を受けながら、何とかこれまでの経験を活かし子どもたちの力になれたら、と思いながら診療に当たっております。病棟業務、研究テーマ、自分自身の育児など折り合いをつけることに悩みながら過ごしておりますが、武冨教授、本多・荒・近藤先生たち小児外科チームを始め、スタッフの皆様に支えていただきながら過ごしております。

小児外科医療の面白さ（また、苦労でしょうか）は、将来の成長を見据えた手術手技の工夫にあると思いました。まだまだ小児外科医としても駆け出しですが、自分が関わった子たちが将来どのように成長していくのだろう、と考えると楽しみでなりません。それをモチベーションとして、今後も研鑽に努めてまいります。

近藤 享史（インストラクター）

神奈川県立こども医療センターでの2年間の国内留学を終えて、4月から大学病棟に戻りました。入局以来の大学での勤務となり、小児外科は病棟再編により小児病棟に組み込まれているなど、当時とは趣が異なっておりましたが、こども達にとって良い環境に変化していることを感じました。個人的には、昨年までと関わる症例や手術は変わりましたが、新たな視点から生まれる疑問や学びもありました。また、今年度の目標の一つにしていた小児外科専門医試験を無事通過することができ、ほっと胸をなで下ろしている所です。

今年度の残りは基礎研究に従事することとなりました。academic surgeonを目指した基礎体力作りをしていきたいと思います。今後とも引き続き皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

現在の取り組み

研究

①臨床研究

小児肝癌に対する国際共同臨床試験　JPLT4: PHITT

PHITT試験は小児肝がんに対する初の国際共同臨床試験であり、アメリカ(COG)、ヨーロッパ(SIOPEL)、日本(JCCG)の異なる研究グループにおける多施設共同試験の経験を基に、肝芽腫および肝細胞癌の患者群において4つのランダム化比較を行う。現在当院から1症例が登録されプロトコール治療を随行している。

腸管不全に対する小腸移植技術の確立に関する研究

将来的に小腸移植の適応となりうる疾患を対象に、毎年予後調査を施行し日本全国における腸管機能不全患児の情報の集約化がおこなわれている。当院からは2件(MMIHSおよび短腸症候群)の症例が登録されている。

小児固形腫瘍に対する年次登録および予後追跡調査による疫学研究

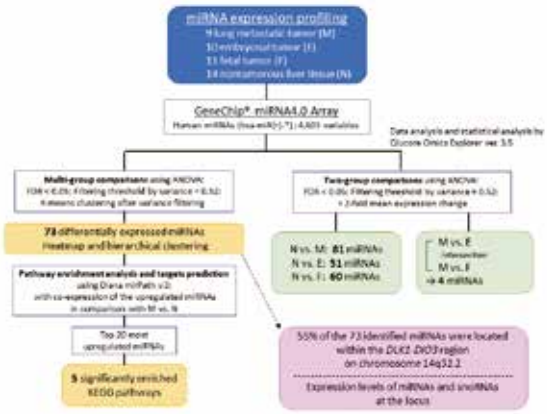
日本小児外科学会悪性腫瘍委員会によって小児固形腫瘍の新規症例および5年毎の追跡調査がおこなわれており、当科が北海道地区代表として運営に関わってきた。2019年症例分より全国登録システムの運用が変更となり、2023年の追跡調査をもって本疫学研究は終了する予定である。

②基礎研究

主研究テーマ：肝芽腫におけるエピゲノム異常の関与

HCC/stemlike subtypeと肝芽腫の共通分子メカニズムに基づく新規治療開発

我々は肝芽腫の発生・進展にエピゲノム異常が重要な働きを占めていると考えドライバーエピゲノム変異を解明する基礎研究をおこなってきた (Honda S. Cancer Sci 2016; PSI 2013)。近年肝芽腫の分岐進化に関わるmicroRNA(miRNA)発現解析によって遠隔転移に関連するmiRNA発現プロファイルを同定した(右図)。その中にはある特異的なインプリンティング領域に位置する遺伝子が多数含まれており、これは肝細胞癌のうちstem cellの特徴を持ち予後不良なタイプ(HCC/stemlike subtype)において認められる現象と共通したmolecular mechanismであることが見出された。そこで、HCC/stemlike subtypeのmiRNA発現およびDNAメチル化のプロファイリングを行うことによって、進行肝芽腫の分子診断およびmiRNA発現制御による肝芽腫の進展抑制を目標とした新規治療法の開発につながるドライバーエピゲノム変異を同定することを目的とした研究をおこなっている。それにより、従来の化学療法・手術治療によって救命不可能であった進行肝芽腫の予後改善につながる研究となりうる。また正常肝発生機構からの逸脱および成人肝細胞からの脱分化が癌化に及ぼす分子メカニズムの解明につながり、創薬治療ターゲットを同定できる可能性がある。



DNAメチル化異常に基づく予後予測マーカーおよび治療予測分子パネルの開発

肝芽腫の腫瘍内不均一性および分岐進化における分子機構の働きに着目し、網羅的メチル化解析によって新規がん抑制遺伝子(OCIAD2,GPR180,PARP6,MST1R)を同定し、いずれも高メチル化が予後と相関することを証明した。一方で、臨床の場に於いては肝芽腫治療の予後を規定する分子マーカーは未だ確立されていない。これまでに同定された肝芽腫の予後予測因子となるDNAメチル化異常を、適切な臨床病理学的因子と組み合わせることによって、肝芽腫の治療層別化に有用な分子パネル作成が可能となると考え、本研究の着想に至った。先行研究によってDNAメチル化と臨床病理学的因子(発症年齢、組織型、stage分類、再発)との間に有意な関連を認めた遺伝子のメチル化率をバイサルファイトパイロシークエンシング法にて測定する。化学療法抵抗性や治療経過の臨床情報を基に、肝芽腫予後予測分子パネル作成のための最適な組み合わせを決定する。更には機能が未確定の遺伝子については、新規がん抑制遺伝子の証明のためにメチル化率とmRNA発現量とを比較し、メチル化による遺伝子発現抑制の関連を解析する。

肝芽腫のCDDP抵抗性におけるDNAメチル化異常

患者検体を用いた網羅的メチル化アレイや細胞株を用いた発現アレイなどのデータより、肝芽腫におけるCDDP耐性遺伝子を見出し、また、術後CDDPベースの化学療法を用いるべきかの指標となり得ることがわかった。切除検体のメチル化を測定し、テーラーメイドな術後化学療法を行えば予後改善に有用であると考えられる。更にはCDDP耐性獲得に細胞表面の糖取り込み輸送体の上昇が関与していることを見出し、それによる治療法開発の研究も進行中である。

今後、DNAメチル化、miRNA発現異常の解析を基にして抽出した各関連候補遺伝子の遺伝子操作を行った細胞株を用いて生存アッセ

イや接着、浸潤、アポトーシスアッセイなどで評価を行い、CDDP抵抗性への関与や転移能獲得機序などを検証していく方針である。

教育

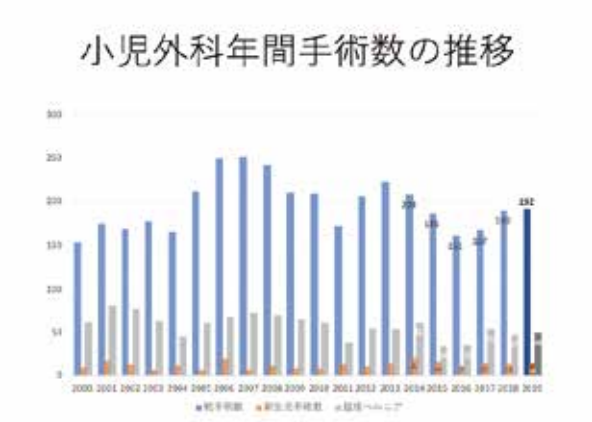
われわれは、小児外科臨床の問題点や疑問に根差した臨床・基礎研究を積極的に行っています。年々進化する最先端の治療を取り入れ、開発していくためには、医師として、そして研究者としての発想や問題解決能力が必要とされます。若いうちに基礎研究を行い、問題解決能力を身に付けることは、外科医として成熟するためにとても重要な事です。一人でも多くの“Academic Surgeon”を育て、小児外科臨床の発展に貢献することが目標です。

消化器外科学教室Ⅰの一臨床グループとして道内はもとより国内外で最先端の研究や日常小児外科診療の発展に貢献することが私たちの使命であると考えています。今後とも小児医療に携わる他科との連携に力を入れながら最善・最適な小児外科治療をチーム医療で実践して参ります。

臨床

小児外科では新生児から思春期、時に成人に至るまでの様々な年齢、体格の患児・患者の治療を行なっており、疾患内容もヘルニアや急性虫垂炎のような日常疾患から直腸肛門奇形、肝胆道系疾患、悪性腫瘍に至るまで多種多様な疾患と向き合っています。またその多くが希少疾患であり、時に治療方針に悩み手探りで前に進まざるを得ない症例に出会います。本人の現在の治療のみならず今後の成長、発達、さらには家族の生活を含めた予後を見据えての治療を日々模索しています。日頃より看護師、ソーシャルワーカー、地域の社会資源を含め、患児家族にとってよりよい環境を整えるためのカンファレンスも大切にしています。

手術に関しては、年間全身麻酔下手術件数は200件弱、新生児手術症例は14例と平年並みの症例数を維持することができました。ひとえに地域の小児科の先生方、院内の産科、新生児科, 小児科の先生方のご協力のおかげと感謝しております。安全かつ適切な手術を遂行するために, 手術計画、手術理解、手術手技、術前術後管理のさらなる向上のためチーム一丸となって取り組んで参ります。



主要手術の内訳

- 直腸肛門奇形 (6例)
  - 腹会陰式肛門形成術(腹腔鏡下／開腹) 1/1
  - 会陰式肛門形成術 2
  - 人工肛門造設術 2
- 肝胆道系 (5例)
  - 葛西手術 2
  - 開腹胆道造影 1
  - 先天性胆道拡張症 1
  - 胆道ドレナージ術 1
- その他
  - 噴門形成術 2
  - 腹腔鏡下脾臓摘出術 2
  - 先天性肺嚢胞性疾患 3
  - イレウス解除術 2

新生児手術の内訳(14例)

- 先天性食道閉鎖症
  食道バンディング／胃瘻造設術 1
- 先天性十二指腸狭窄 1
- 人工肛門造設術 2
- 先天性横隔膜ヘルニア 2
- 臍帯ヘルニア腹壁閉鎖 1
- CPAM 2
- 卵巣嚢腫 2
- VPシャント造設術 1
- PDカテーテル挿入術 1
- 穿孔性腹膜炎ドレナージ術 1

固形腫瘍の症例も増加傾向にあり、小児科の先生方は元より呼吸器外科、脳神経外科、心臓外科、放射線科等、他分野にわたり協力し一丸となり、大学病院としての総合力を発揮して小児がん拠点病院としての責務の一助を担えているものと考えております。

鏡視下手術においては、まだまだ発展途上ではありますが、小児／成人に限らず他施設で研鑽を積んだ若いスタッフたちの知識・経験を取り入れながら、適応拡大を計っているところです。国内外の内視鏡トレーニングにも積極的に参加し、より高いレベルでの鏡視下手

術ができるよう、これからも研鑽を積んでいく所存です。

これから小児外科チームの魅力を上げ若い外科医が興味を持ってくれるようにするためにも、症例数増加を図りチーム全体の臨床レベルを向上させること、より安全で適切な外科治療の質を高めること、更には低侵襲手術の適応を拡げることを目標に日々努力して参ります。更には、小児外科疾患に限定した症例の集積は困難が予想されますが、臨床試験を計画し新しい知見を発信できるよう共同研究体制の確立を目指したいと考えています。

今後とも御支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。

固形腫瘍手術の内訳(15例18件)

• 神経芽腫	腫瘍摘出術	4
• 肝芽腫	腫瘍摘出術	1
	生検	1
	転移巣摘出術	2
• 腎芽腫	腫瘍摘出術	1
• 肺芽腫	腫瘍摘出術	1
	生検	1
• 横紋筋肉腫	生検	2
• 卵巣腫瘍	腫瘍核出術	1
	転移巣摘出術	1
• 卵巣嚢腫	嚢腫核出術	1
• その他良性腫瘍	腫瘍摘出術	2

鏡視下手術の内訳

• 噴門形成術(Nissen)	2	• 先天性胆道拡張症(補助)	1
• Ladd手術	2	• 卵巣嚢腫核出術	1
• 脾臓摘出術	2	• 小腸部分切除術	1
• 腹会陰式肛門形成術	1	• 虫垂切除術	2
• 副腎腫瘍摘出術	1	• VPシャント入替術	1
• 肺葉切除術	2	• 腹腔洗浄ドレナージ術	1
• 転移性肺腫瘍摘出術	1	• LPEC	49

２０１９年教室紹介

〈研究部門〉

リサーチ統括部長より

消化器外科学教室Ⅰにおける研究の概要

（リサーチ統括：深井　原）

研究体制の枠組みと、Bedside to bench、Bench to bedsideの方向性はこれまでと変わらず､肝胆膵G, 消化管G, 移植G、小児Gの臨床と研究が行われています。研究専従の要員として、私 (深井)、早坂孝宏、小林希、堀米正敏、浜結香のメンバーで研究活動のインフラを整備しています。

Tissue Bankは当科の研究において重要な役割を担っています。大学に勤務し日々の試料収集を実際に行う若手医員、外来診療と予後情報の更新に関わるスタッフ、皆さんの一つ一つの仕事が諸先輩方の時代から20年続いた結果が現在のTissue Bankです。みんなで育てたTissue bankは日本のみならず世界の研究者から求められる貴重な研究資源に育ちました。立ち上げから暫くの間は試料を蓄積するために使用できない中、前例のないシステムの構築に多大な苦労をされてきた北川徳彦、高田尚幸、高橋将人、中西一彰の諸氏にあらためて御礼を申し上げます。当科のTissue Bankの質の高さは、穴のない臨床データと予後追跡に支えられています。本州の大都市圏では人の移動と病院間の繋がりの問題で、当科（北海道）のような予後追跡ができないのが悩みの種のようです。再発や生死のエンドポイントが伴わなければ、試料の価値は著しく低下します。今後も紹介元、フォローアップ先との連携を密にし、さらに綿密な予後追跡をお願い申し上げます。

Tissue Bankの登録症例は昨年度で5000例を超えたことを報告しました（2000-2018.12.31）。昨今の医学研究に関する法律、省令の大幅な改訂により、試料収集、保管に関する同意書、保管試料を用いた個別の解析研究に関する同意書の取り扱い方が厳格化されました。それらの変革に対応するため、同意書と試料の余剰量を確認し、2019年度の新規登録分207例を含め、計3378例を今後の研究に使用できる状態としました。これらの試料を用いた研究は高く評価され、多くの研究費の取得に役立っています。

2019年度の研究費取得状況は、新規・継続課題を併せて、基盤B 2件、基盤C 9件、萌芽2件、若手8件、研究活動スタート支援1件の計20課題が代表者として採択され、分担者としてはAMED 5件、その他寄付金を合わせると約5000万円を外部から調達し、大学から措置される研究費用と受託研究費、同門からの寄付などを加えた資金で研究を進めています。また、同門の先生方からのご寄付、ご助力が教室運営の多大なサポートとなっております。教室員各位におかれましては、諸先輩のご助力に対する感謝を忘れず、教室員として仕事を進めていただきたくお願い申し上げます。

臨床研究や切除試料を用いた研究において留意すべき法律、省令、指針等を理解することがこれまで以上に重要になっています。ここでは当科の研究に関わる倫理指針、法律を列挙しました。個別の内容は厚生労働省のHPに詳記されています。一度は眼を通していただきますようお願いいたします。（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/kenkyujigyou/i-kenkyu/index.html）

人を対象とする医学研究に関する倫理指針
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針
遺伝子治療等臨床研究に関する指針
手術等で摘出されたヒト組織を用いた研究開発の在り方
厚生労働省の所轄する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針
異種移植の実施に伴う公衆衛生上の感染症問題に関する指針
疫学研究に関する倫理指針
臨床研究に関する倫理指針
ヒト幹細胞を用いる臨床研究に関する指針

その他の法律
「個人情報の保護に関する法律」（平成15年法律第57号）
「行政機関の保有する個人情報の保護に関する法律」（平成15年法律第58号）

研究グループ紹介

移植グループ

渋谷　一陽（2010年卒）

肝細胞移植における球状肝細胞の有用性の検討

大学院研究3年目の渋谷一陽です。肝細胞移植における球状肝細胞の有用性について研究しています。この研究ではマウスの初代肝細胞の培養、球状肝細胞の作成、作成した球状肝細胞の移植という３段階のハードルがあります。1－2年目でIn vitroでの球状肝細胞の作成に成功し球状肝細胞の機能評価を行うことができていましたが、なかなかIn vivoでの移植後の球状肝細胞の生着を評価することができませんでした。しかし、3年目でなんとか球状肝細胞移植後のグラフト機能評価まで行うことができ、病理学的にも存在証明を得られました。今後はこれまでの結果のまとめと、球状肝細胞移植後の免疫反応の評価、異所性肝細胞移植についてさらなる知見を得たいと思っております。

金沢　亮（2011年卒）

Memory T細胞による免疫寛容機序と早期グラフト浸潤細胞の関係

消化器外科Ｉの金沢と申します。現在医師９年目で、大学病院や地方病院で外科医として修練を積み、前年度よりリサーチとして研究を行うため大学に戻りました。現在は移植グループに属しており、「Memory T細胞による免疫寛容機序と早期グラフト浸潤細胞の関係」というテーマで研究に従事させて頂いております。マウスの皮膚移植モデルを用いた研究で、移植した皮膚に浸潤してくる細胞のうち早期にグラフトに浸潤する細胞は拒絶を惹起しないことが示されています。これを発展させ最終的には現在よりも有害事象の少ない免疫抑制剤の開発に繋げることを目的にしています。思うような結果がなかなか出ず苦労していますが、最近になり上級医の指導もあり少しずつデータを残せるようになりました。このデータを積み重ね医学の発展に寄与していきたいと考えております。

太田　拓児（2012年卒）

早期グラフト浸潤細胞における免疫抑制性の検討

今年度より大学院に入りました太田拓児と申します。私の研究テーマは早期グラフト浸潤細胞の抑制性の検討です。マウス移植モデルにおいて、移植後早期にグラフトに浸潤するリンパ球の詳細な役割はわかっていません。そこで、早期に浸潤するリンパ球の役割と特徴を明らかにすることが目標です。具体的には、早期グラフト浸潤細胞のうちエフェクターリンパ球を抑制できる細胞集団が存在するかを解析する予定です。この研究のためにはVivoのモデル作成が重要であり、マウスの心移植のトレーニングを行っております。また、抗CD80/86抗体を用いてAnergy細胞を作成し、これを移入した免疫寛容マウスの作成も並行して進めております。最近は実験やモデル作成がうまくいかない日は落ち込むことが増え、気づいたら半年が過ぎました。3年の期間内に研究を仕上げることはかなりタフな仕事だと感じています。

保存グループ

人員：保存Ｇの研究は専従の大学院生(柴田賢吾、坂本聡大)を深井原が責任者として動物実験、細胞実験、試料解析を指導している。また、他の研究、臨床等の業務を行う傍らモデル作成や試料採取、分析、データ評価等の指導や論文作成、研究資金獲得などを担う多くの人員にサポートされている。川村典生(移植Ｇ；大動物・ヒト廃棄肝グラフト体外灌流)、嶋村剛(移植Ｇ；大動物虚血再灌流、移植モデル)、島田慎吾(肝Ｇ；小動物肝虚血再灌流)、早坂孝宏(リピドミクス解析)、小林希(学術研究員；遺伝子組換え・遺伝子編集実験)、浜結香(学術研究員；細胞実験)、石川隆壽(客員研究員；心停止ラット肝灌流)、若山顕治(客員研究員；心臓保存・移植モデル)、藤好真人(客員研究員；ラット・マウス肝灌流・移植)。

研究テーマ・概要

１）肝グラフトの修復

肝移植における脂肪肝、心停止ドナー肝の虚血再灌流傷害の軽減法を多角的に模索する。臓器保存液の改良、体外灌流による修復、移植前のグラフト機能評価法の開発、体外灌流による臓器コンディショニング、再灌流後治療、の全てが必要である。柴田は肝温虚血再灌流における脂質変化を質量分析イメージング法で評価し、虚血中に門脈域に蓄積する幾つかの分子が後の再灌流傷害の予測マーカーになることを見出した。この傷害を誘導する分子の原料分子の含有量が多い脂肪肝でも同様の検討を行い、脂肪肝では正常肝の虚血再灌流で起こる傷害性変化がより短時間の虚血で起こることを見出した。坂本はラット肝の体外灌流による修復、コンディショニングのモデルを作成している。体外灌流の至適条件を単離肝灌流による再灌流でスクリーニングし、最終的にはラットの肝移植モデルで効果を証明する予定である。

２）肝臓以外の臓器、細胞

移植件数が最多の腎臓、虚血再灌流傷害を受けやすい心筋・小腸細胞で普遍的に効果を発揮する保存液、灌流液が必要である。新規の抗酸化物質、水素ガス、重水含有液等を用いて、独創性が高い治療法、コンディショニング法を開発し、その効果をスクリーニングしてきた。これらの細胞を用いた細胞実験や、心臓の冷保存、体外灌流、移植、ランゲンドルフ灌流(循環器外科：新宮助教)等を行っている。また、メタボローム解析(深井)、リピドミクス解析(早坂)、電顕解析 (慈恵医大；暮地本講師)等を進めている。

３）肝初代培養

臓器灌流、抗酸化治療の経験を応用して、ヒト切除肝組織からの初代培養を行っている。また、ラット肝の肝細胞、星細胞、クッパー細胞、類洞内皮細胞、線維芽細胞を培養し、虚血再灌流、体外灌流による修復やコンディショニング、虚血再灌流における細胞間の相互作用、傷害マーカーの探索を行っている。

今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

研究の進捗に関して、深井個人については満足度3%、グループとしては50%である。来年度以降は、オリジナルの臓器灌流液、酸素化灌流法の確立 (至適温度,時間、添加薬)、体外灌流(再灌流)による効果評価、質量分析イメージング、LC-MS/MSによるタンパク、脂質解析、肝非実質細胞における現象の探索、などの幅広い実験系により精査を進めていく。大学院生と共に国際学会で発表し、論文のアクセプトを目指す。2019年度には、柴田君の国際学会での発表、Transplantation Proceedingsd誌への投稿、島田君の論文の採択まで辿り着いた。引き続き手持ちのデータを論文化していく。

深井　原（特任研究講師）

臓器移植における非標準的ドナー臓器の修復法、冷保存再灌流傷害の軽減法の探索がメインテーマである。冷保存傷害を受けやすい心筋、小腸で有効な方策を創出し、さらに肝、腎、膵での有用性を検証し、最終的に心停止ドナー、脂肪肝での有効性を細胞、臓器、移植モデルで確立することを目指す。一方で、これらの新規治療の効果を適切に判定するためにLC-MS/MSやIMSによるproteomics, lipidomics解析を検討している。

早坂　孝宏（特任助教）

2017年から消化器外科学教室Ⅰにて「ヒト肝癌組織及び血液特異的変動分子の探索」というテーマで研究を進めさせていただいております。これまでに質量分析を用いたプロテオミクス、リピドミクス、イメージング技術を導入してきました。今年度はNBNC-HCC組織のリピドミクス解析の結果から癌細胞ミトコンドリア内における脂質代謝異常を明らかにし、科学雑誌への論文投稿の準備を進めております。さらにNBNC-HCC組織のイメージング解析の結果から癌細胞内における糖代謝異常の可能性を見出しており、さらに詳細な調査を進めております。今年度は研究成果も出ておりますが、総合的には満足しておりませんので、さらに努力していきたいと考えております。また来年度はHCC患者への分子標的薬の適用有無による血清中の脂質変化を明らかにする予定です。最終的には組織および血液から探索した特異的に変動する分子と予後の関係について明らかにしたいと考えております。

柴田　賢吾（2010年卒）

温虚血再灌流障害におけるリゾリン脂質の役割に関する基礎的研究-イメージング質量分析法（IMS）による解析

大学院最終学年となりました。肝温阻血再灌流で変動する低分子化合物をImaging Mass Spectrometry(IMS)で網羅的に解析し、また、その分子の局在を評価し、障害の機序、障害の予測マーカー、治療標的を探索してきました。今年はWIRIにおけるリン脂質などの低分子化合物の変動や肝臓内の局在に関してIMSで解析できました。今後はWIRIに対する薬剤治療を行うことで、このマーカー候補物質がどの様に変動するかをIMSで追跡する。見つけた候補分子が、WIRIを助長するのか、阻害するのか、無関係はなのか、予後予測マーカーになるか、などを研究していけたらと思います。来年度は臨床に戻る予定なので、また手術をはじめ精進していきたいと思います。諸先生方には多大なるご迷惑をおかけすることと思いますがご指導のほどよろしくお願いいたします。

坂本　聡大（2012年卒）

Expanded Criteria Donor肝グラフトに対する臓器灌流によるコンディショニング法の開発

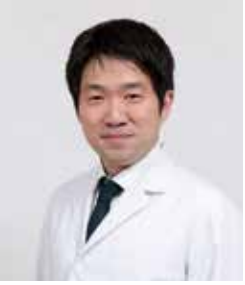
今年度から大学院での研究を始めました。私は肝移植でのExpanded Criteria Donor（ECD）肝グラフトに対する、臓器機械灌流によるコンディショニング法について研究しています。肝移植における機械灌流（ex situ machine perfusion：MP）は現在、主に欧米で盛んに臨床研究が行われてきており、徐々にECD肝グラフトにおける臓器修復機構が解明しつつあります。しかし、MPにおける灌流液や灌流条件、灌流中に用いる薬剤の有効性など、未解決の項目は多数あり、それらを基礎実験で解明したいと考えております。現在はラット肝を用いた単離肝灌流（IPRL）を用い、肝移植を模したモデルでの研究しております。来年度以降はラットの肝移植手技も習得し、肝移植における臓器保存やMPについての研究をさらに深めていきたいと思います。

腫瘍（肝胆膵）グループ

脇坂　和貴（2010年卒）

Wnt5aの発現と肝細胞癌の生物学的悪性度および切除例における予後の検討

「Wnt5aの発現と肝細胞癌の生物学的悪性度および切除例における予後の検討」というテーマで研究を行っております。Wntシグナル伝達経路のβカテニン非依存性経路が肝細胞癌の進展にどのように関連しているかについて、臨床検体の免疫染色と肝癌細胞株を用いて検討を行っております。今年で研究生活3年目となりました。今年度は研究結果を海外学会で発表する機会を頂きました。自分にとっては初めての海外学会での発表であり、非常に貴重な経験をさせて頂きました。現在は学位取得に向けて論文の作成など研究結果のまとめを行っております。来年度は臨床に戻ることになるかと思いますが、3年間の研究期間で学んだことを何らかの形で臨床に還元できるように、また新たな気持ちで頑張って参りたいと思います。



杉山　昂（2010年卒）

抗がん剤曝露によるDiacylglycerol kinase α発現変化の 分子メカニズムの解明

現在、制がん剤曝露によるDiacylglycerol kinasse（DGK）α発現変化メカニズムの解明とDGKα阻害剤との併用効果の検証、をテーマに研究をしています。今年度は初めて研究成果を日本癌学会学術総会で発表する機会を得、研究内容を僅かではあるがまとめることができました。また、消化器がんにおけるDGKα・ζをターゲットとした新規治療戦略というテーマで科研費の基盤研究が今年度新規採択されたので、担当の大学院生と一緒に研究を進めていきたいと考えています。しかし、まだまだ実験の量は不足しており、テーマに関連した知識も不十分であることが実験を進めるにつれて痛感させられます。残り１年間の研究期間の中で、論文投稿を見据えた実験計画・遂行を積み重ね、来年度海外学会での発表を目標にしていきます。

藤居　勇貴（2010年卒）

膵癌肝転移モデルにおける抗メソテリン抗体を用いた抗腫瘍療法の検討

大学院博士課程3年目の藤居です。今年度は、ヒューストンにあるMD Anderson Cancer CenterにRotating research fellowとして2ヶ月間留学させていただきました。アメリカのNational Cancer Databaseを用い、十二指腸NETの手術選択に関する論文を書かせていただきました。また、消化器外科領域の手術全般も見学させていただき、貴重な経験となりました。ヒューストンは銃事件が多いと聞いてビクビクしていましたが(実際、毎日のように銃殺のニュースが流れていました)、住宅周りは平和な雰囲気で、家族でアメリカ生活を楽しめたと思います。

実験に関しましては、膵癌肝転移モデルマウスを用いた抗メソテリン療法の研究を引き続き行っています。抗メソテリン抗体による肝転移抑制効果を認めましたが、そのメカニズムの解明が今後の課題です。

来年度は大学院の締めの年となりますので、現在の実験テーマを完結できるよう尽力したいと思います。

加藤　紘一（2011年卒）

肝細胞癌の悪性度を制御するがん微小環境の役割の解明

研究生活2年目を迎えました大学院生の加藤紘一です。現在『肝細胞癌の悪性度を制御するがん微小環境の役割の解明』というテーマで研究を行なっています。

肝細胞癌切除検体より微小環境のkeyとなる癌関連線維芽細胞(CAFs)を初代培養し、各種Assayを行なっています。LC-MS/MSを用いて網羅的プロテオーム解析を行い、注目すべきタンパク質を抽出しました。現在はTissue microarrayを用いて免疫染色を行い、生存時間解析を行なっているところですが、免疫染色の条件検討等で苦戦しています。また、初代培養細胞の遺伝子改変を行なっていますが、何継代までして良いのかなど課題が山積みの状態ではあります。しかし、病院病理部の先生方とも共同研究という形で少しずつではありますが、課題を乗り越えてきています。

研究生活の半分が終了していますが、結果が出るように限られた時間を大切にしていきたいと考えています。

谷　道夫（2011年卒）

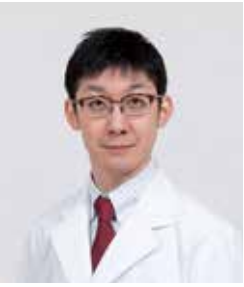
Double Network gelを用いた肝癌幹細胞の誘導による新規治療薬の開発

現在腫瘍病理学教室（旧第二病理）で、田中教授、津田助教授のご指導のもと、バイオマテリアルを利用した肝細胞癌細胞株から癌幹細胞誘導に関する研究を行なっており、そろそろ2年目が終わろうとしております。実験を行なっていく中で結果に一喜一憂することもありますが、コツコツ実験を重ねております。また、研究を行うとともに病理業務を手伝わせていただいておりますが、外科の切除検体を顕微鏡で評価することが多数あり、病理医側からの視点も学ぶことができて臨床に活かせる貴重な経験値を得ることができました。来年度は博士過程の最終年度となりますため、論文作成・卒業を目標に地道に頑張りたいと考えています。

大平　将史（2011年卒）

肝細胞癌の小胞体ストレスにおける脂肪酸結合タンパク質の機能解析

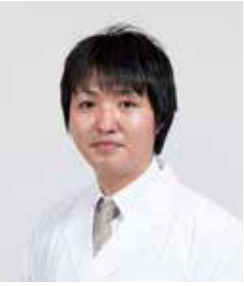
大学院3年の大平です。現在、肝細胞癌(HCC)における脂肪酸結合タンパク質(FABP)の機能解明を目標に研究を行なっています。具体的には、HCCの増殖・進展へのFABP1とFABP5の関連性の解析や、細胞内脂質代謝と小胞体ストレスにおけるFABPの役割の解析を進めております。現在までに、HCC切除検体中FABP5発現量と血清中FABP5濃度の解析や、各種肝癌細胞株におけるFABP1/5の高発現細胞株とKnock out細胞株の作成を進めてきました。研究方針の策定やKnock out細胞株の作成に時間がかかってしまい、思うように研究を進展させることができなかったことが今年度の反省点です。今後、残りの期間で各種アッセイや質量分析を用いて解析を進め、肝細胞癌における新たな知見を得ることを目指していきます。



志智　俊介（2012年卒）

DGKα/ζを標的とした消化器癌に対する次世代免疫療法の開発研究

2019年7月より大学院生として学内の遺伝子病制御研究所免疫機能学分野に出向し、抗腫瘍免疫におけるジアシルグリセロールキナーゼ(DGK)の機能解明をテーマに実験しています。現在は担がんモデルマウスにおけるDGKα阻害剤投与による免疫細胞機能について解析を行っていますが、今年度は研究という新しい環境で不慣れな部分が多く、研究の進捗が悪かったと反省しております。また、他大学よりDGKα、DGKζのノックアウトマウスを入手できたので、来年度はDGKノックアウトマウスを用いてDGKと抗腫瘍免疫のメカニズムについて解析を行う予定です。来年度は自主的に研究を進めていけるように計画性をもって行動したいと思います。

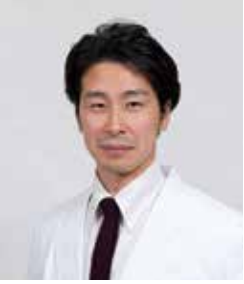


加藤　拓也（2012年卒）

肝細胞癌におけるゴルジ体-小胞体輸送関連タンパクCOPZ1の腫瘍依存性の検討

2019年度より研究に従事させて頂いております2012年卒（北大88期）の加藤拓也と申します。研究テーマは肝細胞癌の新規治療標的分子の検索で、小胞体-ゴルジ体輸送に関わる膜タンパクCOP複合体(COPZ1)に注目して研究を進めております。研究初年度の振り返りとしては、研究室のルールや作法、基本手技を学ぶことが大半で文献検索など研究の下準備を行なった1年でした。これから臨床検体を用いた免疫染色を行い、臨床病理学的検討にて予後との相関を示した上で細胞実験へ移行できればと考えております。1年の反省としては研究会終わりや学会などでお酒を頂く機会が増え、腹回りがアポトーシス細胞の如く膨張、スーツを全て新調させて頂いております。また諸先輩方を見習い、昨今のキャッシュレス時代でいかに多くポイント還元を受け、マイルを稼ぐかの話題に少しでも参加できるよう研究の合間で情報収集できればと考えております。

腫瘍（消化管）グループ

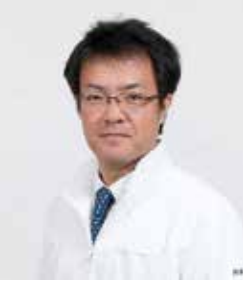


沢田　尭史（2010年卒）

遺伝子解析を用いた大腸癌転移に関する基礎的研究

リサーチ2年目の沢田尭史です。テーマは、「遺伝子変異情報を用いた大腸癌と肝転移に関する基礎的研究」という内容で研究させて頂いております。

大腸癌の発生、進行、転移に関わる様々な因子が報告されてきているものの、未だ不明な点が多く残されております。転移、特に肝転移を促進する新規の因子の同定、メカニズムの解明を目指し、切除検体や細胞株を用いた研究を行っています。肝転移を有する大腸癌症例の原発巣、肝転移巣を用いた遺伝子コピー数解析で得られた候補遺伝子に対し、組織での蛋白発現を免疫染色で評価し、コピー数異常と蛋白発現の相関、臨床病理学的因子との関係等を検討しました。また、早期癌の肝転移症例に対して網羅的遺伝子発現解析を行い、新規の促進因子を探索しております。今後は、遺伝子改変細胞株での機能解析や、TMAを用いた発現評価を行い、臨床病理学的因子との相関を検討していく予定です。



宮岡　陽一（2010年卒）

南極昭和基地長期閉鎖環境下における隊員の腸内細菌叢の研究

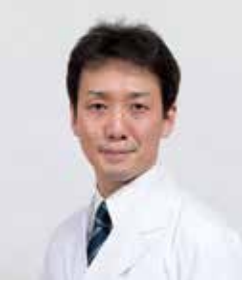
2019年3月まで第59次日本南極地域観測隊越冬医療隊員の一員として南極地域に1年5か月滞在しました。そこで隊員に普段臨床で使用している酪酸菌や糖化菌等を含有した整腸剤を内服させ、その前後で便検体を採取し日本に持ち帰りました。現在、腸内細菌叢の変遷について次世代シーケンサーを用いたメタゲノム解析を行っています。今年度も現地隊員に協力を依頼し、便の採取を依頼しております。ほかの院生の研究とはだいぶ毛色が違っておりますが、今後人類が到達するであろう宇宙と類似した環境での研究を続けていきたいと思います。

松井　博紀（2011年卒）

大腸癌において浸潤能を評価する新規病理学的因子である線維性癌間質反応(DR)と低分化胞巣(PDC)に関する研究

大学院3年の松井 博紀です。2019年度より消化管グループに所属して病棟業務に従事しながら研究を開始しました。HE染色で評価可能な大腸癌の新規病理学的因子で、TNM分類によるstagingとは独立して予後の層別化が可能なDRとPDCに着目し研究を行っております。2008年から2017年までに当科でR0切除を施行した大腸癌330症例の病理組織標本を再観察してDR分類とPDC Grade分類の評価を行い、それらの因子が当科の大腸癌症例においても予後層別化に有用であることを確認しました。今後は免疫組織化学染色や次世代シークエンス法を用いて、DR分類およびPDC Grade分類によって大腸癌の予後に差が生じる分子生物学的メカニズムの解明を行っていく予定です。限られた時間を有効に活用して研究を進めていきたいと考えております。

小児グループ



奥村　一慶（2011年卒）

Hepatoblastoma with HCC featuresにおける分子基盤解明

今年度から研究を行っております2011年卒の奥村です。テーマは「進行肝芽腫(HB)および肝細胞癌(HCC)/stemlike subtypeの共通分子機構に基づくドライバーエピゲノム変異の解明」です。HBとHCCとが混在した組織型を呈し、若年かつ正常背景肝に発症するHepatoblastoma with HCC featuresと呼ばれる予後不良な希少肝癌は、Stemness を有するHBおよびHCCとの類似点が示唆されております。当GではHB発生・増悪性化に関与するエピゲノム異常に関して基礎研究を行っており、その中でmiRNA発現プロファイル解析によって肺転移を有する進行型HBにおける14q32インプリンティング領域に位置する遺伝子の多数異常高発現を同定し、HCCのうちstem cellの特徴を持つ予後不良なタイプ(HCC/stemlike subtype)にみられる現象と共通した分子機構異常であることを発見しています。新たに解析対象としてHCC/stemlike subtypeに対しエピゲノム解析を行い、これまでに集積した進行型HBのエピゲノム異常との共通分子機構を解明するべく研究を進行させております。

近藤　享史（2012年卒）

肝芽腫のDNAメチル化解析に基づく予後予測モデルの開発

今年度より大学院に入学し、小児グループとしての臨床に加え、基礎研究にも従事することとなりました。肝芽腫の成因には、ゲノム変異が少ないことからエピゲノム異常が重要な働きを占めていると考えられ、当教室においてはDNAメチル化解析を中心に、肝芽腫のエピゲノム異常について研究を進めて参りました。私は今まで先行研究によって明らかにされてきたメチル化異常を統合し、肝芽腫治療層別化のための、臨床応用可能な予後予測モデルを確立することをテーマとしています。日本小児肝癌スタディグループ(JPLT)からも検体を供与頂き、マイクロアレイやパイロシークエンシングを用いたメチル化解析を進めているところです。

今後とも引き続き皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

２０１９年教室紹介

〈留学生〉

2019年教室紹介/留学生

国内留学

堺市立総合医療センター
救命救急センター（大阪府）
常俊　雄介(2015年~)

がん研有明病院
消化器外科　大腸グループ（東京都）
江本　慎(2018年~)

国立国際医療研究センター
肝炎・免疫研究センター（千葉県）
吉田　祐一(2019年~)

神奈川県立こども医療センター
河北　一誠(2019年~)

海外留学

Beckman Research Institute of city of Hope,
Monrovia, CA. USA（2019～）
Balylor Scott &
White Research Institute, (2018～2019)
(Dallas,Texas)
柿坂　達彦(2018年~)

Massachusetts
General Hospital
(Boston, Massachusetts)
木村　鐘康(2017年~)

国内留学

常俊　雄介

卒業年：2003年
留学先：堺市立総合医療センター救命救急センター救急外科

近況報告

平成15年卒の常俊雄介です。Acute Care Surgeonを目指し、2015年4月より堺市立総合医療センターに国内留学し、毎年年報に寄稿させていただき5年目となりました。

北海道では系統だって修練できない外傷手術を勉強したいということで堺に来て、たくさんの貴重な症例・修羅場を経験しました。目の前で失われゆく命と向き合い、死の淵からの生還に貢献できた喜びと、救えなかった命への申し訳なさ・悔しさの両方を経験してきました。

救命救急センターに所属しているため、「脳死・臓器提供」の縁もありました。臓器をいただきにいく立場から、臓器を提供するお手伝いをする立場に変わり、また違った見方をすることができました。そしてまた共に違う立場で頑張ってきた同期とコラボレーションできたことも貴重な経験でした。

国内でも症例の多い外傷センターの中心でメスを握れる恵まれた環境に、いつまでも甘えていられるわけでもありません。自分が北海道に帰って、何ができるだろうか、どう生きて行こうか自問自答しつつ、残りのこちらでの時間を楽しみたいと考えております。

また、戻りましたら、何卒よろしくお願い申し上げます。

当センターの仲間と

業績

＊実績（論文）：

常俊雄介, 倉内宣明, 鍵谷卓司, 澤野武行, 笠島浩行, 原豊, 遠山茂: 保存的に治癒し得た小児外傷性膵損傷の１例. 日腹部救急医会誌 39(4), 765-768, 2019

山田元彦, 森田正則, 常俊雄介, 薬師寺秀明, 臼井章浩, 中田康城, 横田順一朗：二枚貝摂取により呼吸筋麻痺を来した麻痺性貝中毒の１例. 日本救急医学会雑誌 30(2), 39-43, 2019

Inukai K, Usui A, Yamada M, Amano K, Mukai N, Tsunetoshi Y, Nakata Y, and Yokota J: Intraluminal Apple as a Rare Cause of Small Bowel Obstruction. Case Rep Gastrointest Med. 2018 Dec 13

臼井章浩, 天野浩司, 常俊雄介, 山田元彦, 井上稔也, 清水克修, 横田順一朗, 平岡圭, 池田直樹：胸部外傷に対する胸腔鏡下手術 Video-Assisted Thoracic Surgery (VATS)の適 応. Japanese Journal of Acute Care Surgery 8(2), 157-162, 2019

Inukai K, Usui A, Yamada M, Amano K, Mukai N, Tsunetoshi Y, Nakata Y, and Yokota J: Open abdominal management for perforative peritonitis with septic shock: a retrospective analysis on usefulness of a standardized treatment protocol. Eur J Trauma Emerg Surg. 2019 Apr 4 (epub ahead of print)

全国学会発表

常俊雄介，臼井章浩，犬飼公一，山田元彦，天野浩司，向井信貴，中田康城，横田順一朗	腹部外傷・出血性ショックにおけるAbdomen first approach	第33回 日本外傷学会総会	パネル ディスカッション	弘前	2019.06.07
常俊雄介，臼井章浩，犬飼公一，山田元彦，向井信貴，中田康城，横田順一朗	Complicated appendicitisに対するinterval appendectomy	第74回 日本消化器外科学会総会	要望演題	東京	2019.07.17
常俊雄介，臼井章浩，犬飼公一，山田元彦，茅田洋之，天野浩司，向井信貴，坂平英樹，中田康城，横田順一朗	Acute Care Surgery teamによる"Surgical Rescue"	第47回 日本救急医学会総会	パネル ディスカッション	東京	2019.10.02
常俊雄介，臼井章浩，犬飼公一，山田元彦，茅田洋之，天野浩司，向井信貴，坂平英樹，中田康城，横田順一朗	開胸・開腹手術のメリット- Acute Care Surgeryの領域から-	第81回 日本臨床外科学会総会	シンポジウム	高知	2019.11.15

江本　慎

卒業年：2006年
留学先：がん研有明病院　消化器外科　大腸グループ

近況報告

2018年からがん研有明病院消化器外科大腸グループ（大腸外科）でレジデントとして研修し2年目が経過しました。来年度、私が北海道に戻り、代わりに佐野修平先生が採用されることが決まりました。北海道大学第一外科の教室から引き続きがん研で研修できるようにつなげられて、とてもうれしく思っています。

私個人の2019年は、昨年と比較して、執刀の機会をたくさんいただくことができています。この半年でS状結腸癌/高位直腸癌の執刀は19例、技術認定取得を目指して集中的に当てていただいています。ほか、右側結腸癌5例や直腸癌3例、脾弯曲授動が必要な症例などの執刀させていただきました。昨年1年間で十分に見てきたつもりですが、やはり見るのとやるのでは大違いで、毎回厳しく指導していただいています。「やってみせ　言って聞かせて　させてみせ」とはよく言ったもので、正に「見て、やって、修正する」という過程が手術の上達には必要なのだと実感しています（もちろん、「褒められる」ことはめったにありませんが…）。また、昨年4月から導入されたロボット手術は80件を超えましたが、私も助手で30例を経験することができました。

もうひとつは学術研究分野です。昨年の学会発表は、与えられたテーマで学会発表を行っていましたが、今年度は自分でテーマを探して調べるようにしました。現在のテーマは、「大腸癌の傍大動脈リンパ節転移」についてです。同時性・異時性とも、当院でさえ根治的切除を行う症例は多くはありませんが、15年間の膨大なデータを武器に、何か形にできればと思っています。

残り4か月となりましたが、公私ともに充実させたいと思い

がん研有明病院　大腸外科の集合写真。

2019年2月24日　静岡マラソンで人命救助（心肺停止患者の救命措置）を行い、表彰されました。

ます。

業績

・江本　慎，千田　圭吾，谷　道夫，河合　朋昭，小林　清二，小笠原　和宏：子宮筋腫の鼠経ヘルニア嵌頓が誘因と考えられた鼠径管膿瘍の1例．日本腹部救急医学会雑誌，39(4)，787-791，2019.
・江本　慎, 佐野　修平, 坂本　沙織, 石川　倫啓, 河合　朋昭，小林　清二，小笠原　和宏．鼠径部ヘルニア嵌頓に対する腹腔鏡手術の治療経験，北海道外科雑誌，64(2)，23-26，2019.

学会
・江本　慎, 福長　洋介, 北川　祐資, 吉岡　聡, 平山　和義，中西　良太, 永岡　智之, 本間　理, 松井　信平, 富永哲郎，南　宏典, 宮成　淳, 山口　智弘, 長嵜　寿矢, 秋吉　高志，小西　毅，藤本　佳也，長山　聡，上野　雅資．腹腔鏡下結腸癌手術後の吻合法別短期成績の検討．第119回日本外科学会総会，大阪，2019年4月18日～20日
・江本　慎，福長　洋介，富永　哲郎，平山　和義，中西　良太，永岡　智之，田島　ジェシー雄，松井　信平，村橋　賢，向井　俊貴，山口　智弘，長嵜　寿矢，秋吉　高志，小西　毅，長山　聡，上野　雅資．大腸癌術後の異時性傍大動脈リンパ節転移切除症例の検討．第81回日本臨床外科学会総会，高知，2019年11月14日～16日
・江本　慎, 福長　洋介, 平山　和義, 中西　良太, 永岡　智之，田島　ジェシー雄，松井　信平，村橋　賢，向井　俊貴，山口　智弘, 長嵜　寿矢, 秋吉　高志, 小西　毅, 長山　聡，上野　雅資．横行結腸癌に対する腹腔鏡下手術における吻合法別短期および長期成績の検討．第32回日本内視鏡外科学会総会，横浜，2019年12月5日～7日

吉田　祐一

卒業年：2012年
留学先：国立国際医療研究センター　肝炎免疫研究センター　肝疾患研究部

近況報告

平成24年卒の吉田祐一です。現在大学院2年目で、2019年7月より千葉県市川市にある国立国際医療研究センター　肝炎免疫研究センター　肝疾患研究部で前任の坂本譲先生(平成22年卒業)の後任として、研究に従事させて頂いております。当研究部は肝疾患の診断、治療に繋がる基礎研究、臨床研究を展開し、ウイルス肝炎、脂肪性肝炎、肝硬変、肝がんなど、肝臓病の成り立ちや進行の仕組みを解明することで、新しい診断法や治療法の開発を行うことを目指しています。センター長の考藤先生をはじめ、当研究部の先生方は研究の知識や経験はもちろんのこと、動いているプロジェクトの規模や数も多く、とても刺激を受けるとともに大変身の引き締まる思いです。

私の研究内容はHCV患者におけるDAA治療が免疫に及ぼす影響の解析というテーマを与えて頂きました。DAA加療の登場にて90%以上の患者でウイルスの根治が望めるようになりましたが、治療後もHCCの発癌および再発は一定数報告されています。DAA加療前後の免疫動態をマスサイトメトリーにて網羅的に解析することにより，発癌との関連を同定し、新たな治療法や発癌の予防療法の開発の一助となればと考えております。腫瘍免疫を含め免疫分子領域は全くの未知の領域で、基本的な知識から実験手技など、教えて頂くこと勉強することが山積みでまだまだ研究と呼べる代物ではありませんが、よい成果が報告できるように日夜研究に励んでまいります。

また、生まれも育ちも北海道で過ごした私にとって、東京という街の煌びやかさと情報や物、金が集中している様、在住外国人の多さと満員電車の壮絶さ、人の冷たさに日々驚いております。

最後になりましたが、このような素晴らしい環境で研究に従事する機会を与えて頂いた武冨紹信教授、北大消化器外科学教室Iの先生方、また西川口で毎週お世話になっている同門の齋藤記念病院・齋藤卓先生に心より感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

業績

<2018-2019年の業績>
（学会）
1．吉田　祐一，敦賀　陽介，市村　健太郎，原田　拓弥，正村　裕紀，数井　啓蔵，遠位胆管原発神経内分泌癌の

一例，第123回日本消化器病学会北海道支部例会，平成30.9.22，札幌

2．吉田 祐一，正村 裕紀，市村 健太郎，原田 拓弥，敦賀 陽介，数井 啓蔵，閉塞性大腸癌に対する大腸ステント留置後の腹腔鏡下手術の検討，第31回日本内視鏡外科学会総会，平成30.12.6，福岡

（論文）

1．吉田 祐一,植木 伸也,正司 裕隆,佐藤 利行,笠島 浩行,中西 一彰，ICG蛍光法を用いて腹腔鏡下肝嚢胞天蓋切除術を施行した症候性巨大肝嚢胞の1例，日本内視鏡外科学会雑誌，24巻4号，298-303，2019

リトリート打ち上げ

ランチ歓迎会

河北　一誠

卒業年：2013年
留学先：神奈川県立こども医療センター　外科

近況報告

2019年4月より神奈川県横浜市にあります神奈川県立こども医療センターで研修しております。当院は小児病院として日本屈指のHigh volume centerであり、まるで成人の大きな病院で働いているかのように、同時に３列で手術が進行することも日常風景です。自分たちレジデントにも執刀する機会を十分に頂き、想像していた以上に充実した研修をおくっています。特に小児悪性腫瘍手術や腹腔鏡下/胸腔鏡下手術、また国内最大規模を誇るNICUがあるため、新生児症例についても学ぶ機会が非常に多く、少しでも自分のものにできるよう日々精進しております。

ただ、当院が素晴らしい点は症例数が多いだけではありません。こども専門の病院として、こどもたちが安心して過ごせることを第一に考えて、いたるところに配慮や工夫が見受けられます。たとえば院内イベントの多さ。毎日のようにロビーでは演奏会が行われており、入院・外来問わず、こどもたちが一緒に楽しく過ごしています。またファシリティドッグ（常勤犬）のベイリー＆アニーが院内で勤務してるため、時には手術室や検査まで同行したり、時には採血についてくれたりと、いつでもこどもたちの強い味方になってくれます。自分たちの診療が円滑に回るのはこういった支えがあるからに他ならず、とにかく職場環境への感謝の毎日です。最近では大人気ポケモンのピカチュウが病院を訪問してくれて、病院の職場体験しつつ、こどもたちと触れ合ってくれました。（You tubeで「ピカチュウ、神奈川こども」で是非検索してみてください。病院の雰囲気がわかっていただけるかと思います）

小児外科医として研修に来ているので、症例経験や技術の獲得には当然貪欲に励んでいます。しかしそういった技術的なものだけでなく、大学病院では不足がちな、病めるこどもたちを病院全体でささえていこうとする取り組みや環境整備についても、限られた時間の中で学び取り、北海道へ持ちかえりたいと考えています。

最後になりますが、このような研修の機会を与えて頂きました武冨教授ならびに同門の先生方に改めて感謝申しあげます。

業績

・学会発表

河北 一誠, 荒　桃子, 本多 昌平, 武冨 紹信: 腹腔内出血によりOncologic emergencyを呈した小児固形がん3例の検討, 第119回日本外科学会定期学術集会, 大阪, 2019

河北 一誠, 本多 昌平, 宮城 久之, 荒 桃子, 奥村 一慶, 武冨 紹信：当院における小児に対する末梢穿刺中心静脈カテーテル（PICC）の使用と合併症の検討, 第56回日本小児外科学会学術集会, 久留米, 2019

河北 一誠, 望月 響子, 篠原 彰太, 都築 行広, 藤井 俊輔, 臼井 秀仁, 北河 徳彦, 新開 真人：管状型全結腸重複症に対しENSEAL™を用いて全長にわたる隔壁切開を施行しえた一例, 第54回日本小児外科学会関東甲信越地方会, 大宮, 2019

河北 一誠, 北河 徳彦, 篠原 彰太, 都築 行広, 藤井 俊輔, 臼井 秀仁, 望月 響子, 新開 真人：転移性肺腫瘍に対し複数回の肺切除を施行した症例の術後QOLの検討, 第30回日本小児外科QOL研究会, 伊勢, 2019

・論文

河北 一誠, 財津 雅昭, 植田 隆太, 田中 友香, 今 裕史：魚骨による虫垂穿孔に対して腹腔鏡下虫垂切除術を施行した１例, 日本腹部救急医学会雑誌, 39(3) , 531-534, 2019

河北 一誠, 武田 圭佐, 田中 友香, 財津 雅昭, 今 裕史, 松原 悠, 曽我部 進, 鈴木 昭, 小池 雅彦：自然消退した上行結腸癌の1例, 日本消化器外科学会雑誌, 52(2), 106-111, 2019

河北 一誠, 今 裕史：前方アプローチと腹腔鏡のHybrid手術でメッシュ留置が可能であった腸管切除を要する鼠径ヘルニア嵌頓の1例, 日本ヘルニア学会誌, 5(1), 35-40, 2019

河北 一誠, 武冨 紹信：腫瘍破裂による腹腔内出血でOncologic emergency を呈した肝芽腫混在成人型肝癌の1例, 日本腹部救急医学会雑誌, 39(7) , 1-4, 2019

神奈川こどもセンター　北河先生との手術中写真

海外留学

柿坂　達彦

卒業年：1999年
留学先：Beckman Research Institute of City of Hope, Monrovia, CA, USA

近況報告

同門会の皆様、1999年卒業の柿坂達彦と申します。40台半ばでありながら米国での基礎研究留学のお話を頂き、一念発起して新たな境遇に家族とともに飛び込みました。2018年4月より、ダラスのBalylor Scott & White Research listituteで勤務しておりましたが、2019年4月、当研究室のAjay Goel教授が突然、ラボをロサンゼルスに移転するとおっしゃいました。米国ではよくある事と聞いておりましたが、まさに晴天の霹靂でした。このタイミングで研究を終了するか、引っ越して実験を続けるか迷いましたが、家族の支えもあり、米国での生活を続けることに決めました。その後、米国内での引っ越しという､大変ですが貴重な体験をさせていただきました｡「ここまできて毎年引っ越しか…」と若い頃を思い出しながら。

2か月後にロサンゼルス近郊に転居し、心機一転、西海岸での生活がスタートしました。ロサンゼルスは、ほぼ晴れの日が続き、雨が少ない地域です。冬でも最低気温が10度以上のことが多く、非常に過ごしやすい気候です。一方、家賃が非常に高く、長期間滞在するのは難しい地域でもあります。1時間ほど車を走らせると、ハリウッド、サンタモニカ、アナハイムなど華やかな観光地にたどり着きます。米国での留学期間も残り少ないので連休に旅行をすることを目標にしながら家族で頑張っております。

勤務先はロサンゼルス近郊で癌診療・研究を展開している医療機関City of HopeのBeckman Research Instituteです。Goel教授の研究室で、主に消化器癌のtranslational researchを行っております。当研究室は全世界の数多くの施設と共同研究をすることで、各種消化器癌の組織､血清、FFPEといった臨床検体を収集しております。その臨床検体を利用して、臨床での問題点に直結するようなプロジェクトを進めております。九州大学、徳島大学、奈良医科大学からの日本人研究者もおり、協力しながら研究しております。2018年、貴重な財産であるTissue bankの検体を送付していただき、現在まで肝細胞癌術後早期死亡予測、遠隔転移再発予測といったプロジェクトに携わりました。早期肝細胞癌再発予測に関するプロジェクトではDDW 2019の口演発表の機会を頂きました。その際、神山先生、嶋村先生、折茂先生にお会いし、激励のお言葉を頂いたのは忘れられない良い思い出となっております。今後、NBNC肝細胞癌の予

研究室のメンバー

Beckman Research Institute of City of Hope

研究所内の様子

後予測、肝細胞癌新規診断マーカーのプロジェクトも進めていく予定です。

末筆ながら、このような留学の機会を与えて下さった武冨紹信教授、臨床検体の送付にご尽力いただいた深井原先生、消化器外科学教室Ⅰの先生方、同門の先生方に厚く御礼申し上げます。

BBQパーティー

2019 DDW（サンディエゴ）

プロスポーツ観戦

グランドサークル旅行

木村　鐘康

卒業年：2003年
留学先：MGH

留学生活紹介

2017年9月より米国Massachusetts General Hospitalで移植外科医として勤務しています。

この度医局年報に投稿する機会をいただきましたので、昨年に引き続き近況報告をさせていただきます。

2015年より同病院にて2年間のClinical Fellowとしてのトレーニングを終え、そのままスタッフとして残っております。当院の年間手術件数としては、肝移植が約80件（うち生体5-10件）、腎移植が約150件（うち生体約75件）、膵臓移植が5件程度です。Fellowの時はあくまで移植のトレーニングを受ける立場でしたが、現在はフェローやレジデントを指導する立場になりましたので、すべての臨床における決定権は自分にあり、その分大変な責任を伴います。

MGHでは、プログラムの増大に伴い、本年度より一人外科医を雇い、現在移植外科医が6人体制で病棟、外来、手術を回しております。昨年度との違いは、自分が一番下の外科医ではなくなったので、少し負担が減りリサーチにも余分に時間を充てることができています。6人がほぼ均等に移植や病棟管理を行っていますが、やはり外科医により役割分担はあり、私の場合は肝移植寄りの役割で、生体肝移植のドナー手術という責任重大な役割を任されています。特に2018年には、韓国のASAN medical centerに2週間研修に行く機会をいただき、世界最先端の生体肝移植技術を学ぶことができ、非常に良い経験となりました。

リサーチでは、Liver Xenotransplantが本格的に始まり、遺伝子操作した豚の肝臓をヒヒに移植する実験を行っています。まだまだ始まったばかりで試行錯誤中ですが、なかなか面白い結果が出そうで今のところ順調に進んでいます。現在は遺伝子操作豚を作成する企業とのコラボレーションですが、将来的には自分でグラントを取ってラボを持ち、第一外科の後輩の留学受け入れ先となれればいいなと考えております。

日々多忙でストレスもありますが、日本ではなかなかできないような経験を多くさせていただいており、大変充実した生活を送らせていただいています。

ボストンは観光にも非常にいい街ですので、もし学会や見学等で来られる機会がありましたら是非声をおかけください。

また、若手の先生方で留学に興味のある方は短期でも長期でもいつでも受け付けておりますのでお気軽にご相談ください。

最後にこのような留学の機会を与えて下さりました武冨教授、同門の先生方にこの場を借りて心からお礼申し上げます。

業績

論文

1. Immediate Administration of Antiviral Therapy after Transplantation of Hepatitis C-infected Livers into Uninfected Recipients: Implications for Therapeutic Planning. Bethea E, Arvind A, Gustafson J, Andersson K, Pratt D, Bhan I, Thiim M, Corey K, Bloom P, Markmann J, Yeh H, Elias N, Kimura S, Dageforde LA, Cuenca A, Kawai T, Safa K, Williams W, Gilligan H, Sise M, Fishman J, Kotton C, Kim A, Marks C, Shao S, Cote M, Irwin L, Myoung P, Chung RT. Am J Transplant. 2019 Dec 11. doi: 10.1111/ajt.15739.

2. Regulatory B cells require antigen recognition for effective allograft tolerance induction. Kimura S, Rickert CG, Kojima L, Aburawi M, Tanimine N, Fontan F, Deng K, Tector H, Mi Lee K, Yeh H, Markmann JF. Am J Transplant. 2019 Dec 30. doi: 10.1111/ajt.15768.

3. Charting the Path Forward for Risk Prediction in Liver Transplant for Hepatocellular Carcinoma: International Validation of HALTHCC Among 4,089 Patients. Firl DJ, Sasaki K, Agopian VG, Gorgen A, Kimura S, Dumronggittigule W, McVey JC, Iesari S, Mennini G, Vitale A, Finkenstedt A, Onali S, Hoppe-Lotichius M, Vennarecci G, Manzia TM, Nicolini D, Avolio AW, Agnes S, Vivarelli M, Tisone G, Ettorre GM, Otto G, Tsochatzis E, Rossi M, Viveiros A, Cillo U, Markmann JF, Ikegami T, Kaido T, Lai Q, Sapisochin G, Lerut J; European Hepatocellular Cancer Liver Transplant Study Group, Aucejo FN. Hepatology. 2019 Jun 27. doi: 10.1002/hep.30838.

学会発表

1. 2019 American Transplant Congress
Ex-vivo Xenoperfusion Of Wild Type And Galtko.hcd55 Pig Livers With Human Whole Blood. D. Detelich, C. Rickert, C. Eymard, C. Carroll, S. Kimura, H. Yeh, J. Markmann

Massachusetts General Hospital, Boston, MA

2. 2019 American Transplant Congress
Partial Freezing: Subzero Whole Liver Preservation In The Presence Of Ice
S. E. Cronin, C. A. Pendexter, R. J. deVries, S. Kimura, S. Ozer, P. D. Banik, S. Nagpal, H. Yeh, S. N. Tessier, K. Uygun, M. Toner. Center for Engineering in Medicine, Massachusetts General Hospital and Harvard Medical School, Boston, MA, Transplant Center, Massachusetts General Hospital and Harvard Medical School, Boston, MA

２０１９年教室紹介

〈2019年入局後期研修医・専攻医〉

後期研修医アンケート

浜田 和也

消化器外科Ⅰに平成31年度/令和元年度から入局させていただきました浜田和也と申します。父の弘巳も消化器外科Ⅰに所属しているとともに、同期で弟の卓巳も入局させていただいており、親子3人で、お世話になっております。私はもともと室蘭在住だったのですが、大学から山形大学に入学して6年間を過ごし、そのまま初期研修2年と外科後期研修3年を山形で行いました。そして、その後の進路を考えるにあたり、故郷である北海道に戻り、外科医として努めていきたいと考え、消化器外科Ⅰへの入局を希望させていただきました。

消化器外科医として、一日も早く一人前となれるよう、今後も日々精進していきたいと考えております。まだまだ未熟な点ばかりであり、ご迷惑をおかけすることも非常に多いと存じます。諸先輩方におかれましては、ご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

1 卒業年度、出身校、部活、趣味、特技
平成26年、山形大学、室蘭栄高校、弓道部、映画鑑賞、雪かき

2 進路（外科）を考え始めた時期
大学6年生の実習中

3 一外に入局した決定的な理由
故郷である北海道で、外科医として努めていきたいと考え、そのために最も適していると思われる消化器外科Ⅰへの入局を希望しました。

4 今年一年での印象的な思い出
11年ぶりの北海道の雪に、戸惑いを覚えました。

5 これからの抱負
一人前の外科医となるべく、精進していきたいと思います。

6 将来の後輩に向けて一言
外科は大変なところも多いと思いますが、非常にやりがいのある仕事だと思います。一緒に頑張りましょう。

専攻医アンケート

石塚 千紘

今年度入局の石塚千紘です。入局当初は知識も乏しく分からないことだらけで、病棟では不安に駆られる日々でしたが、上級医の先生方の手厚いご指導のおかげで、なんとか乗り越えることができたと思います。大学病院では、他ではお目にかかれない難症例が多く、プレゼンや術前術後管理など非常に勉強になることばかりです。来年以降は市中病院での勤務が続くと思いますが、今年一年で学んだことをしっかり活かして診療にあたっていければと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

1 卒業年度、出身校、部活、趣味、特技
2017年、北海道大学、ボート部、ドライブ・温泉、電子オルガン（エレクトーン）

2 進路（外科）を考え始めた時期
学生の頃から

3 一外に入局した決定的な理由
初期研修病院での熱烈な勧誘

4 今年一年での印象的な思い出
忘年会の芸

5 これからの抱負
まだ自分の専門分野は決め切れていませんが、一症例一症例を大切にして、研鑽を積んでいく所存です。

6 将来の後輩に向けて一言
外科はきついというイメージがある方もいるかも知れませんが、チームで診療にあたるので、辛い時でも皆で支えあって乗り越えて行けるのが魅力だと思います。ぜひ一度見学にいらしてください。

高橋 遼

消化器外科Ⅰに平成31年度/令和元年度から入局させていただきました髙橋遼と申します。愛知県の知多半島の片田舎出身で、北海道大学を卒業し、初期研修2年間と後期研修1年間を天使病院でさせていただきました。令和2年度はじめ3ヶ月間は岩見沢市立総合病院でお世話になり、その後大学でローテーションの予定です。令和元年度は天使病院へ残留するという要望を快く承諾いただき、大変多くの症例を経験させていただきました。今一度、御礼申し上げます。令和2年度は少しでも大学病院での診療へ貢献できますよう精一杯働かせていただく所存です。これからも1日1日、1症例1症例を大切に一人前の外科医を目指し自己研鑽に励みたいと考えております。まだまだ経験不足・勉強不足で至らぬ点が多く、ご迷惑をおかけすることが多々あるかと存じますが、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

1 卒業年度、出身校、部活、趣味、特技
2017年、北海道大学、ボート部、映画鑑賞・トレーニング、眉毛の可動域

2 進路（外科）を考え始めた時期
学生の頃から

3 一外に入局した決定的な理由
初期研修病院での上級医の先生方の手術手技への憧れ、小児外科への興味

4 今年一年での印象的な思い出
執刀100件

5 これからの抱負
毎日ひとつひとつ修練を積み重ねて自己研鑽に努めます。

6 将来の後輩に向けて一言
外科は科の特性上、きつかったり、汚かったりする場面がありますが、非常にやりがいのある仕事で、きれいな手術ができると最高に気持ちがいいです。ぜひ一緒に働きましょう。

浜田 卓巳

本年度に入局させていただきました浜田卓巳です。外科医として本格的に働くことになり、わからないことばかりで右往左往していたらあっという間に年の瀬です。大学病棟勤務では、病棟業務や手術の助手を通じて外科医としての物事の考え方を学ぶことができました。またカンファレンスでのプレゼンテーションや学会発表、Journal Clubといった苦手意識の高い分野を集中してトレーニングを積むことができました。

どこまで自分ができる様になったのか、上級医の先生方が求めている成長を自分ができているのか、不安だらけですが一個一個成長していくしかないので、残り少しですが少しでもできることを増やせる様に精進してまいります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

1 卒業年度、出身校、部活、趣味、特技
2017年度、昭和大学、卓球部、温泉に行く

2 進路（外科）を考え始めた時期
高校生

3 一外に入局した決定的な理由
小児外科に興味がある。若手の時にたくさん手術経験を積めると聞いた。

4 今年一年での印象的な思い出
Cleveland Clinic留学。

5 これからの抱負
目の前のこと一つ一つに集中して頑張ります。

6 将来の後輩に向けて一言
一緒に働きましょう。

深澤 拓夢

今年度入局した深澤拓夢です。今年は外科医1年目として大学病棟およびJCHO北辰病院で勤務させていただきました。思い返してみると、4月から知識不足を痛感しながらも必死に仕事をこなしてきたら、いつの間にか今年度も残りわずかという状態です。決して楽な一年ではありませんでしたが、上級医の先生方や同期のサポートもあり、実りのある一年にすることができたと思っております。

来年からは今年培った知識を活かし、多くの執刀経験を積ませてもらえるように努力して行く所存です。

将来の専門はまだ決めかねていますが、今後多くの経験を積む中で広い視野をもって決めていけたらと思っております。これからも精一杯精進致しますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

1 卒業年度、出身校、部活、趣味、特技
2017年、北海道大学卒、アイスホッケー部

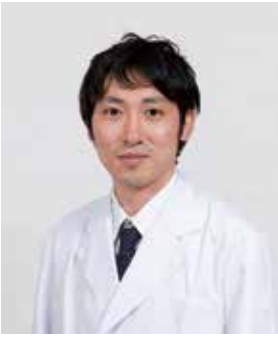
2 進路（外科）を考え始めた時期
初期研修中

3 一外に入局した決定的な理由
尊敬できる先輩がいた

4 今年一年での印象的な思い出
肝腎同時移植があった日。いろいろあったが、一番覚えているのは仮眠する場所がなく止む無く選んだ更衣室のソファの寝心地の悪さと、寝起きのつらさ。

5 これからの抱負
どの領域に進むにしろ、ここだけは負けないと言えるようなスペシャリティを身につけたい。

6 将来の後輩に向けて一言
一緒に頑張ろう！



山本 啓一朗

今年度入局致しました山本啓一朗と申します。出身は福岡で大学は札幌医科大学、初期研修を福岡和白病院で行ないました。今年度は大学病院で各グループをローテーションし、それぞれで手術、総回診、プレゼン、病棟業務を勉強させて頂きました。その間にも承諾会、学会発表、2週間のクリーブランド研修、論文作成の機会を与えて頂きました。大学病院の独特さに苦戦しながらもなんとか日々過ごすことができ、怠惰である自分にとっても学びの機会を多く与えて頂き､非常に有意義なものとなりました。今後も正しい知識、技術を身につけ、日々成長できるよう尽力致します。今年度は様々な形で関わって頂きました皆様に感謝致します。また来年度も多々ご迷惑をおかけするかと思いますが、よろしくお願いします。

1 卒業年度、出身校、部活、趣味、特技
2017年、札幌医科大学、アイスホッケー部

2 進路（外科）を考え始めた時期
初期研修2年目の春

3 一外に入局した決定的な理由
先輩方の姿を見て。

4 今年一年での印象的な思い出
子供が産まれたこと。

5 これからの抱負
外科医として習熟できるよう努力します。

6 将来の後輩に向けて一言
勉強の機会を多く与えて貰え、自分の成長に繋がると思います。是非一緒に働きましょう。

２０１９年教室紹介

〈秘書・実験助手〉

医局秘書

星川 愛弓

平成27年6月より医局秘書として勤務させていただき、気が付けば雇用期間満期満了の時期が近づいて参りました。出張・兼業関連業務や学会事務局業務を通し、先生方をはじめ色々な方とお仕事をさせていただき、実り多き日々を過ごすことが出来ました。

残り僅かとなりますが、最後まで精一杯努めて参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今までご指導いただきました先生方や秘書・実験助手の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。有難うございました。

近藤 歩美

平成28年2月より医局秘書として勤務し、科研費をはじめとした研究費関連の申請や執行、報告業務に携わっております。もう間もなくで5年目となり、秘書の中でもいつの間にか先輩ポジションとなっておりました。雇用期間満了まで残りわずかとなりましたが、実務と勤続年数が伴うよう、日々励んで参ります。

川口 亜矢子

2018年9月から勤務しております。主に教授関連業務を担当しております。丸一年が経ち、一通りの業務を経験させていただきましたが、日々たくさんの方に助けられながら過ごし、感謝の毎日でした。これからは二年目になりますので、経験を活かしながらみなさまのサポートができるよう気を引き締めて参ります。今後ともご指導いただけますようよろしくお願い申し上げます。

鈴木 愛

平成30年10月より病棟CRでNCD関連業務を担当し、同年12月より医局で医局長秘書、同門会、大学院生・学生、教室年報、ホームページ関連業務を担当しております。

慣れないことばかりで戸惑うこともございましたが、先生方をはじめ、秘書さんにも助けていただきながら一年を終えることができました。

まだまだ至らない点が多いことかと存じますが、少しでもお役に立てるよう努めてまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

小銭 光

2018年12月より病棟CRで勤務しております、小銭 光と申します。担当業務は、診療録関連で、NCDへの症例登録などを行っております。こちらで働き始めて1年が過ぎました。まだまだ至らない点も多いことと存じますが、皆様に温かく接していただき、充実した時間を過ごしております。微力ではございますが、先生方のお役に立てるよう努めてまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

相川 香

平成31年2月より、9時から13時までのパートタイムで勤務させて頂いております。

業務内容は主に医局内の清掃や郵便物の回収ですが、文献取り寄せなど秘書の皆さんのお仕事の補助もしております。

10年ぶりの社会復帰で初めは緊張しましたが、皆さんに大変良くして頂き、毎日楽しく過ごさせて頂いております。これからもどうぞよろしくお願い致します。

菅田 友梨絵

2017年7月より、移植外科学分野の医局秘書として勤務させていただいております。消化器移植グループに関わる業務を担当しております。

まだまだ至らぬ点も多く、先生方や秘書の皆さまのお力添えをいただきながらの毎日ですが、少しでも先生方のお役に立てるよう努めてまいります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

実験助手

堀米 正敏

１外に来てだいぶたちます。

最近、体の色々な所に痛みを感じるようになりましたが、まだ働いています。邪魔にならないようにもう少しだけ１外でお世話になろうと思います。

小林 希

一外に所属させていただいた頃を振り返り比べてみると、リサーチの内容・機材・実験室等かなり様変わりしたと感じます。時代に遅れないよう新しい知識・技術を教室のリサーチへ反映すべく勉強しなくてはと思う日々です。

濵 結香

消化器外科学教室Ｉに勤務し、８ヶ月が経ちました。主な業務は、当教室Tissue Bankの、サンプル処理、保管、データの管理です。これまで行ってきた臨床検査業務や研究で得た知識、経験はありますが、未だ慣れぬこと、分らないことも多いと感じる毎日です。皆様のご意見を賜り、ご指導を頂きながら、少しでも教室のお役に立てる事が出来ればと考えております。

2019年業績紹介

（学会･論文･研究費一覧･学位取得者）

2019年業績紹介

業　績

2019年学会一覧

《学会発表（国内）》
2019.1.25　第90回大腸癌研究会（京都）
原田拓弥、本間重紀、吉田雅、川俣太、市川伸樹、柴崎晋、武冨紹信
pT1(SM)早期直腸癌の臨床病理学的特徴と治療成績
ポスターセッション

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、川俣太、柴崎晋、原田拓弥、武冨紹信
進行直腸癌に対する術前化学療法後の手術の安全性に関する検討
ポスターセッション

2019.3.8-9　第46回日本膵・膵島移植研究会（名古屋）
渡辺正明、腰塚靖之、後藤了一、川村典生、財津雅昭、山本真由美、柏浦愛美、太田稔、嶋村剛、武冨紹信
当院における膵島移植の情報提供からみた臨床応用拡大への課題
ワークショップ

2019.4.6-7　第18回日本旅行医学会大会（東京）
宮岡陽一、島田慎吾
日本南極地域観測隊野外観測活動時の傷病からみる南極旅行時の携行医薬品について
ポスターセッション

2019.4.18-20　第119回日本外科学会定期学術集会（大阪）
島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、長津明久、蒲池浩文、武冨紹信
小型単発肝細胞癌において系統的肝切除術を選択すべき術前因子の解析
パネルディスカッション

渡辺正明、腰塚靖之、渋谷一陽、蔵谷大輔、小倉正臣、吉田雅、旭火華、後藤了一、財津雅昭、川村典生、嶋村剛、山下健一郎、藤堂省、武冨紹信
膵島移植の成績改善に向けて　我々のこれまでの取り組みとこれからの展開
ワークショップ

川俣太、本間重紀、Ann-Marie P、沢田尭史、市川伸樹、吉田雅、柴崎晋、Nocola W、Vicki W、Barbara L、深井原、川村秀樹、神山俊哉、武冨紹信
ゲノム解析を利用した大腸癌原発巣およびその肝転移巣に対するprecision medicine
ワークショップ

深井原、柴田賢吾、島田慎吾、石川隆壽、若山顕治、藤好直、小林希、加藤紘一、早坂孝宏、三野和宏、川村典生、嶋村剛、武冨紹信
生存シグナル増強を目指した機械灌流による肝グラフトの薬剤性コンディショニング法の探索
サージカルフォーラム

脇坂和貴、神山俊哉、横尾英樹、長津明久、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、三橋智子、武冨紹信
肝細胞癌におけるWnt5a発現の臨床病理学的意義の検討
サージカルフォーラム

杉山昂、横尾英樹、大畑多嘉宣、長津明久、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、神山俊哉、武冨紹信
肝細胞癌の治癒切除例における炎症・栄養に関する宿主側予後因子の検討
サージカルフォーラム

沢田尭史、川俣太、市川伸樹、吉田雅、柴崎晋、本間重紀、武冨紹信
大腸癌肝転移に対するprecision medicineにおける免疫組織化学染色を併用したゲノム解析の有用性の検討
サージカルフォーラム

柴田賢吾、橋本咲月、早坂孝宏、深井原、加藤紘一、中薮拓哉、島田慎吾、小林希、梅本浩平、鈴木崇史、大谷晋太郎、三野和宏、嶋村剛、木村太一、武冨紹信
肝温虚血再灌流障害におけるリゾリン脂質の役割に関する基礎的研究　ーイメージング質量分析による解析
サージカルフォーラム Young Investigator's Award

江本慎、福長洋介、北川祐資、吉岡聡、平山和義、中西良太、永岡智之、本間理、松井信平、富永哲郎、南宏典、宮成淳、山口智弘、長嵜寿矢、秋吉高志、小西毅、藤本佳也、長山聡、上野雅資
腹腔鏡下結腸癌手術後の吻合法別短期成績の検討
サージカルフォーラム

金沢亮、後藤了一、巌築慶一、財津雅昭、川村典生、渡辺正明、嶋村剛、武冨紹信
当科における脳死肝移植前抗ドナー HLA抗体値の推移の検討
サージカルフォーラム

巌築慶一、後藤了一、金沢亮、深作慶友、川村典生、財津雅昭、渡辺正明、嶋村剛、武冨紹信
移植後早期グラフト浸潤細胞が拒絶、免疫寛容に及ぼす影響についての基礎的研究
サージカルフォーラム

原田拓弥、川村典生、財津雅昭、渡辺正明、後藤了一、嶋村剛、武冨紹信
小児生体肝移植後の肝動脈血栓症発症に及ぼす血管因子の検討
サージカルフォーラム

市川伸樹、本間重紀、船越徹、服部優宏、佐藤正法、上泉洋、大森一吉、野村克、横田良一、小池雅彦、今裕史、武田圭佐、石津寛之、廣瀬邦弘、蔵谷大輔、石川隆壽、村田竜平、吉田雅、川俣太、皆川のぞみ、武冨紹信
局所進行直腸癌に対する術前mFOLFOX6療法後の手術の安全性（R-NAC01試験）
サージカルフォーラム

木井修平、北村秀光、岡田尚樹、項慧慧、杉山昂、川俣太、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信
DSS誘発性大腸炎モデルにおけるSTAT1を介したシグナルカスケードの関与
サージカルフォーラム

志智俊介、稲垣光裕、佐野修平、西越崇博、山田健司、腰塚靖之、芝木泰一郎、柳田尚之、池上淳、赤羽弘充
当科における消化器外科手術後の局所陰圧閉鎖療法早期介入について
ポスターセッション

渋谷一陽、渡辺正明、巌築慶一、金沢亮、財津雅昭、川村典生、後藤了一、武冨紹信
球状肝細胞の肝細胞移植における有用性の検討
ポスターセッション

藤居勇貴、蒲池浩文
肝門部胆管癌術後に発症した膵頭部領域癌の手術経験
ポスターセッション

谷道夫、津田真寿美、鈴鹿淳、王磊、杉野弘和、谷川聖、石田雄介、グン剣萍、田中伸哉、武冨紹信
バイオマテリアルによる肝癌幹細胞の新規誘導法
ポスターセッション

市村健太郎、川村典生、財津雅昭、渡辺正明、後藤了一、嶋村剛、武冨紹信
HEV急性肝不全5例の検討
ポスターセッション

佐藤彩、後藤了一、財津雅昭、川村典生、渡辺正明、嶋村剛、武冨紹信
当院における小児生体肝移植後門脈合併症の検討
ポスターセッション

財津雅昭、川村典生、渡辺正明、後藤了一、嶋村剛、武冨紹信
リンパ球ー単球比を用いた肝移植後の急性拒絶反応と治療の評価
ポスターセッション

神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、長津明久、横尾英樹、蒲池浩文、武冨紹信
肝3区域切除後胆道合併症の検討
ポスターセッション

横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、蒲池浩文、武冨紹信
大腸癌肝転移における術前化学療法の術後成績に与えるインパクト
ポスターセッション

坂本譲、由雄祥代、河合裕成、島垣智成、森泰三、松田道隆、大澤陽介、深井原、神山俊哉、考藤達哉、武冨紹信
NAFLD患者におけるNK細胞Siglec-7の意義
ポスターセッション

長津明久、神山俊哉、旭火華、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、武冨紹信
大腸癌肝転移症例における周術期成績が予後に与える影響の検討
ポスターセッション

吉田雅、本間重紀、市川伸樹、川俣太、柴崎晋、川村秀樹、武冨紹信
潰瘍性大腸炎に対する手術方針と術後成績
ポスターセッション

田仲大樹、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川俣太、柴崎晋、川村秀樹、武冨紹信
当院での腸閉塞に対し実施した高気圧酸素療法の治療成績の検討
ポスターセッション

折茂達也、神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、島田慎吾、長津明久、大畑多嘉宣、武冨紹信
肝内胆管癌の術前画像分類による腫瘍局在の検討
ポスターセッション

和久井洋佑、市川伸樹、川俣太、吉田雅、柴崎晋、本間重紀、三橋智子、武冨紹信
所属リンパ節に乳癌と結腸癌の転移が混在した上行結腸癌の1切除例
研修医セッション

別所光(天使病院初期研修医)、川村典生、財津雅昭、渡辺正明、後藤了一、嶋村剛、武冨紹信
長期待機後に脳死肝移植を施行しえた原発性硬化性胆管炎の2症例
研修医セッション

高橋直規、折茂達也、長津明久、島田慎吾、大畑多嘉宣、横尾英樹、後藤了一、神山俊哉、武冨紹信
亜全胃温存膵頭十二指腸切除後に発症した腸管嚢腫様気腫症の1例
研修医セッション

南波宏征、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、長津明久、蒲池浩文、林利彦、新井隆太、松野吉宏、武冨紹信
肝細胞癌術後に右下腿骨格筋転移を来たした1例
研修医セッション

2019.5.9-11　第105回日本消化器病学会総会（金沢）
吉田雅、本間重紀、市川伸樹、川俣太、柴崎晋、川村秀樹、武冨紹信
潰瘍性大腸炎に対する手術方針と術後成績
ポスターセッション

2019.5.15　札幌モーニングロータリークラブ（札幌）
武冨紹信
脂肪肝も侮れない！肝発がんのリスクと対策
招聘講演

2019.5.18　第6回北海道手術手技研究会（札幌）
市川伸樹、本間重紀、吉田雅、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、沢田尭史、武冨紹信
腹腔鏡下大腸切除における技術認定医介入の有用性
一般口演

2019.5.23-25　第56回日本小児外科学会学術集会（久留米）
本多昌平、荒桃子、河北一誠、奥村一慶、武冨紹信
肛門形成に難渋した多発結腸閉鎖合併鎖肛の1例
一般口演

2019.5.30-31　第55回日本肝臓学会総会（東京）
坂本譲、由雄祥代、考藤達哉
NAFLDにおける可溶性Siglec-7はマクロファージ関連バイオマーカーである
パネルディスカッション

2019.6.6　第61回旭川外科手術懇話会（旭川）
武冨紹信
進行肝癌に対する治療戦略
特別講演

2019.6.6-7　第33回日本外傷学会総会（弘前）
常俊雄介、臼井章浩、犬飼公一、山田元彦、天野浩司、向井信貴、中田康城、横田順一朗
腹部外傷・出血性ショックにおけるAbdomen first approach
パネルディスカッション

2019.6.8　第30回北海道肝がん研究会（札幌）
旭火華、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、蒲池浩文、武冨紹信

肝細胞癌に対する減量切除術の検討
一般口演

2019.6.13-15　第31回日本肝胆膵外科学会学術集会（高松）
Goto R, Ito M, Zaitsu M, Kawamura N, Watanabe M, Kamiayma T, Shimamura T, Taketomi A.
The role of preformed donor-specific antibodies in living donor liver transplantation
一般口演

Kawamura N, Goto R, Watanabe M, Zaitsu M, Kamiayma T, Shimamura T, Taketomi A.
A proposal of indication for splenectomy in Living Donor Liver Transplantation.
一般口演

Orimo T, Kamiyama T, Yokoo H, Shimada S, Nagatsu A, Kamachi H, Taketomi A.
Usefulness of EOB- MRI for the prediction of posthepatectomy liver failure for patients undergoing hepatectomy for hepatocellular carcinoma.
ポスターセッション

Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Nagatsu A, Kamachi H, Taketomi A.
Long-term prognostic factors in ten-year survivors after resection of hepatocellular carcinoma.
ポスターセッション

Kamachi H, Orimo T, Nagatsu A, Shimada S, Yokoo H, Goto R, Kamiyama T, Taketomi A.
Perioperative management and surgical results of hepato-pancreatoduodenectomy.
ポスターセッション

Nagatsu A, Kamiyama T, Asahi Y, Shimada S, Orimo T, Kamachi H, Taketomi A.
Long-term outcomes after liver resection with neoadjuvant.
ポスターセッション

2019.6.16　第305回日本小児科学会北海道地方会（札幌）
荒桃子、本多昌平、近藤享史、奥村一慶、武冨紹信
血胸にて発症した肋骨骨軟骨腫の1例
一般口演

2019.6.29　第115回日本臨床外科学会北海道支部総会（旭川）
市川伸樹、本間重紀、船越徹、廣瀬邦弘、大島隆宏、山田健司、中本裕紀、数井啓藏、横田良一、本間友樹、前田好章、吉田雅、石川隆壽、今泉健、松井博紀、武冨紹信
腹腔鏡下大腸切除における技術認定医介入の有用性
学会賞選考講演

深澤拓夢、川村典生、市村健太郎、鈴木琢士、巖築慶一、財津雅昭、渡辺正明、藤好真人、長津明久、後藤了一、井口晶裕、五十嵐敬太、山本雅樹、神山俊哉、嶋村剛、武冨紹信
骨髄移植後の類洞閉塞症候群に対し生体肝移植を施行し救命しえた一例
一般口演

石塚千紘、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、蒲池浩文、福井秀章、三橋智子、武冨紹信
増大傾向を示した肝硬化性血管腫の一切除例
一般口演

浜田和也、神山俊哉、石塚千紘、長津明久、旭火華、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、武冨紹信
肝血管筋脂肪腫に対し腹腔鏡下肝切除術を施行した一例
一般口演

2019.7.4　第26回外科侵襲とサイトカイン研究会（神戸）
大平将史、横尾英樹、旭火華、長津明久、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、神山俊哉、小川浩司、武冨紹信
肝細胞癌におけるcirculating FABP5の意義
ワークショップ

2019.7.4-5　第55回日本肝癌研究会（東京）
脇坂和貴、横尾英樹、神山俊哉、長津明久、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、武冨紹信
新WHO分類に基づいた混合型肝癌の癌幹細胞マーカーについての検討
パネルディスカッション

嶋村剛
肝移植の位置づけ
パネルディスカッション

大平将史、横尾英樹、長津明久、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、神山俊哉、小川浩司、武冨紹信
肝細胞癌における新規血清バイオマーカーとしての表皮型脂肪酸結合タンパク質(FABP5)の意義
ワークショップ

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、長津明久、蒲池浩文、武冨紹信
肝細胞癌切除後10年生存例における長期予後因子
一般口演

横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、蒲池浩文、武冨紹信
肝細胞癌切除後再発に対する分子標的薬の選択基準
一般口演

2019.7.5　第91回大腸癌研究会（東京）
市川伸樹、神山俊哉、横尾英樹、本間重紀、前田好章、濱田朋倫、篠原敏樹、敦賀陽介、数井啓藏、吉田雅、川俣太、柴崎晋、川村秀樹、蒲池浩文、折茂達也、島田慎吾、長津明久、大畑多嘉宜、武冨紹信
同時性肝転移における術前化学療法の意義
一般口演

吉田雅、本間重紀、市川伸樹、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、武冨紹信
大腸神経内分泌腫瘍の治療成績
ポスターセッション

2019.7.6　第3回腹腔鏡下大腸切除研究会学術集会（東京）
市川伸樹、本間重紀、吉田雅、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、武冨紹信
大腸癌に対する腹腔鏡下大腸切除における技術認定医介入の有用性に関する検討
一般口演

2019.7.9　第52回リバーサイド消化器懇話会（札幌）

本間重紀、松井博紀、宮岡陽一、今泉健、市川伸樹、吉田雅、武冨紹信
多様化する大腸癌治療
教育講演

2019.7.17-19　第74回日本消化器外科学会総会（東京）
常俊雄介、臼井章浩、犬飼公一、山田元彦、向井信貴、中田康城、横田順一朗
Complicated appendicitisに対するinterval appendectomy
要望演題

吉田雅、本間重紀、市川伸樹、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、武冨紹信
潰瘍性大腸炎に対する手術方針と術後成績
一般口演

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、廣瀬邦弘、山田健司、今裕史、船越徹、数井啓藏、横田良一、前田好章、石川隆壽、本間友樹、大島隆宏、川俣太、柴崎晋、武冨紹信
腹腔鏡下大腸切除における技術認定取得者介入の有用性に関する検討～医局制度を利用した多施設共同研究～
一般口演

本間重紀、松井博紀、宮岡陽一、今泉健、川俣太、市川伸樹、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、武冨紹信
潰瘍性大腸炎に対する3期分割手術
一般口演

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、長津明久、蒲池浩文、武冨紹信
肝切除におけるCチューブ留置例の検討
ミニオーラル

横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、蒲池浩文、武冨紹信
肝内胆管癌術後に対する低用量gemcitabineベース化学療法の予後改善効果の検討
ミニオーラル

長津明久、神山俊哉、旭火華、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、武冨紹信
当科におけるERASを参考にしたクリティカルパスの変更と将来像
ミニオーラル

蒲池浩文、折茂達也、長津明久、島田慎吾、横尾英樹、後藤了一、神山俊哉、武冨紹信
肝胆膵悪性腫瘍に対する異時性肝葉膵頭十二指腸切除症例の検討
ミニオーラル

太田拓児、加藤拓也、花本尊之、廣瀬邦弘、神山俊哉、松岡伸一
A Case of Diffuse Hepatic Hemangiomatosis Associated with Oral Contraceptive
ミニオーラル

沢田尭史、川俣太、市川伸樹、吉田雅、柴崎晋、本間重紀、武冨紹信
大腸癌肝転移における免疫組織化学染色を併用した遺伝子解析の検討
ミニオーラル

大平将史、横尾英樹、長津明久、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、神山俊哉、武冨紹信
肝細胞癌における新規血清バイオマーカーとしての表皮型脂肪酸結合タンパク質(FABP5)の意義
ミニオーラル

後藤了一、財津雅昭、川村典生、渡辺正明、神山俊哉、嶋村剛、武冨紹信
生体肝移植におけるde novoドナー特異的HLA抗体高力価症例のグラフト線維化の危険因子
ミニオーラル

2019.7.20　第2回da Vinci勉強会（札幌）
本間重紀、松井博紀、宮岡陽一、今泉健、市川伸樹、吉田雅、武冨紹信
ロボット支援下直腸切除術 ～再導入時に注意したこと～
一般口演

2019.7.25-26　第37回日本肝移植学会（京都）
川村典生、嶋村剛、後藤了一、渡辺正明、巖築慶一、深澤拓夢、山本啓一朗、神山俊哉、武冨紹信
公共交通機関による臓器搬送システム下での、マージナルドナー要因の探索と肝移植成績
ワークショップ

2019.7.27-28　統合医療機能性食品国際学会（札幌）
旭火華、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、蒲池浩文、武冨紹信
Vp4を伴う肝細胞癌に対して肝切除を含む集学的治療に加えてAHCC®を自主的に服用し、長期生存が得られた1例
ポスターセッション

2019.9.7　小児消化器病フォーラム（札幌）
荒桃子、本多昌平、近藤享史、奥村一慶、武冨紹信
術前診断が困難であった十二指腸重複症を伴う十二指腸狭窄症の一例
一般口演

2019.9.7-8　第125回日本消化器病学会北海道支部例会（札幌）
山本啓一朗、本間重紀、吉田雅、市川伸樹、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、結城敏志、武冨紹信
集学的治療により長期生存を得たStageIV直腸癌の一例
一般口演

原田拓弥、本間重紀、吉田雅、川俣太、市川伸樹、柴崎晋、大塚拓也、三橋智子、武冨紹信
術前診断が困難であった劇症型Clostridium difficile腸炎による著明な結腸狭窄に対して結腸亜全摘術を施行した1例
一般口演

旭火華、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、坂本譲、蒲池浩文、武冨紹信
肝細胞癌に対する減量切除術の検討
一般口演

2019.9.12-13　第26回日本門脈圧亢進症学会総会（下関）
川村典生、嶋村剛、後藤了一、渡辺正明、巖築慶一、深澤拓夢、山本啓一朗、神山俊哉、武冨紹信
類洞閉塞症候群に対する生体肝移植の1例と、生体肝移植後類洞閉塞症候群を来し再移植を必要とした1例
ワークショップ

2019.9.21-22　第101回日本小児外科学会北海道地方会（札幌）

近藤享史、奥村一慶、荒桃子、本多昌平、武冨紹信
腹腔鏡下に摘出したカテコラミン産生性右副腎原発神経芽腫の一例
一般口演

深澤拓夢、本多昌平、荒桃子、近藤享史、奥村一慶、武冨紹信
十二指腸重複症に先天性十二指腸狭窄症を合併した一例
一般口演

浜田卓巳、本多昌平、荒桃子、近藤享史、奥村一慶、河北一誠、武冨紹信
胆嚢摘出を施行後、腹痛症状改善のない胆管非拡張型膵胆管合流異常症に対し、分流手術を施行した一例
一般口演

2019.9.21-22　第109回北海道外科学会（札幌）
旭火華、吉田祐一、奥村一慶、沢田堯史、梅本浩平、喜納政哉、高田譲二、益子博幸
血液透析患者の腹部緊急手術の検討
北海道外科雑誌記念受賞講演

坂本譲、蒲池浩文、折茂達也、旭火華、長津明久、島田慎吾、神山俊哉、武冨紹信
多数のリンパ節転移を伴った神経内分泌腫瘍の2切除例
一般口演

2019.9.21-22　第116回日本臨床外科学会北海道支部総会（札幌）
浜田和也、本間重紀、吉田雅、市川伸樹、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、武冨紹信
腺癌と神経内分泌腫瘍を併存した直腸腫瘍の一例
一般口演

山本啓一朗、後藤了一、深澤拓夢、巖築慶一、川村典生、渡辺正明、堀田記世彦、岩見大基、篠原信雄、嶋村剛、武冨紹信
原発性胆汁性胆管炎の非代償性肝硬変、腎不全に対し脳死下肝腎同時移植を実施した一例
一般口演

旭火華、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、坂本譲、蒲池浩文、武冨紹信
肝細胞癌に対する減量切除術の検討
一般口演

石塚千紘、神山俊哉、浜田和也、吉田祐一、旭火華、長津明久、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、武冨紹信
若年男性に発生した巨大肝腫瘍の一例
一般口演

鈴木大喜(医学部6年生)、後藤了一、巖築慶一、川村典生、渡辺正明、山本啓一朗、深澤拓夢、坂本聡大、藤居勇貴、太田稔、岡本花織、千葉裕基、堀田記世彦、岩見大基、篠原信雄、嶋村剛、武冨紹信
肝腎症候群による腎不全を伴った原発性胆汁性胆管炎、非代償性肝硬変例に対し脳死肝移植を実施した3例の検討
学生セッション

2019.9.26-28　第78回日本癌学会（京都）
本多昌平、藤好直、荒桃子、奥村一慶、近藤享史、武冨紹信
Dysregulation of small non-coding RNAs at the DLK1-DIO3 imprinted locus in primary and metastatic hepatoblastoma tumors
一般口演

藤好直、本多昌平、荒桃子、奥村一慶、近藤享史、武冨紹信
Dynamic changes of genes expression under CDDP stress in CDDP-resistant hepatoblastoma cells
一般口演

2019.9.26-28　第78回日本癌学会学術総会（京都）
Ko Sugiyama, Shunsuke Shichi, Naoki Okada, Hidemitsu Kitamura and Akinobu Taketomi.
Inhibition of diacylglycerol kinase alpha augments efficacy of anticancer drugs against cancer cells ジアシルグリセロールキナーゼαの阻害はがん細胞に対する抗がん剤の効果を亢進する
ポスターセッション

2019.9.28　第2回北海道移植免疫研究会（札幌）
巖築慶一
マウス心移植における移植後早期浸潤リンパ球の抗原特異性
一般口演

渋谷一陽、渡辺正明、巖築慶一、金沢亮、財津雅昭、後藤了一、武冨紹信
球状肝細胞の肝細胞移植における有用性の検討
一般口演

2019.9.28　第25回北海道肝移植適応研究会（札幌）
後藤了一
北大病院の肝移植22年間を振り返って
一般口演

2019.10.2-4　第47回日本救急医学会総会（東京）
常俊雄介、臼井章浩、犬飼公一、山田元彦、茅田洋之、天野浩司、向井信貴、坂平英樹、中田康城、横田順一朗
Acute Care Surgery teamによる"Surgical Rescue"
パネルディスカッション

2019.10.8　なかのしま健康フェア健康講話（札幌）
本間重紀、松井博紀、宮岡陽一、今泉健、市川伸樹、吉田雅、武冨紹信
知ってほしい大腸癌のこと
講演

2019.10.10-12　第55回日本移植学会総会（広島）
後藤了一、巖築慶一、川村典生、渡辺正明、神山俊哉、嶋村剛、武冨紹信
当院における原発性胆汁性胆管炎に対する生体・脳死肝移植症例の特徴
一般口演

巖築慶一、後藤了一、太田拓児、金沢亮、川村典生、財津雅昭、渡辺正明、嶋村剛、武冨紹信
移植後早期グラフト浸潤リンパ球の抗原特異性に関する基礎的検討
一般口演

2019.10.11-12　第74回大腸肛門病学会総会（東京）
沢田堯史、松井博紀、宮岡陽一、今泉健、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武冨紹信
大腸癌肝転移に対する免疫組織化学染色を併用した遺伝子コピー数解析の有用性
ワークショップ

2019.10.11-12　第74回日本大腸肛門病学会学術集会（東京）

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、船越徹、今裕史、武田圭佐、横田良一、服部優宏、野村克、松井博紀、今泉健、宮岡陽一、武冨紹信
術前化学療法施行例における直腸癌術後排尿排便機能に対するQOLの検討
一般口演

今泉健、西澤祐吏、池田公治、塚田祐一郎、佐々木剛志、伊藤雅昭
大腸がん異時性腹膜転移に対する外科治療の有用性
一般口演

吉田雅、本間重紀、市川伸樹、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、武冨紹信
大腸神経内分泌腫瘍の治療成績
ポスターセッション

木井修平、北村秀光、岡田尚樹、杉山昂、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信
DSS誘発大腸炎モデルの病態発症におけるSTAT1シグナルカスケードの関与
ポスターセッション

2019.10.12　第54回日本小児外科学会関東甲信越地方会（大宮）
河北一誠、望月響子、篠原彰太、都築行広、藤井俊輔、臼井秀仁、北河徳彦、新開真人
管状型全結腸重複症に対しENSEAL™を用いて全長にわたる隔壁切開を施行しえた一例
一般口演

2019.10.26　第7回道東外科集談会（釧路）
本間重紀、松井博紀、宮岡陽一、今泉健、市川伸樹、吉田雅、武冨紹信
大腸癌外科治療　～今までの取り組みとこれからの挑戦～
講演

2019.11.2　第40回日本大腸肛門病学会北海道支部例会（札幌）
今泉健、本間重紀、西田睦、松井博紀、宮岡陽一、市川伸樹、吉田雅、武冨紹信
結腸癌リンパ節転移の術前診断における経腹壁超音波検査の有用性
一般口演

山本啓一朗、本間重紀、吉田雅、市川伸樹、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、結城敏志、武冨紹信
集学的治療により長期生存を得たStageⅣ直腸癌の一例
一般口演

2019.11.8-9　第46回日本臓器保存生物医学会学術集会（福島）
深井原、柴田賢吾、坂本聡大、島田慎吾、小林希、石川隆壽、若山顕治、藤好真人、川村典生、嶋村剛、武冨紹信
虚血再灌流傷害に対する水素ガスの作用点の探索
スポンサードシンポジウム

2019.11.9　第30回日本小児外科QOL研究会（伊勢）
河北一誠、北河徳彦、篠原彰太、都築行広、藤井俊輔、臼井秀仁、望月響子、新開真人
転移性肺腫瘍に対し複数回の肺切除を施行した症例の術後QOLの検討
一般口演

2019.11.14-16　第81回日本臨床外科学会総会（高知）
常俊雄介、臼井章、犬飼公一、山田元彦、茅田洋之、天野浩司、向井信貴、坂平英樹、中田康城、横田順一朗
開胸・開腹手術のメリットーAcute Care Surgeryの領域からー
シンポジウム

市川伸樹、本間重紀、船越徹、廣瀬邦弘、大島隆宏、山田健司、中本裕紀、数井啓藏、横田良一、本間友樹、前田好章、吉田雅、石川隆壽、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、武冨紹信
腹腔鏡下大腸切除における合併症と難易度に影響を与える因子の検討
シンポジウム

嶋村剛
肝細胞癌に対する肝移植適応基準（5-5-500基準）：全国集計から
パネルディスカッション

島田慎吾、神山俊哉、折茂達也、長津明久、旭火華、坂本譲、蒲池浩文、武冨紹信
肝細胞癌切除症例における術前HbA1cと予後および術後合併症
パネルディスカッション

吉田雅、本間重紀、市川伸樹、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、武冨紹信
腹腔鏡下低位前方切除術における一時的回腸ストマ造設の工夫
要望演題

江本慎、福長洋介、富永哲郎、平山和義、中西良太、永岡智之、田島ジェシー雄、松井信平、村橋賢、向井俊貴、山口智弘、長嵜寿矢、秋吉高志、小西毅、長山聡、上野雅資
大腸癌術後の異時性傍大動脈リンパ節転移切除症例の検討
一般口演

浜田和也、神山俊哉、旭火華、折茂達也、島田慎吾、長津明久、吉田祐一、石塚千紘、蒲池浩文、武冨紹信
肝エキノコックス症と鑑別が困難であった肝硬化性血管腫の一例
ポスターセッション

石塚千紘、神山俊哉、浜田和也、吉田祐一、坂本譲、旭火華、長津明久、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、杉野弘和、三橋智子、桑田靖昭、武冨紹信
若年男性に発生した巨大肝腫瘍の一例
ポスターセッション

今泉健、本間重紀、西田睦、松井博紀、宮岡陽一、市川伸樹、吉田雅、武冨紹信
結腸癌リンパ節転移の術前診断における経腹壁超音波検査の有用性
ポスターセッション

2019.11.21-24　第27回日本消化器関連学会週間（神戸）
坂本譲、由雄祥代、河合裕成、島垣智成、森泰三、松田道隆、土肥弘義、青木孝彦、吉田祐士、新井泰央、糸川典夫、大澤陽介、考藤達哉、武冨紹信
マスサイトメトリーを用いたNAFLD患者における免疫病態の網羅的解析
一般口演（若手奨励賞）

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、島田慎吾、長津明久、蒲池浩文、武冨紹信
EOB-MRIを用いた分肝機能評価の検討
デジタルポスター

2019.11.30　第3回北海道膵臓・胆道研究会（札幌）
山本啓一朗、蒲池浩文、折茂達也、坂本譲、長津明久、島田慎吾、神山俊哉、武冨紹信
大量肝切除後の胆道系腫瘍再発症例の二次治療としてのS-1の使用経験
一般口演

2019.12.4　第13回肝臓内視鏡外科研究会（横浜）
旭火華、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、坂本譲、蒲池浩文、武冨紹信
腹腔鏡下大肝切除における肝門部処理・肝実質切離の基本的手技の確立
一般口演

2019.12.5-7　第32回日本内視鏡外科学会総会（横浜）
吉田雅、本間重紀、市川伸樹、今泉健、宮岡陽一、松井博紀、武冨紹信
潰瘍性大腸炎に対する腹腔鏡下手術成績
ワークショップ

今泉健、本間重紀、松井博紀、宮岡陽一、市川伸樹、吉田雅、武冨紹信
当院におけるcT4b結腸癌に対する腹腔鏡手術の短期成績
サージカルフォーラム

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、今泉健、宮岡陽一、松井裕紀、武冨紹信
腹腔鏡下右半結腸切除D3郭清の定型化
サージカルフォーラム

松井博紀、本間重紀、宮岡陽一、今泉健、市川伸樹、吉田雅、高橋典彦、武冨紹信
大腸憩室症に対する腹腔鏡手術の検討
サージカルフォーラム

宮岡陽一、本間重紀、松井博紀、今泉健、市川伸樹、吉田雅、武冨紹信
当科における腹腔鏡下直腸切除術吻合時のV-Locを用いた補強の取り組み
ミニオーラル

江本慎、福長洋介、平山和義、中西良太、永岡智之、田島ジェシー雄、松井信平、村橋賢、向井俊貴、山口智弘、長嵜寿矢、秋吉高志、小西毅、長山聡、上野雅資
横行結腸癌に対する腹腔鏡下手術における吻合法別短期および長期成績の検討
ミニオーラル

旭火華、神山俊哉、折茂達也、島田慎吾、長津明久、坂本譲、蒲池浩文、武冨紹信
腹腔鏡下肝切除により切除した肝血管筋脂肪腫の3例
ミニオーラル

長津明久、神山俊哉、坂本譲、旭火華、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、武冨紹信
当科における肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除の長期成績
ミニオーラル

《学会発表（国際）》
2019.1.17-19　ASCO GI 2019（San Francisco）
Yokoo H, Kamiyama T, Sugiyama K, Orimo T, Shimada S, Nagatsu A, Kamachi H, Taketomi A.
The effect of lymphocyte-to-monocyte ratio on efficacy of sorafenib for recurrent hepatocellular carcinoma after curative resection.
Poster Session

Fujiyoshi S, Honda S, Minato M, Ara M, Suzuki H, Hiyama E, Taketomi A.
Investigation of aberrant DNA methylation in association with cisplatin-resistant hepatoblastoma.
Poster Session

2019.2.5-7　14th Annual Academic Surgical Congress（Houston, TX）
Ichikawa N, Homma S, Yoshida T, Kawamata F, Mitsuhashi T, Iijima H, Shibasaki S, Kawamura H, Ogasawara K, Kazui K, Kamiizumi Y, Taketomi A.
Impact of Primary Tumor Resection in Colorectal Cancer with Unresectable Metastasis.
Oral presentation

2019.2.8-12　11th AACR-JCA Joint Conference（Maui, Hawaii, USA）
Sawada A, Kawamata F, Ann-Marie Patch, Katia Nones, Ichikawa N, Yoshida T, Shibasaki S, Homma S, Kawamura H, Barbara Leggett, Nicola Waddell, Vicki Whitehall, Taketomi A.
Combined copy number variation analyses and immunohistochemical protein expression reveal precision medicine for colorectal cancer liver metastases.
Poster Session

Wakizaka K, Kamiyama T, Wakayama K, Orimo T, Yokoo H, Shimada S, Nagatsu A, Ohata T, Kamachi H, Taketomi A.
Wnt5a expression correlates with clinicopathologic features and prognosis of hepatocellular carcinoma patients.
Poster Session

2019.2.28-3.2　The 35th Congress of the Pan-Pacific Surgical Association Japan Chapter（Honolulu）
Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Nagatsu A, Kamachi H, Taketomi A.
Prognoses and clinicopathological characteristics of resected hepatocellular carcinoma with high impaired glucose tolerance.
Symposium

Zaisu M, Kawamura N, Watanabe M, Goto R, Shimamura T, Taketomi A.
CD28 costimulation of T cells in Transplantation.
Symposium

Ara M, Honda S, Kawakita I, Taketomi A.
A Consideration of Recurrence of Pediatric Inguinal Hernia after Laparoscopic Percutaneous Extraperitoneal Closure (LPEC):.
Oral presentation

2019.3.10-14 The 52nd Annual Meeting of the Pacific Association of Pediatric Surgeons (PAPS) (Christcurch, NZ)
Honda S, Ara M, Kawakita I, Okada T, Taketomi A.
A rare case of internal inguinal hernia recurrence after laparoscopic percutaneous extraperitoneal closure.
Poster Session

2019.4.18-20 APASL Single Topic Conference 2019 (Tokyo)
Sakamoto Y, Yoshio S, Kawai H, Shimagaki T, Mori T, Matsuda M, Doi H, Aoki Y, Yoshida Y, Arai T, Itokawa N, Osawa Y, Taketomi A, Kanto T.
Soluble Siglec-7 as a macrophage activation marker in patients with non-alcoholic fatty liver disease.
Oral Session

2019.4.25-27 KSELS 2019 44th Congress of KSELS and 9th International Symposium (Seoul, Korea)
Ichikawa N, Homma S, Yoshida T, Kawamata F, Shibasaki S, Taketomi A.
Difficulty of laparoscopic rectal resection in narrow pelvis.
Poster presentation(Best poster presentation award)

Imaizumi K, Sasaki T, Tsukada Y, Ikeda K, Nishizawa Y, Ito M.
Transanal total mesorectal excision of rectal cancer in patients with a previous total prostatectomy.
Poster presentation

Namba H, Honma S, Ichikawa N, Shibasaki S, Kawamata F, Yoshida T, Taketomi A.
The dual approach with laparoscopy and thracoscopy for a huge adult Bochdalek hernia repair.
Poster presentation

Ichimura K, Homma S, Ichikawa N, Yoshida T, Kawamata F, Shibasaki S, Kawamura H, Taketomi A.
Short-term outcomes of the intracorporeal anastomosis in laparoscopic distal gastrectomy for gastric cancer.
Poster presentation

Suzuki T, Homma S, Ichikawa N, Sato A, Kawamata F, Yoshida T, Shibasaki S, Taketomi A.
Laparoscopic excisional biopsy of para-aortic lymph node is a minimal invasive and useful method.
Poster presentation

2019.5.9-11 The 2nd World Congress of the International Laparoscopic Liver Society (ILLS 2019) (Tokyo)
Nagatsu A, Kamiyama T, Asahi Y, Shimada S, Orimo T, Kamachi H, Taketomi A.
Laparoscopic hepatectomy for patients with alveolar echinococcosis: a single-center experience.
Oral Session

Sakamoto Y, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Shimada S, Nagatsu A, Kamachi H, Taketomi A.
Establishment of our methods of pure laparoscopic partial hepatectomy of S7 and S8.
Oral Session

2019.5.15-18 25th International Liver Transplantation Society annual international congress (Tronto)
Kawamura N, Goto R, Watanabe M, Zaitsu M, Nagatsu A, Orimo T, Kamiyama T, Shimamura T, Taketomi A.
A proposal of indication for splenectomy in Living Donor Liver Transplantation.
Oral Session

Harada T, Kawamura N, Zaitsu M, Watanabe M, Goto R, Shimamura T, Taketomi A.
The risk of arterial complication in pediatric living donor liver transplantation: Importance of the arterial blood flow intensity .
Poster Session

Ichimura K, Kawamura N, Zaitsu M, Watanabe M, Goto R, Shimamura T, Taketomi A.
Liver transplantation for Genotype 4 HEV related acute-on-chronic liver failure.
Poster Session

2019.5.18-21 Digestive Disease Week 2019 (San Diego)
Kakisaka T, Fukai M, Banwait, J, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Baba H, Taketomi A, Goel A.
A novel gene expression signature for prediction earlier recurrence in early-stage hepatocellular carcinoma patients undergoing surgical resection.
Research Forum

Orimo T, Kamiyama T, Kamachi H, Yokoo H, Shimada S, Nagatsu A, Taketomi A.
Impact of tumor localization on the outcomes of surgery for an intrahepatic cholangiocarcinoma.
Poster Session

2019.6.1-5 American Transprant Congress (ATC) 2019 (Boston)
Ganchiku Y, Goto R, Igarashi R, Kanazawa R, Shibuya K, Fukasaku Y, Kawamura N, Zaistu M, Watanabe M, Taketomi A.
Potential Alloreactivity of Early Phase Graft Infiltrating Lymphocytes in Murine Cardiac Transplantation Model.
Poster Session

Shibuya K, Watanabe M, Ganchiku Y, Kanazawa R, Zaitsu M, Goto R, Taketomi A.
The efficacy of the spheroidal hepatocyte for hepatocyte transplantation.
Poster Session

2019.7.11-13 The 38th Sapporo International Cancer Symposium (Sapporo)
Imaizumi K, Suzuki T, Shimomura M, Sakuyama N, Tsukada Y, Sasaki T, Nishizawa Y, Kojima M, Taketomi A, Ito M, Nakatsura T.
Alteration of the immunosuppressive population after neoadjuvant therapies for locally advanced rectal cancer.
Poster presentation

Wakizaka K, Kamiyama T, Wakayama K, Orimo T,

Shimada S, Nagatsu A, Kamachi H, Yokoo H, Mitsuhashi T, Taketomi A.
The expression of Wnt5a on tumor cell membrane is associated with favorable pathological features and prognosis in hepatocellular carcinoma.
Poster Session

2019.8.29-31 The 10th Asia-Pacific Primary Liver Cancer Expert Meeting (Sapporo)
Taketomi A.
Current surgical treatments for hepatocellular carcinoma in Japan.
State-of the-Art Lecture

Sakamoto Y, Yoshio S, Nagatsu A, Asahi Y, Shimada S, Orimo T, Kamachi H, Kamiyama T, Kanto T, Taketomi A.
Increased frequency of PD-1+CD57+Siglec-7-dysfunctional NK cells in patients with non-alcoholic fatty liver disease.
Oral Session

Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Sakamoto Y, Asahi Y, Nagatsu A, Kamachi H, Taketomi A.
Prognoses and clinicopathological characteristics of resected NonBNonC hepatocellular carcinoma with high HbA1c.
Oral Session

Watanabe M, Koshizuka Y, Kawamura N, Goto R, Kamiyama T, Kamachi H, Shimamura T, Taketomi A.
A case of simultaneous pancreatoduodenectomy and living liver transplantation for biliary cancer complicated with congenital biliary dilatation.
Oral Session

Kawamura N, Goto R, Watanabe M, Ganchiku Y, Kamiyama T, Shimamura T, Taketomi A.
Salvage liver transplantation for advanced hepatocellular carcinoma:a single center experience.
Oral Session

Asahi Y, Kamiyama T, Orimo T, Shimada S, Nagatsu A, Kamachi H, Taketomi A.
Result of volume reduction hepatectectomy for unresectable hepatocellular carcinoma.
Oral Session

Goto R, Kawamura N, Watanabe M, Kamiyama T, Shimamura T, Taketomi A.
A successful treatment case with long-term survival for hepatocellularcarcinoma recurrence post-living donor liver transplantation by newlymolecular-target therapies.
Oral Session

Orimo T, Kamiyama T, Kamachi H, Shimada S, Nagatsu A, Asahi Y, Taketomi A.
Salvage hepatectomy for recurrent hepatocellular carcinoma after radiofrequency ablation and/or transcatheter arterial chemoembolization: A propensity score-matched analysis.
Poster Session

Nagatsu A, Kamiyama T, Asahi Y, Shimada S, Orimo T, Kamachi H, Taketomi A.
Long-term survival of laparoscopic hepatectomy.
Poster Session

Ara M, Honda S, Kondo A, Okumura K, Okada H, Takakuwa M, Taketomi A.
A Case of Transitional Liver Cell Tumor in a 10-Year-Old Boy.
Poster Session

2019.9.4-7 The 7th Biennial Congress of the Asian-Pacific Hepato-Pancreato-Billiary Association (Seoul)
Watanabe M, Goto R, Yamashita K, Todo S, Shimamura T, Taketomi A.
Operational tolerance with a donor antigen specific immunomodulatory cell therapy in living donor liver transplantation.
invited speaker

2019.9.5-6 4th international workshop on clinical transplant tolerance (Pittsburgh)
Goto R.
Anti-donor Treg therapy - an update.
invited speaker

2019.9.15-18 19th Congress of the Europiean Soiety for Organ Transplantation (ESOT) (Copenhagen)
Ganchiku Y, Goto R, Igarashi R, Kanazawa R, Shibuya K, Fukasaku Y, Kawamura N, Zaitsu M, Watanabe M, Fukai M, Taketomi A.
The Functional Alloreactivity in Vivo of Graft Infiltrating Lymphocytes in Early Phase Post-transplantation in mice.
Focus Group

Shibata K, Hayasaka T, Fukai M, Ishikawa T, Umemoto K, Sakamoto S, Kato K, Shimada S, Kobayashi N, Shimamura T, Kimura T, Taketomi A.
Elucidation of the Mechanisms of Hepatic Warm Ischemia and Reperfusion Injury(IRI) in Rats−Exhaustive analysis of novel biomarkers associated with the severity of IRI by imaging mass spectrometry−.
Poster Session

2019.9.29-10.2 16th Congress of The Asian Society of Transplantation (CAST) 2019 (Delhi)
Shibata K, Hayasaka T, Fukai M, Ishikawa T, Umemoto K, Sakamoto S, Kato K, Shimada S, Kobayashi N, Shimamura T, Kimura T, Taketomi A.
Elucidation of the Mechanisms of Hepatic Warm Ischemia and Reperfusion Injury(IRI) in Rats−Exhaustive analysis of novel biomarkers associated with the severity of IRI by imaging mass spectrometry−.
Oral Session

2019.11.8-12 AASLD The LIVER MEETING 2019 (Boston)
Sakamoto Y, Yoshio S, Kawai H, Mori T, Aoki Y, Yoshida Y, Arai T, Itokawa N, Osawa Y, Taketomi A, Kanto T.
Siglec-7 as an indicator of dysregulated NK cells and macrophage inflammation in patients with non-alcoholic fatty liver disease.

Poster Session

2019.12.1-5　The 13th Europen Coloretcal Congress（St. Gallen (Switzerland)）
Imaizumi K, Homma S, Nishida M, Matsui H, Miyaoka Y, Ichikawa N, Yoshida T, Taketomi A.
PREOPERATIVE DIAGNOSIS OF REGIONAL LYMPH NODE METASTASIS OF COLON CANCER BY CONTRAST-ENHANCED ULTRASONOGRAPHY.
Poster presentation

2019年論文一覧

《論文発表（和文）》

〈著書〉
川村典生、嶋村剛.
新　手術記録の書き方　肝臓の手術　脳死肝移植レシピエント手術.
消化器外科. 2019.04; 42(5): 779-784.

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、武冨紹信.
結腸・直腸・肛門の手術／大腸癌：鏡視下手術　腹腔鏡下結腸右半切除術.
消化器外科. 2019.04; 42(5): 633-637.

長津明久、武冨紹信.
手術アトラス 小網とArantius管を意識した肝左葉グラフト採取術.
消化器外科. 2019.10; 42(11): 1501-1512.

嶋村剛
肝癌の治療　肝移植　肝細胞癌の肝移植適応.
肝癌診療マニュアル. 2019; 第4版

〈原著〉
近藤享史、望月響子、藤井俊輔、大澤絵都子、浅野史雄、臼井秀仁、北河徳彦、新開真人.
超低出生体重児の消化管穿孔及び腸閉塞における中期的精神・身体発育.
小児外科. 2019.01; 51(1): 47-50.

本多昌平、菱木知郎、横井暁子、風間理郎、高間勇一、星野健、田口智章、檜山英三.
小児肝腫瘍に対するPHIT Trial－外科療法ガイドライン－.
日本小児血液・がん学会雑誌. 2019.09; 56(2): 107-112.

江本慎、佐野修平、坂本沙織、石川倫啓、河合朋昭、小林清二、小笠原和宏.
鼠径部ヘルニア嵌頓に対する腹腔鏡手術の治療経験.
北海道外科雑誌. 2019.12; 64(2): 29-32.

〈総説〉
神山俊哉
多包性肝エキノコックス症の臨床.
IASR. 2019.03; 40: 35-36.

嶋村剛
肝細胞癌に対する肝移植の適応基準再考.
外科. 2019.05; 81(6): 601-608.

島田慎吾、神山俊哉、折茂達也、長津明久、旭火華、若山顕治、敦賀陽介、横尾英樹、蒲池浩文、武冨紹信.
新しい肝予備能評価とPVEによる肝切除治療戦略.
北海道外科雑誌. 2019.06; 64(1): 2-7.

〈解説・特集〉
柴崎晋、川村秀樹、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武冨紹信.
【腹腔鏡下胃切除後体腔内再建のKnack & Pitfalls】腹腔鏡下胃全摘術　Overlap法による再建.
手術. 2019.01; 73(1): 33-38.

脇坂和貴、武冨紹信.

【内科医に求められる他科の知識-専門家が伝えるDo/Don't】
(第1章)外科　C.消化器外科　肝細胞がん.
内科．2019.09; 124(3): 1752-1755.

〈症例報告〉
小柳要、坂本聡大、今裕史、武田圭佐、小池雅彦、斎藤正人.
幽門側胃切除術後の脾動脈瘤破裂に対し,コイル塞栓術を施行した1例.
手術．2019.02; 73(2): 237-242.

坂本聡大、高橋秀徳、佐々木彩実、野村克、杉野弘和、大森一吉.
転移リンパ節の破裂による腹腔内出血で発症した進行胃癌の1例.
日本臨床外科学会雑誌．2019.02; 80(2): 315-319.

河北一誠、武田圭佐、田中友香、財津雅昭、今裕史、松原悠、曽我部進、鈴木昭、小池雅彦.
自然消退した上行結腸癌の1例.
日本消化器外科学会雑誌．2019.02; 52(2): 106-111.

河北一誠、武冨紹信.
腫瘍破裂による腹腔内出血でOncological emergencyを呈したが、IVRによる止血後に待機的肝切除術を施行しえた小児肝腫瘍の1例.
日本腹部救急医学会雑誌．2019.02; 39(2): 398.

阪田敏聖、神山俊哉、蒲池浩文、島田慎吾、中智昭、武冨紹信.
異時性4重複癌(直腸・肺・胃・肝)であった肝内胆管癌の1例.
臨床外科．2019.02; 74(2): 257-263.

奥村一慶、矢部沙織、下國達志、西川眞、宮崎美雪、鈴木智子、中川隆公、髙橋昌宏.
Mohs軟膏・内分泌療法・骨転移治療薬で病勢制御を得た高齢者高度進行乳癌の1例.
癌と化学療法．2019.02; 46(2): 336-338.

高橋直規、後藤了一、財津雅昭、川村典生、渡辺正明、神山俊哉、嶋村剛、武冨紹信.
南回りB2/3胆管を伴う肝左葉グラフトを用いた生体肝移植の一例.
移植．2019; 54(6)

河北一誠、今裕史.
前方アプローチと腹腔鏡のHybrid手術でメッシュ留置が可能であった腸管切除を要する鼠径ヘルニア嵌頓の1例.
日本ヘルニア学会誌．2019.03; 5(1): 35-40.

河北一誠、財津雅昭、植田隆、田中友、今裕史.
魚骨による虫垂穿孔に対して腹腔鏡下虫垂切除術を施行した1例.
日本腹部救急医学会雑誌．2019.03; 39(3): 531-534.

小林展大、後藤了一、矢部沙織、加藤拓也、川村典生、腰塚靖之、三野和宏、渡辺正明、植村一仁、高橋宏明、蒲池浩文、神山俊哉、武冨紹信、嶋村剛.
肝移植後膵癌の2例.
移植．2019.03; 53(6): 365-371.

江本慎、千田圭吾、谷道夫、河合朋昭、小林清二、小笠原和宏.
子宮筋腫の鼠経ヘルニア嵌頓が誘因と考えられた鼠径管膿瘍の1例.
日本腹部救急医学会雑誌．2019.05; 39(4): 787-791.

常俊雄介、倉内宣明,、鍵谷卓司、澤野武行、笠島浩行、原豊、遠山茂.
保存的に治癒し得た小児外傷性膵損傷の1例.
日本腹部救急医学会雑誌．2019.05; 39(4): 765-768.

太田拓児、三野和宏、志智俊介、植村一仁.
非閉塞性腸間膜虚血術後早期に再発した1例.
日本腹部救急医学会雑誌．2019.05; 39(4): 781-785.

吉田祐一、植木伸也、正司裕隆、佐藤利行、笠島浩行、中西一彰.
ICG蛍光法を用いて腹腔鏡下肝嚢胞天蓋切除術を施行した症候性巨大肝嚢胞の1例.
日本内視鏡外科学会雑誌．2019.07; 24(4): 298-303.

齋藤智哉、長津明久、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信.
孤立性に右心室転移をきたした肝細胞癌の1例.
日臨外会誌．2019.09; 80(9): 1739-1743.

海老沼翔太、川村秀樹、吉田雅、市川伸樹、本間重紀、清水亜衣、武冨紹信.
Stage IV進行胃癌の異時性孤立性脾転移に対して脾臓摘出術を施行した1例.
日本外科系連合学会誌．2019.10; 44(5): 903-910.

佐藤彩、吉田雅、本間重紀、市川伸樹、川俣太、柴崎晋、武冨紹信、福井秀章、松野吉宏.
濾胞性リンパ腫に併存した早期横行結腸癌の一切除例.
日本外科系連合学会誌．2019.10; 44(5): 960-965.

《論文発表（欧文）》

〈original article〉

Wakizaka K, Yokoo H, Kamiyama T, Ohira M, Kato K, Fujii Y, Sugiyama K, Okada N, Ohata T, Nagatsu A, Shimada S, Orimo T, Kamachi H, Taketomi A.
Clinical and pathological features of combined hepatocellular-cholangiocarcinoma compared with other liver cancers.
J Gastroenterol Hepatol. 2019 Jun; 34(6): 1074-1080.

Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Nagatsu A, Kakisaka T, Kamachi H, Abo D, Sakuhara Y, Taketomi A.
Hepatic hypertrophy and hemodynamics of portal venous flow after percutaneous transhepatic portal embolization.
BMC Surg. 2019 Feb; 19(1): 23.

Shimamura T, Akamatsu N, Fujiyoshi M, Kawaguchi A, Morita S, Kawasaki S, Uemoto S, Kokudo N, Hasegawa K, Ohdan H, Egawa H, Furukawa H, Todo S, Japanese Liver Transplantation Society.
Expanded Living-Donor Liver Transplantation Criteria for Patients With Hepatocellular Carcinoma Based on the Japanese Nationwide Survey: The 5-5-500 Rule - A Retrospective Study.
Transpl Int. 2019 Apr; 32(4): 356-368.

Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Nagatsu A, Ohata T, Kamachi H, Taketomi A.
Prognoses and clinicopathological characteristics for hepatocellular carcinoma originating from the caudate lobe after surgery.
World J Surg. 2019 Apr; 43(4): 1085-1093.

Ohira M, Shibuya K, Uemura K, Takahashi H, Ito Y.
Port-to-target distance as a predictive factor for difficult cases in single-incision laparoscopic cholecystectomy: an observational study.
Asian J Endosc Surg. 2019 Jul; 12(3): 255-263.

Ichikawa N, Homma S, Funakoshi T, Hattori M, Sato M, Kamiizumi Y, Omori K, Nomura M, Yokota R, Koike M, Kon H, Takeda K, Ishizu H, Hirose K, Kuraya D, Ishikawa T, Murata R, Iijima H, Kawamata F, Yoshida T, Ohno Y, Minagawa N, Takahashi N, Taketomi A.
Preoperative FOLFOX in resectable locally advanced rectal cancer can be a safe and promising strategy: the R-NAC-01 study.
Surg Today. 2019 Aug; 49(8): 712-720.

Imaizumi K, Tsukada Y, Komai Y, Nomura S, Ikeda K, Nishizawa Y, Sasaki T, Taketomi A, Ito M.
Prediction of urinary retention after surgery for rectal cancer using voiding efficiency in the 24 h following Foloey catheter removal.
Int J Colorecatl Dis. 2019 Aug; 34(8): 1431-1443.

Shibuya K, Kawamura H, Takahashi S, Ohno Y, Ichikawa N, Yoshida T, Homma S, Ishizu H, Takahashi M, Taketomi A.
Short-term and Long-term Outcomes Following Laparoscopic Gastrectomy for Advanced Gastric Cancer Compared With Open Gastrectomy.
Surg Laparosc Endosc Percutan Tech. 2019 Aug; 29(4): 297-303.

Kawamura H, Shibasaki S, Yoshida T, Shimokuni T, Sakihama H, Homma S, Takahashi M, Taketomi A.
The Feasibility of Laparoscopic Gastrectomy for Remnant Gastric Cancer.
Int Surg . 2019 Sep; 103(9-10): 435-442.

Toyoshima Y, Kitamura H, Xiang H, Ohno Y, Homma S, Kawamura H, Takahashi N, Kamiyama T, Tanino M, Taketomi A.
IL6 modulates the immune status of the tumor microenvironment to facilitate metastatic colonization of colorectal cancer cells.
Cancer Immunol Res. 2019 Dec; 7(12): 1944-1957.

Ichikawa N, Homma S, Yoshida T, Iijima H, Kawamata F, Sibasaki S, Kawamura H,Minagawa N, Kamiizumi Y, Fukasaku Y, Taketomi A.
Proficiency level of novice technically qualified surgeons in laparoscopic rectal resection.
Surg Laparosc Endosc Percutan Tech. 2019 Nov 22; DOI: 10.1097/SLE.0000000000000740: [Online ahead of print].

Ichikawa N, Homma S, Yoshida T, Mitsuhashi T, Iijima H, Ogasawara K, Kazui K, Kamiizumi Y, Kawamata F, Taketomi A.
An Increase of peripheral lymphocyte-monocyte ratio after primary site resection is associated with prolonged survival in unresectable colorectal carcinoma.
Surg Today. 2019 Nov 30; DOI: 10.1007/s00595-019-01927-1: [Online ahead of print].

Imaizumi K, Suzuki T, Kojima M, Shimomura M, Sakuyama N, Tsukada Y, Sasaki T, Nishizawa Y, Taketomi A, Ito M, Nakatsura T.
Ki67 expression and localization of T-cells after neoadjuvant therapies as reliable prediction markers in rectal cancer.
Cancer Sci. 2019 Dec 18; DOI: 10.1111/cas.14223: [Online ahead of print].

Ohira M, Yoshizumi T, Yugawa K, Kosai-Fujimoto Y, Inokuchi S, Motomura T, Mano Y, Toshima T, Itoh S, Harada N, Ikegami T, Soejima Y, Taketomi A, Mori M.
Association of inflammatory biomarkers with long-term outcomes after curative surgery for mass-forming intrahepatic cholangiocarcinoma.
Surg Today. 2019 Oct 30; DOI: 10.1007/s00595-019-01905-7: [Online ahead of print].

Wakizaka K, Yokoo, H, Kamiyama T, Kakisaka T, Ohira M, Tani M, Kato K, Fujii Y, Sugiyama K, Nagatsu A, Shimada S, Orimo T, Kamachi H, Matsuoka R, Taketomi A.
CD133 and epithelial cell adhesion molecule expressions in cholangiocarcinoma component are prognostic factors for combined hepatocellular-cholangiocarcinoma.

Hepatol Res. 2019 Oct 29; DOI: 10.1111/hepr.13443: [Online ahead of print].

Shimada S, Fukai M, Shibata K, Sakamoto S, Wakayama K, Ishikawa T, Kawamura N, Fujiyoshi M, Shimamura T, Taketomi A.
Heavy Water (D_2O) Containing Preservation Solution Reduces Hepatic Cold Preservation and Reperfusion Injury in an Isolated Perfused Rat Liver (IPRL) Model.
J Clin Med. 2019 Nov; 8(11): 1818.

Sakamoto Y, Yoshio S, Doi H, Kawai H, Shimagaki T, Mori T, Matsuda M, Aoki Y, Osawa Y, Yoshida Y, Arai T, Itokawa N, Ito T, Seko Y, Yamaguchi K, Itoh Y, Mise Y, Saiura A, Taketomi A, Kanto T.
Serum soluble Siglec-7 concentration as an indicator of liver macrophage activation and advanced fibrosis in patients with non-alcoholic fatty liver disease.
Hepatol Res. 2019 Dec 5; DOI: 10.1111/hepr.13464: [Online ahead of print].

Kimura S, Rickert CG, Kojima L, Aburawi M, Tanimine N, Fontan F, Deng K, Tector H, Mi Lee K, Yeh H, Markmann JF.
Regulatory B cells require antigen recognition for effective allograft tolerance induction.
Am J Transplant. 2019 Dec 11; DOI: 10.1111/ajt.15739: [Online ahead of print].

〈Review〉
Kamiyama T.
Recent advances in surgical strategies for alveolar echinococcosis of the liver.
Surg Today. 2019 Nov 25; DOI: 10.1007/s00595-019-01922-6: [Online ahead of print].

〈Case report〉
Nakamoto H, Nishikawa M, Ishikawa T, Yokoyama R, Taketomi A.
Simultaneous Laparoscopic Cholecystectomy and Combined Endoscopic and Laparoscopic Surgery for an Endoluminal Tumor of the Sigmoid Colon: A Case Report.
Am J Case Rep. 2019 Jan; 20: 1-4.

Ishikawa T, Homma S, Nishikawa M, Nakamoto H, Yokoyama R, Taketomi A.
Laparoscopic abdominoperineal resection with lateral lymph node dissection for advanced rectal and prostate cancer with synchronous lateral lymph node metastases.
Asian J Endosc Surg. 2019 Jan; 12(1): 118-121.

Fujii Y, Tsuruga Y, Sakamoto S, Shomura H, Kazui K.
Primary Mixed Neuroendocrine Nonneuroendocrine Neoplasm of the Gallbladder Associated with Pancreaticobiliary Maljunction without Bile Duct Dilation.
Am Surg. 2019 Feb; 85(2): e74-e76.

Murata R, Yoshida T, Kobayashi N, Watanabe Y, Homma S, Echizenya H, Taketomi A.
Two-Stage Surgery for Intraperitoneal and Retroperitoneal Multicentric Liposarcoma Causing Hydronephrosis: A Case Report.
Surg Case Rep. 2019 Feb; 5(1): 18.

Ishikawa T, Nishikawa M, Nakamoto H, Yokoyama R, Taketomi A.
Case of Chronic Pain After Laparoscopic Percutaneous Extraperitoneal Closure in an Adolescent Girl With Inguinal Hernia in Which Open Repair Was Effective.
Asian J Endosc Surg. 2019 Apr; 12(2): 211-213.

研究費一覧

種別	事業名	研究代表者	研究分担者	交付額（分担金配分額）	研究課題名
科研費	基盤研究（B）	武冨　紹信		4,800,000	DGKα/ζを標的とした消化器がんに対する次世代免疫療法の開発研究
	挑戦的研究（萌芽）	武冨　紹信		1,900,000	化学療法抵抗性獲得機序におけるDGKα高発現の意義の解明とその制御法の開発研究
	基盤研究（S）	（前原　喜彦）	武冨　紹信	（100,000）	がん幹細胞化に関与するSphere形成メカニズムを標的とした革新的治療開発
	基盤研究（C）	神山　俊哉		延長	肝癌細胞株における糖鎖異常と浸潤能との関連性の解析
	基盤研究（B）	嶋村　剛		2,100,000	脂肪肝グラフトのミトコンドリア機能と抗酸化能を増強する画期的な肝体外灌流法の開発
	基盤研究（C）	早坂　孝宏		1,000,000	イメージング質量分析を用いた癌微小環境一細胞脂質プロファイルの解明
	基盤研究（C）	若山　顕治		1,700,000	脂肪肝グラフトの脂肪滴を有効利用する画期的な保護性タンパク質機能の賦活法の探索
	基盤研究（C）	本間　重紀		1,200,000	全ゲノム解析とCRISPR/Cas9を応用した大腸癌肝転移に対する新規治療戦略
	基盤研究（C）	渡辺　正明		500,000	膵島移植における長期グラフト生着のための治療法の開発
	基盤研究（C）	折茂　達也		700,000	APC結合タンパクEB1による膵癌の放射線抵抗性の画期的診断とその分子機構の解明
	基盤研究（C）	深井　原		600,000	14-3-3とNrf2の制御による革新的な心停止腎グラフトの灌流修復法の開発
	基盤研究（B）	（三高　俊広）	深井　原	（100,000）	新生肝細胞創出による機能不全に陥った肝臓を蘇らせるための基礎的研究
	基盤研究（C）	後藤　了一		1,300,000	ヒト化マウスによる難治性胆汁うっ滞性疾患と移植後HLA抗体の病態解明と治療法開発
	基盤研究（C）	本多　昌平		1,200,000	肝細胞癌との共通メカニズムに基づく肝芽腫の新規分子診断・治療開発
	基盤研究（A）	（檜山　英三）	本多　昌平	（250,000）	小児がん研究グループによる小児肝がんの海外診療状況調査と国際共同臨床研究基盤整備
	基盤研究（C）	（宮城　久之）	本多　昌平	（50,000）	組織立体再構築を用いた直腸肛門奇形発生のエピゲノム解析
	挑戦的研究（萌芽）	植木　伸也		2,000,000	免疫記憶の制御をターゲットとした、免疫抑制に対する新規アプローチ法の開発研究
	若手研究	川村　典生		1,300,000	過小肝グラフトの肝再生を賦活する体外灌流治療の開発とメカニズム探索
	若手研究	島田　慎吾		1,200,000	腸内細菌叢を標的とした新たな肝細胞癌術後再発制御法の開発
	若手研究（B）	島田　慎吾		延長	脂肪切除後の分子病態解明と抗酸化能増強による易障害性、易転移性克服法の開発
	若手研究	財津　雅昭		1,300,000	移植後早期グラフト浸潤リンパ球の抗原特異性の有無に関する基礎的検討
	若手研究	市川　伸樹		1,100,000	転移性大腸癌における原発巣切除による免疫状態変化と予後に関する検討
	若手研究	吉田　雅		1,000,000	炎症性腸疾患活動性関連因子に関する基礎的研究
	若手研究	荒　桃子		1,300,000	CDDP耐性肝芽腫におけるメチル化異常の解明と新規治療法の探求
	基盤研究（C）	（宮城　久之）	荒　桃子	（50,000）	組織立体再構築を用いた直腸肛門奇形発生のエピゲノム解析
	若手研究（B）	大野　陽介		900,000	大腸がん微少環境下における抗原提示細胞の機能制御を基軸とした新規治療法の開発
	研究活動スタート支援	藤好　真人		1,100,000	肝移植と機械灌流法を応用した革新的な転移性肝癌に対する体外治療法の開発
AMED・厚労科研	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業ii	（溝上 雅史）	武冨　紹信	（7,280,000）	個別化医療に対応したゲノム編集技術による肝臓内HBVゲノムの完全不活化を目指した革新的治療法の包括的開発
	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	（考藤　達哉）	武冨　紹信	（3,640,000）	NASH肝がんのリピド・ゲノミクス研究に基づく個別化医療の開発
	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	（坂本　直哉）	武冨　紹信	（1,600,000）	慢性肝疾患の組織病態進展機構の解析および血清組織糖鎖の網羅的探索による予後予測マーカーの構築
	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	（前原　喜彦）	武冨　紹信	（300,000）	多施設共同研究による移植後肝炎ウイルス再発に対する標準的治療の確立
	厚生労働行政推進調査事業費補助金 エイズ対策政策研究事業	（江口　晋）	嶋村　剛	（200,000）	血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者の肝移植に関する研究
その他	公益信託　楡刀会外科医学研究助成基金	島田　慎吾		500,000	脂肪肝を背景とした肝癌に対する腸内細菌叢をターゲットとした新規治療法の開発
	公益信託　楡刀会外科医学研究助成基金	本多　昌平		500,000	Transitional liver cell tumorsの分子基盤解明：ターゲットシークエンス解析によるWnt・Mycパスウェイ変異解析

2019年業績紹介

〈学位取得者〉

学位取得者（博士）

水上　達三

■学位取得年月
2019年3月

■学位論文名
抗mesothelin抗体Amatuximabはmesothelin高発現膵癌細胞株によるマウス腹膜播種モデルにおいて gemcitabine の抗腫瘍効果を増強する (The anti-mesothelin monoclonal antibody amatuximab enhances the anti-tumor effect of gemcitabine against mesothelin-high expressing pancreatic cancer cells in a peritoneal metastasis mouse model)

■基礎論文
The anti-mesothelin monoclonal antibody amatuximab enhances the anti-tumor effect of gemcitabine against mesothelin-high expressing pancreatic cancer cells in a peritoneal metastasis mouse model.
Mizukami T, Kamachi H, Fujii Y, Matsuzawa F, Einama T, Kawamata F, Kobayashi N, Hatanaka Y, Taketomi A. Oncotarget. 2018 Sep 18;9(73):33844-33852.

■要　旨
膵癌は治癒切除症例においても予後不良の癌であり、手術予後の改善のためには、診断時に検出できない、あるいは術中・術後に残存する微小な癌細胞の制御が必須である。
本研究では、膵癌術後補助療法を想定した mesothelin（以下 MSLN）高発現膵癌腹膜播種マウスモデルを用いて、抗 MSLN 抗体 Amatuximab（以下 AMT）投与により gemcitabine（以下 GEM）の抗腫瘍効果が増強することを示した。
まず、MSLN発現の高い膵癌細胞株AsPc-1に分泌型ルシフェラーゼであるGluc遺伝子を導入し、分泌される Gluc の発光活性により腫瘍量の客観的評価可能な膵癌腹膜播種マウスモデルを作製した。このモデルへの AMT 腹腔内投与実験では、血漿 Gluc 活性には有意差は見られないが、投与群においてのみ明らかな腹膜播種結節の減少とシャーベット状の癌細胞集塊(sherbet-like aggregates、以下 SLA)が認められた（Fig.1）。次に AMT および GEM の相乗効果の検討では、GEM 単独腹腔内投与群と比較し、GEM ＋ AMT 群では血漿 Gluc 活性が有意に低く、肉眼的にも明らかな腹膜播種結節の減少を認め、SLA がほぼ消滅した（Fig.2）。この抗腫瘍効果の増強は、AMT の MSLN-CA125 結合阻害作用により腫瘍塊形成が抑制されて SLA が形成され、その結果 GEM の腫瘍細胞へのアクセスが良好になったためと推論し、AMT を用いた術後補助療法は、MSLN高発現の膵癌による腹膜播種を防止するための有用な戦略であり得ることが期待される。

Fig.1

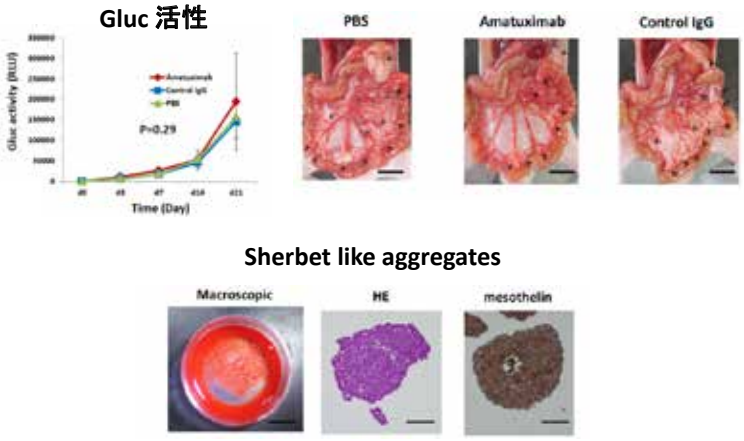
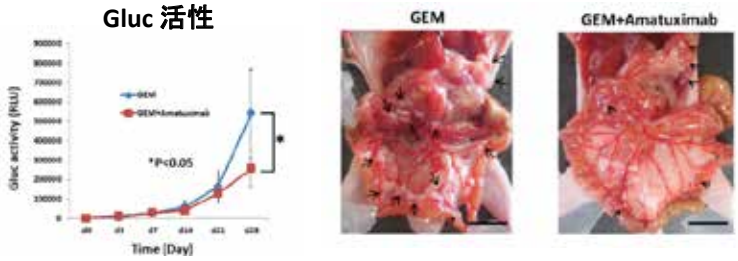


Fig.2



学位取得者（博士）

松澤　文彦

■学位取得年月
2019年3月

■学位論文名
ヒト膵癌細胞株に対する抗mesothelin抗体(Amatuximab)の治療効果に関する研究

■基礎論文
Mesothelin blockage by anti-mesothelin antibody (MORAb-009) suppresses cell invasiveness, enhances gemcitabine sensitivity, and regulates cancer cell stemness in mesothelin-positive pancreas cancer cells（投稿中）

■要　旨
【背景と目的】
　これまで当科では、抗mesothelin抗体(Amatuximab)を投与された膵癌腹膜播種マウスにおいて腹膜播種の減少と腹水中に浮遊するシャーベット状の癌細胞集塊(以下sherbet-like aggregates)が生じることを明らかにした．本研究の目的はsherbet-like aggregatesでの分子発現変化，Amatuximabのin vitroでの効果を検討し，抗腫瘍効果の分子機構を明らかにすることである．
【材料と方法】
1）膵癌腹膜播種モデルマウスから播種巣およびsherbet-like aggregatesを採取し各々での分子発現を比較検討した．
2）mesothelin高発現膵癌細胞株，低発現株を用い，in vitroにおいてAmatuximabが細胞挙動及び分子発現に与える影響を検討した．
【結果】
1）sherbet-like aggregatesで　はE-cadherin，Ki-67，p-ERK1/2，ALDH1，CD44，c-METの発現が低下していた（図1）．腹膜に接するように存在する膵癌細胞集塊があり，sherbet-like aggregatesよりも腹膜播種巣に近似した分子発現を示していた．
2）mesothelin高発現株ではAmatuximab群で浸潤能，遊走能，gemcitabine耐性が抑制され（図2），MEK1/2、ERK1/2，p-NFκB，NFκB，p-Stat3，Stat3，p-MET，CD44の発現が低下した（図3）．
【結語】
　Amatuximabによるmesothelin阻害が細胞生存や増殖に関連する因子及び癌幹細胞に影響を与えることによりmesothelin高発現膵癌細胞株に対し抗腫瘍効果を発揮することが明らかとなった．

図１　腹膜播種巣及び sherbet-like aggregates での分子発現の検討

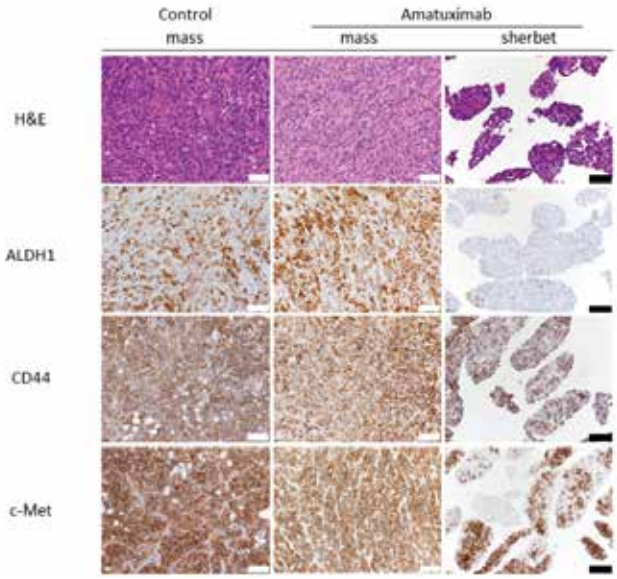


図２　Amatuximab の遊走能への影響

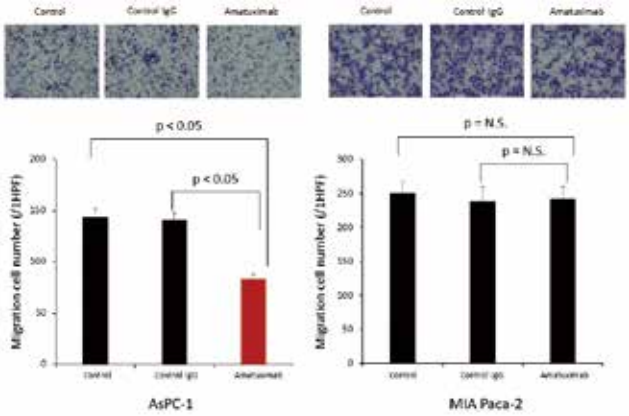
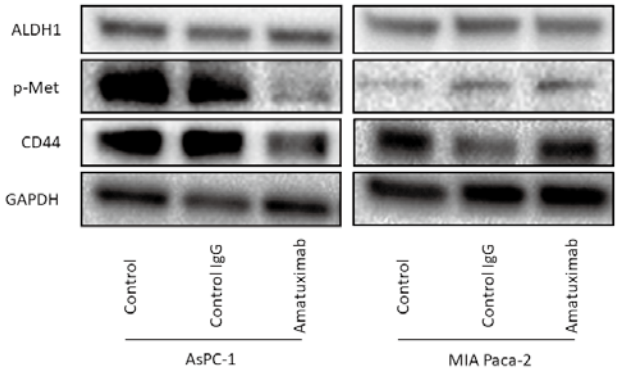


図３　Amatuximab による CSC 関連の分子発現の検討



２０１９年の年表・年間行事

2019年の年表・年間行事

月			行事
1月	1/4（木）	08：30−	仕事初め　於：1外科CR
	1/12（土）	13：00−16：35	第26回日本外科学会生涯教育セミナー（テーマ「最新の診断技術」）　於：フラテホール（北海道地区教育委員長）
	1/25（金）	19：00−21：00	New Year Seminar 2019（武田薬品）　於：ホテルモントレ札幌
			講師：奈良県立医大消化器・総合外科教授　庄雅之　先生
	1/26（土）	11：00−12：30	教室総会　於：医学部学友会館フラテ特別会議室
	1/26−1/27（土、日）		第33回札幌冬季がんセミナー　於：ロイトン札幌（大鵬製薬）（当番世話人）
2月	2/23（土）	13：00−15：30	第44回北海道小児がん研究会　於：札幌医大
	2/23（土）	15：00−18：00	第3回Hokkaido消化器内科・外科合同カンファレンス（EAファーマ）（当番世話人）　於：ホテルニューオータニイン札幌
3月	3/2（土）	14：00−17：00	第100回日本小児外学会北海道支部地方会記念講演会　於：札幌グランドホテル
		17：00−19：00	第100回日本小児外学会北海道支部地方会祝賀会　於：札幌グランドホテル
	3/20（水）	19：00−21：00	7−2病棟送別会　於：ホテルモントレ札幌
4月	4/1（月）	08：30−09：00	年度仕事初め　於：1外CR
	4/19（金）	19：00−21：00	北大1外科同門会　於：大阪（日本外科学会2日目）
	4/24（水）	19：00−21：00	7−2病棟歓迎会　於：京王プラザホテル札幌
5月	5/17（金）	19：00−21：00	Surgical Oncology Meeting（バイエル薬品）　於：ホテルニューオータニイン札幌
			講師：大阪市立大学肝胆膵外科 久保正二 先生
	5/18（土）	17：00−19：00	第6回北海道手術手技研究会（科研製薬）　於：札幌プリンスホテル国際館パミール
			講師：国際医療福祉大学消化器外科　板野理　先生
	5/23（木）	19：00−21：00	小児外科G懇親会　於：福岡（日本小児外科学会1日目）
6月	6/1（土）	15：30−17：00	人材確保委員会　於：ニューオータニイン札幌
		16：00−17：00	楡刀会役員会　於：ニューオータニイン札幌
		17：00−18：00	楡刀会総会　於：ニューオータニイン札幌
		18：00−20：00	新人歓迎会　於：ニューオータニイン札幌
	6/8（土）	15：00−19：00	第30回北海道肝がん研究会（バイエル）　於：札幌プリンスホテル国際館パミール（代表世話人）
			講師：近畿大学消化器内科　工藤正俊　先生
	6/22-6/23（土、日）		医局旅行　於：登別温泉
7月	7/5（金）	18：00−22：00	医局説明会および懇親会　於：ぼんぼこ亭すもう茶屋
	7/6（土）	16：00−18：00	第6回北海道肝胆膵内視鏡外科セミナー（J&J）　於：センチュリーロイヤルホテル
			講師：東京医科大学消化器外科・小児外科学分野准教授　永川裕一　先生
	7/10（水）	17：00−18：30	縫合結紮講習会（対象：医学部生）
		19：00−21：00	同懇親会　於：BanKスキー場
	7/12（金）	19：00−21：00	第8回札幌VTRカンファレンス（コヴィディエン）　於：メルキュールホテル札幌　講師：北里大学外科 渡邊昌彦 先生
	7/18（木）	19：00−21：00	北大1外科同門会　於：東京（日本消化器外科学会2日目）
	7/20（土）	16：00−18：00	第2回da Vinci勉強会（インテュイティブサージカル）
8月	8/2（金）	19：00−21：00	第7回北海道消化器癌カンファレンス　於：札幌グランドホテル（大鵬製薬）
			講師：熊本大学消化器外科 馬場秀夫 先生
	8/19（月）	17：00−	医局BBQ
	8/29-8/31（木−土）		APPLE2019　於：ロイトン札幌（Co-Chairman）
9月	9/14（土）	16：00−18：00	第7回北海道サージカルアカデミー　於：センチュリーロイヤルホテル（J&J）
			講師：東北大学消化器外科 内藤剛　先生
	9/18（水）	18：30−20：30	1外ラグビーワールドカップ決起集会　於：Irish pubBRIAN BREW
	9/21-9/22（土、日）		HOPES2019　於：北大学術交流会館（第116回臨床外科北海道支部例会・会長）
	9/28（土）	15：00−18：00	第2回北海道移植免疫研究会　於：アステラス大通ビル（アステラス製薬）
			講師：独協医大解剖学マクロ講座　上田祐司　先生
10月	10/18（金）	19：00−20：30	第3回札幌外科漢方セミナー（ツムラ）　於：札幌グランドホテル　講師：徳島大学消化器・移植外科　島田光生　先生
	10/19（土）	13：00−16：00	関連病院・医長連絡会議　於：フラテ特別会議室
11月	11/1（金）	19：00−21：00	第7回North Japan Cancer Forum（中外製薬）　於：ホテルニューオータニイン札幌
			講師：岡山大学消化器外科　藤原俊義　先生
	11/2（土）	13：00−17：00	wet labo（J&J）　於：札幌センタービル5階会議室
12月	12/7（土）	17：00−18：00	楡刀会講演会　於：ニューオータニイン札幌
		18：00−20：00	楡刀会忘年会　於：ニューオータニイン札幌
	12/18（水）	19：00−21：00	7−2病棟忘年会　於：メルキュールホテル札幌
	12/27（金）	18：00−19：00	仕事納め　於：1外科CR

1/4 2019年仕事始めの会を行いました。

2019年1月4日8時15分より医局にて仕事始めの会がおこなわれました。武冨教授より、未来を見据えて新しいことにチャレンジすること・変革していくことの大切さについての話がなされました。続いて同日付けで医学研究院講師に昇進された本間先生より、新しい立場としての抱負を述べていただきました。

教室で勤める医師・秘書・実験助手が一同に会し、新しい1年のスタートを切る上で共通の認識を持つ重要な場であったと考えております。

みなさん今年も消化器外科Ⅰ全体を盛り上げて素晴らしい1年となるよう頑張っていきましょう。どうぞ宜しく御願い致します。

（文責：本多　昌平）

1/25 New Year Seminar 2019が開催されました

2019年1月25日ホテルモントレ札幌にて「New Year Seminar 2019」が開催されました。

特別講演1は北海道大学病院 腫瘍センター 中積 宏之先生より「ガイドラインを考慮した大腸癌化学療法～分子標的薬をどうやって選ぶ？～」の演題で御講演いただきました。様々な臨床研究データと併せて、簡潔で分かりやすく抗EGFR抗体や血管新生阻害薬の使い分けをレクチャーしていただきました。

特別講演2は奈良県立医科大学 消化器・総合外科 教授 床 雅之先生より「膵癌集学的治療の成果と課題」の演題で御講演いただきました。現在も他臓器癌と比べ予後不良である膵癌の治療成績を向上させるための術前化学療法等の取り組みをチーム医療の重要性とともにレクチャーしていただきました。

外科医として癌治療に関わる上で知っておくべき知識の整理ができて、また臨床データから考えられる最新の治療コンセンサスに関して学ぶことができ、非常に有意義なセミナーとなりました。

大雪で路面状況・お足元の悪い中、お集まりいただいた先生方に感謝いたしますとともに、当セミナーを企画・運営していただいた関係者の方々にも厚く御礼申しあげたいと思います。

（文責：田仲　大樹）

1/26 教室総会を開催いたしました

2019年1月26日、フラテ会館 特別会議室にて当科教室総会が開催されました。大学・関連施設から数十名の先生方が参加されました。

今年は網走厚生病院の中野詩朗先生が議長に選出され、会の進行をしていただきました。外来・病棟・内務報告の後、臨床5グループ（小児・消化管・肝・胆膵・移植）、研究グループより今年度の臨床、学術実績や今後の目標などが示されました。また武冨紹信教授より来年度の医局長の推薦があり、本年度に引き続き本多昌平先生が務めることが承認されました。

総会の後は医局カンファレンスルームに移動し食事をしながら顔見せ会もあり、久しぶりの再会となった先生方もおられ、近況を報告しあうなど非常に楽しい会となりました。

（文責：市村　健太郎）

1/31 宮岡陽一医師、南極観測隊越冬隊医療隊員としての1年間の活動を無事終了！

第59次南極地域観測隊員（越冬隊）に医療隊員として参加していた宮岡陽一医師がこの度1年3か月の活動を無事終了し、本日南極昭和基地を離れ帰国の途につきました。

1年間さまざまな事を経験したようで、大変なこともあったことと思います。帰国後に本人から帰朝報告をしてもらいますので、皆様楽しみにしてください。

一回りも二回りも大きくなった宮岡君の帰国後の活躍を期待しています。

2/12 市川先生第14回ASC帰朝報告

2月5-7日米国テキサス州ヒューストンにてAssociation for Academic Surgery（AAS）と Society of University Surgeons（SUS）の共催により第14回Academic Surgical Congressが開催されました。

SUSとの国際交流の一環として、日本外科学会国際委員会から推薦を受け、国内から10名の若手外科医が、同学術集会での口演を行いました。

当科からは、市川伸樹が参加し、Impact of primary tumor resection in colorectal cancer with unresectable metastasisという演題名にて、切除不能転移性大腸癌における原発巣切除の意義を免疫学的観点からプレゼンテーション致しました。

今回、日本で当たり前の事が当たり前でないという医療分化の違いを実感しました。英語で意思疎通を図る事はもちろんですが、日本で行っている仕事を、自信を持って世界に発信できるよう、プレゼンテーション/ディスカッションできる能力を身につける事が大切であると痛感致しました。今回の貴重な経験を糧に更に研鑽を積んで参りたいと思います。

最後になりましたが、このような機会をお与えくださいました事に深謝申し上げます。

（文責：市川　伸樹）

2/23 日本小児血液・がん学会教育セミナーが開催されました

さる2月23日、日本小児血液・がん学会教育セミナーにて兵庫医科大学小児外科教授　大植孝治先生の教育講演を拝聴しました。ウイルムス腫瘍の臨床上の問題点と現在行われている臨床研修に関してとても詳しく分かりやすくご講演いただき大変勉強になりました。

前夜には大植先生を囲み、ささやかながら食事会を設けました。関西地区の小児外科の先生方の臨床への気持ちの熱さ、層の厚さに大変刺激を受ける楽しい夜でした。　(文責：荒　桃子)

3/2 第13回医局対抗バスケット大会が開催されました

2019年3月2日（土）に札幌市東区体育館にて、第13回医局対抗バスケットボール大会が開催されました。参加チームは当科を含め合計８チームでした。

予選リーグは脳神経外科に21-9、形成外科に14-5で勝利し、2戦2勝の1位通過で決勝トーナメントに進むことになりました。準決勝は第二外科との対戦となりました。中盤以降、リードする時間帯も多かったのですが、延長戦の末、惜しくも31-34で惜敗してしまう結果となりました。3位決定戦では全ての選手が出場することができました。最終順位は4位でありました。そして第一外科一丸となって試合ができ、第一外科の結束を強める試合ができました。

試合後は打ち上げを行い、各々来年への雪辱を誓いつつ、大変楽しい飲み会となりました。

この度は医局対抗バスケットボールへの多大なご支援・ご声援をくださり本当にありがとうございました。遠方からの先生のご参加もあり、ご理解・ご協力いただきました各関連病院の先生方に対しこの場を借りて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

（文責：木井　修平）

3/2 第100回日本小児外科学会北海道地方会および記念祝賀会が開催されました

2019年3月2日（土）札幌グランドホテルに於いて、第100回日本小児外科学会北海道地方会および記念祝賀会が開催されました。

本地方会が発足してから50年目の節目となる記念大会として1年近くかけて準備してきました。地方会においては「心に残る症例」をテーマに、天使病院小児外科、北海道立子ども総合医療・療育センター小児外科、北海道大学消化器外科Ⅰ（小児外科）、北海道大学泌尿器科よりそれぞれ発表がありました。

会長講演として旭川医科大学外科学講座小児外科 宮本和俊会長より、「北海道における小児外科の黎明と発展」と題してこれまでの北海道小児外科の歩みを講演いただきました。引き続き特別講演として、日本小児外科学会理事長であられる日本大学医学部小児外科　越永従道教授により、「日本小児外科学会の変革」と題して今の日本小児外科学会の状況や理事長に就任されてから新たに改革された制度・体制について大変興味深い講演を頂きました。

地方会終了後には第100回記念祝賀会が同会場にて開催され、旭川医科大学小児外科　宮城久之先生の司会のもと、明るく楽しい雰囲気で大いに盛り上がりました。来賓としてご出席いただきました越永従道先生、戸塚守夫先生、樫野隆二先生をはじめ、お忙しい中ご臨席いただきました皆様に改めて深謝申し上げます。

これまでの100回の歴史の重みを認識し、これからの本会の益々の発展を決意する大変有意義な時間となりましたことをご報告致します。　　（文責：本多　昌平）

3/4 リサーチ送別会を開催いたしました

本年度、当研究室から大学院生の巌築慶一先生、木井修平先生、藤好直先生、実験助手の三好早香さんの４名が旅立たれることになりました。

卒業される4名の皆様に、これまでの実験生活を振り返り研究に対する熱い思いを語って頂きました。武冨教授と卒業生、また指導教官と卒業生で誓いの盃を組み交わし、涙あり笑いありの大変盛り上がる会となりました。

諸先輩方が残してくださった薫陶を胸に当教室の研究をさらに邁進させていきたいと思います。本当にお疲れ様でした。

（文責：沢田　尭史）

3/5 第22回モーニングセミナーを開催いたしました

平成31年3月5日に第22回モーニングセミナーを開催しました。

今回は北海道大学大学院医学研究科機能再生医学分野　整形外科学教室　教授　岩崎倫政先生をお招きし、「新規関節軟骨再生治療法の開発　ー基礎から臨床応用へー」というテーマで、

軟骨再生医療の研究から臨床応用へのStepを先生の教室の成功例をもとにわかりやすくお話ししていただきました。

自然治癒がほとんど期待できない軟骨損傷の細胞治療、バイオマテリアルを用いた再生医療の知見は非常に興味深く、私の研究テーマである肝細胞移植と結びつけながら、拝聴いたしました。

また、研究の臨床応用はとても長い道のりであることを改めて感じましたが、一方で私自身は今現在の自分の研究をしっかり取り組んでいこうと再認識致しました。

ご講演終了後は活発な質疑応答が行われ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

（文責：渋谷　一陽）

3/9 アニマルラボを開催いたしました

2019年3月9日、神奈川県川崎市のメドトロニックイノベーションセンターにて本年度3回目となるアニマルラボが開催されました。

初期研修医として板倉恒輝先生、大橋慶太先生、川崎祐寛先生、津坂翔一先生がご参加され、後期研修3名と柴田健吾先生とともに、腹腔鏡下胆嚢摘出術・腹腔鏡下高位前方切除術・腹腔鏡下幽門側胃切除術に挑戦しました。講師として下國達志先生、小丹枝裕二先生、市川伸樹先生にご指導いただき、普段経験することの少ない手技を集中的に実践することができました。スコピスト、助手、術者の役割を交代しながらタスクに挑戦し、非常に有意義な時間となりました。

お忙しい中ご参加くださった先生方、このような貴重な機会を設けてくださった関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

初期研修医の先生方には消化器外科に興味を持っていただいている方もいらっしゃいました。近い将来一緒に働ける日を楽しみにしております。

（文責：佐藤　彩）

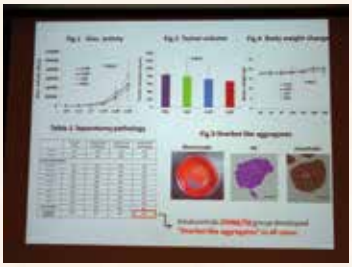
3/15 平成31年度3月修了学位審査「公開発表会」が行われました

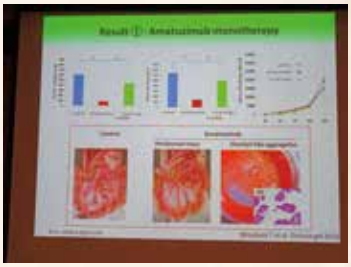
平成31年度3月学位取得者が決定し、公開発表会が行われました。

当教室からは、当教室講師 蒲池 浩文先生の司会進行のもと、水上 達三先生（平成21年入局・学位タイトル「抗mesothelin抗体Amatuximabはmesothelin高発現膵癌細胞株によるマウス腹膜播種モデルにおいてgemcitabineの抗腫瘍効果を増強する（The anti-mesothelin monoclonal antibody amatuximab enhances the anti-tumor effect of gemcitabine against mesothelin-high expressing pancreatic cancer cells in a peritoneal metastasis mouse model）」、松澤 文彦先生（平成22年入局・学位タイトル「ヒト膵癌細胞株に対する抗mesothelin抗体(Amatuximab)の治療効果に関する研究(Study on efficacy of Amatuximab for human pancreatic cancer cell lines)」）が発表されました。

水上先生、松澤先生、おめでとうございます。

益々の研鑽を期待したいと思います。





3/19　8Kモニタによる腹腔鏡手術を行いました。

本日、昨年に引き続き当院４例目の８Kモニタを用いた腹腔鏡下大腸切除を行いました。

このシステムでは、70インチの巨大なモニタを見ながら手術を行う事が可能です。大画面に映像を展開しても画質が悪化せず、組織の細部まで鮮明に描出され、より精密な手術が出来たと考えます。また、ライブ感があり、臨場感あふれる手術を術場にいる全員で共有する事が出来ました。

腫瘍学的安全性と教育的効果に優れる８Kモニタを用いて今後も外科医療に貢献して参りたいと思います。

3/20　7-2病棟送別会を開催いたしました

3月20日（水）にホテルモントレ札幌に於いて7-2病棟送別会が開催されました。

病棟再編成に伴い、今回より呼吸器外科、消化器内科内視鏡/IBDグループの先生方と合同で送別会を行うこととなりました。総勢66名が参加し、各科の垣根を超えた大変盛況な会となりました。

本年度の離職者は、7-2病棟看護師6名、第一外科16名（医師7名、後期研修医8名、実験助手1名）、呼吸器外科2名、消化器内科　内視鏡グループ2名、IBDグループ1名の計27名でした。一人一人今後の豊富を語ってくださいましたが、皆ユニークなスピーチで、次のステップへの希望に満ち溢れている印象でした。各グループ長よりいただいた餞の言葉を胸に、新しい地でご活躍していただきたいと思います。

（文責：藤居　勇貴）

3/27 髙橋先生MGH研修帰朝報告

2019/2/2-2/16の2週間、ボストンにあるMassachusetts General Hospitalの移植外科で研修を行わせて頂きました。実際に脳死肝移植のprocurementに同行し手術に参加させてもらうなど、日本と米国の移植医療の違いを肌で感じられたことは非常に良い経験となりました。

海外短期留学に関して、武冨教授を初め、施設間の調整にご尽力頂きました川村典生先生、その他教室員の先生方、お忙しい所現地でご指導して下さった河合達郎先生、木村鐘康先生、その他関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

（文責：高橋　直規）

4/1 年度始めの会を行いました

2019年4月1日朝、医局カンファレンスルームにて年度始めの会を行いました。

本多医局長司会の元、今年度より加わった新入局員6名を始め、大学病棟に戻って来られた先生7名、今年度よりリサーチを行う先生5名、実験助手の濱さんより今後の意気込みを語って頂きました。新入局員の6人には不安の表情がありましたが、消化器外科Ⅰの一員として熱い思いを語られていました。

最後に武冨教授から社会人として礼節を持った振る舞いをすることの大切さをお話されました。

平成の時代が終わりますが、先輩達の熱い思いを忘れず、消化器外科Ⅰメンバー一丸となって診療・研究・教育に携わっていきたいと思います。

（文責：金沢　亮）

4/8 高橋弘昌先生が釧路労災病院の院長に就任いたしました

独立行政法人　労働者健康安全機構　釧路労災病院
高橋弘昌

楡刀会々員の皆様、こんにちは。

平成31年4月1日、野々村克也前院長の後任として、当院の第8代院長に就任致しました。私は昭和54年北海道大学を卒業し、直ちに第一外科に入局し、大学病院、関連病院等で研修しました。今年5月1日より元号が令和となりますが、フランス留学期間中に昭和天皇が崩御し、帰国した時には平成になっていたことを印象深く思い出します。

平成元年10月より平成24年3月末まで大学にて文部教官として23年3ヶ月の長きにわたり、教育・研究・臨床そして社会活動の領域で多種多様な任務を与えていただき、充実した日々を過ごすことができました。最終的には、小児外科准教授、第一外科診療教授などに任務を与えられ、臨床では、乳腺・内分泌外科を専門として乳癌の外科、薬物治療、甲状腺・副甲状腺疾患の外科治療に専心しておりました。大学退官後は、JA札幌厚生病院外科に勤務し、平成30年10月より当院副院長として赴任しておりました。

第一外科入局以来、大学退官まで各地の関連病院に勤務、出張をしてきましたが、道東地域は、標茶町、中標津町、厚岸町、羅臼町などの町立病院出張の経験はありますが、釧路労災病院は初めての勤務先です。札幌で生まれ育った私であり、気候の違いや単身赴任など不安要因は少なくありませんでしたが、武富紹信教授をはじめ、当院に勤務経験ある第一外科の諸先輩、後輩から多くの激励の言葉をいただき、院長就任を決心致しました。正直、その責任の重大さに、私にそのような大任が務まるのか不安を感じておりますが、今後も皆さんのお力添えをいただきながら、当院の発展のために頑張ってまいります。

当院は、初代院長　新田一雄先生のもとで昭和35年1月22日に内科、神経科、外科、整形外科、皮膚泌尿器科、眼科、理学療法科の７診療科、病床数252床で診療を開始しましたが、交通網の整備、拡充とともに道東地区の開発は急速に進行し、釧路市の発展とともに、医療に対する地域のニーズは急速に加速しました。これに伴い。３回の増改築を重ね、平成29年４月には450床、21診療科となっています。当院が存在する根釧地区の人口は約32万人と全道540万人の6%程度ですが、面積では1.4万㎢と全道の17.4%を占めています。一方で、釧路２次医療圏の対人口10万人に対する医師数は170.0人（根室2次医療圏は104.0人）であり、これは全道平均230.0人と比較して医師不足が深刻な地域といえます。したがってこの広大な地域を少ない医師数でカバーせざるを得ない状況となっています。また、釧路圏域の推計人口では、少子高齢化の影響により、総人口は減少するものの高齢者の割合は横ばいに推移し、がん患者はさらに増加すると想定されています。

平成31年2月地域医療支援病院として従来進んでいる地域の病院、医院の先生方との連携を一層密にし、医療連携を強化するため地域包括ケア病棟50床を開設しました。そして今後とも地域の中核病院としての役割を果たすために更なる病院機能の充実を図り、これからも地域に愛され、必要とされる病院となるべく努力を続ける所存ですので、引き続き楡刀会々員の皆様のご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

4/9 実験助手 三好さん、病棟クラーク 村田さんが退職されました

3月31日付けでこれまで消化器外科Ⅰのtissue bank業務を中心に研究をサポートしてくれた三好早香さん、および病棟クラークとして日常診療業務を陰から支えてくれた村田 香さんが退職されました。お二人とも我々消化器外科Ⅰにとってなくてはならない存在であり、今後どの様に対処していけるか悩ましい所ですが、これからもお元気で更なるご活躍を祈念しております。これまでに本当に有難うございました。（文責：本多　昌平）

4/19 平成31年度同門親睦会が開催されました

第119回日本外科学会定期学術集会開催に併せて、4月19日に大阪で同門会が開かれました。

本集会では大学から34演題、関連施設からの演題を合わせて当教室からは計50演題の発表となり、当科や関連病院における臨床・研究の成果を報告することができました。また石川隆壽先生の研究奨励賞表彰、柴田賢吾先生のYoung Investigator's Award受賞といった朗報もありました。

同門会においては関連病院や国内留学施設からも同門の先生方に多数ご出席いただき、盛大な宴席となりました。高橋弘昌先生の乾杯のご挨拶や武冨教授からも当教室での外科学会開催に対しての熱意を語っていただき、第一外科時代からの外科学会に対する悲願を感じました。将来的に当教室で外科学会を開催できるようこれからも教室員一同で力を合わせていきたいと思います。またお酒を交えながら、それぞれの先生方からの近況報告や、旧知の先生方との交流もあり非常に楽しい時間を過ごすことができました。

ご出席いただいた先生方に於きましては、この場にてお礼申し上げます。（文責：志智　俊介）

4/22 リサーチ歓迎会を開催いたしました

平成31年4月22日、4月より新たに加わったリサーチャーの先生達と助手さんを対象に歓迎会を開催しました。

残念ながら病棟とリサーチ兼任の奥村先生は参加できませんでしたが総勢26名が参加し、実験に携わるもの同士で交流を深めることができ、大変有意義な会になりました。また新たなメンバーで雰囲気もガラッと変わりますがリサーチ一丸となって頑張りたいと思います。

（文責：谷　道夫）

4/24 7-2病棟歓迎会を開催いたしました

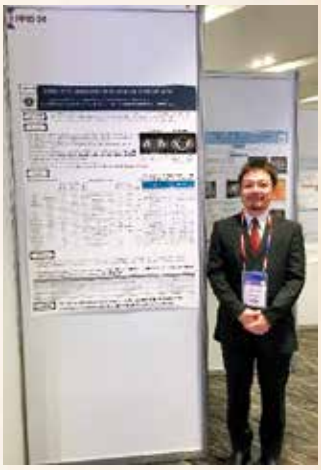
4月24日、7-2病棟、消化器外科I歓迎会を開催いたしました。

今年度は新人Dr 5名、Senior Dr 8名、大学院研究4名、看護師10名、病棟クラーク1名の合計28名を迎えての歓迎会となりました。皆様から新しい職場での決意表明をご挨拶頂き、大変盛大な会となりました。新しいメンバーと実りある一年を送れるように、日々精進したいと思います。

（文責：沢田　尭史）

5/7 市川伸樹特任助教がKSELS2019にてthe Best Poster Presentation Awardを受賞しました

市川伸樹先生、市村健太郎先生、南波宏征先生、鈴木琢士先生とともに4月25日から27日に韓国ソウルで行われた44th Congress of The Korean Society of Endoscopic and Laparoscopic Surgeons and 9th International Symposiumに参加して参りました。世界30カ国から多くの参加者が集う国際学会で、腹腔鏡手術における万国共通の熱意を感じる事ができました。中でも、市川伸樹先生が約200 poster演題の中からthe Best Poster Presentation Awardに選出されました。当科医師がこのような賞を獲得し、大変誇らしく感じると共に、今後の臨床/研究活動のモチベーションを高める事ができました。最後にこのような機会を与えて下さった武冨教授とチーム/病棟メンバーにこの場を借りて御礼申し上げます。　（文責：今泉　健）



5/7 柴田賢吾院生が第119回日本外科学会でYoung Investigator Awardを受賞！

柴田賢吾院生（平成22年卒）が大阪で開催された第119回日本外科学会定期学術集会でYoung Investigator Awardを受賞しました。

数多くの発表の中から優秀演題として選ばれました。これからの益々の活躍を期待しております。

5/7 石川隆壽医師が第26回日本外科学会研究奨励賞を受賞！

石川隆壽医師(釧路労災病院、H19卒)がこの度第26回（平成31年度）日本外科学会研究奨励賞を受賞し、大阪で開催された第119回日本外科学会定期学術集会で表彰されました。

この日本外科学会研究奨励賞は日本外科学会英文誌Surgery Todayに掲載された論文を対象に、数多くの研究業績の中から選考されるものです。

おめでとうございます。これからの益々の活躍を祈念しております。

5/17 Surgical oncology meeting 2019が開催されました

2019年5月17日にニューオータニイン札幌にて、Surgical oncology meeting 2019 - HCC treatment -が開催されました。

特別講演Ⅰでは、北海道大学病院 消化器内科 助教 小川 浩司先生を座長に、金沢大学先進予防医学研究センター 准教授 山下 竜也先生より「肝癌薬物療法の進歩～新たなMulti-Drugs時代の治療戦略～」の演題で御講演頂きました。肝癌の臨床に分子標的薬が続々と登場するなか、どのような薬物療法の選択肢があるかということを実際の臨床研究データを振り返りつつわかりやすく解説して頂きました。

特別講演Ⅱでは、当科の武冨紹信教授を座長に、大阪市立大学大学院 肝胆膵外科学 教授 久保 正二先生より、「職業性胆管癌の病態と治療」の演題で御講演頂きました。一つの症例から始まり臨床研究に至るまでの久保先生の取り組みを軸に、職業性胆管癌の基礎から臨床までを詳しくレクチャーして頂きました。

最後に、お忙しい中勉強会に参加していただきました先生方に感謝するとともに、このような会を企画・運営してくださりました関係者の皆様に熱く御礼申し上げます。

（文責：深澤　拓夢）

5/18 第6回北海道手術手技研究会が開催されました

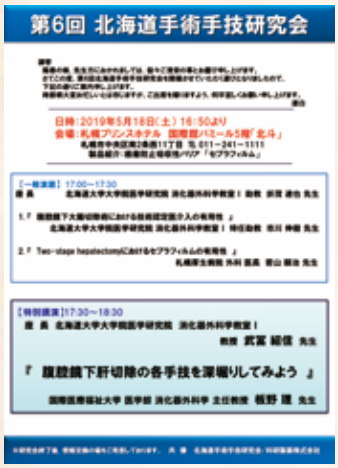
2019年5月18日に札幌プリンスホテルにて、第6回　北海道手術手技研究会が開催されました。

まず一般演題として、当科助教 折茂 達也先生の座長のもと、当科特任助教 市川 伸樹先生より「腹腔鏡下大腸切除術に おける技術認定医介入の 有用性」と題し御講演頂きました。

引き続き一般演題として、札幌厚生病院 外科医長 若山 顕治先生より、「Two-stage hepatectomy におけるセプラフィルムの有用性」と題し御講演頂きました。

特別講演には、当科教授 武富 紹信先生の座長のもと、国際医療福祉大学 医学部 消化器外科学主任教授 板野 理先生をお招きし、「腹腔鏡下肝切除の各手技を深掘りしてみよう」と題し、御講演頂きました。腹腔鏡下肝切除の各手技の重要なポイントにつき、各手術機材の特性も踏まえながら御講演頂きました。

最後に、お忙しい中勉強会に参加していただきました先生方に感謝するとともに、このような会を企画・運営して下さりました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。　(文責：浜田　和也)



5/23-25 第56回日本小児外科学会学術集会に6年生が参加しました

2019年5月23日～25日、福岡県久留米シティプラザにおいて第56回日本小児外科学会学術集会が開催され、当科にて実習中の6年生2名が本会に参加いたしました。

以下、学生より感想文です。

医学部６年　藤本　沙優さん

この度、久留米で行われた日本小児外科学会に参加する機会をいただきました。

全国の小児外科医が一堂に会し、それぞれのテーマについてより良い治療を考えていく場では、学生の私にもその熱気が伝わってきました。

小児外科の中にも勿論細分化された分野があり、成人とは違った検討をそれぞれする必要があるということ、また虐待など小児ならではの検討事項があるということを身をもって学び、どうやったら彼ら(小児患者)の無限大の可能性を引き出せるか、その奥深さに改めて魅了された3日間でした。

また、学会の後に行われた卒後臨床セミナーにも参加させていただくことができ、小児の主要疾患について一つ一つ臨床医の視点から学びなおす機会がありました。本来後期研修医以降の先生が受けられるセミナーのようですが、学生でもわかりやすく、また例えば疾患のメカニズムなど普段の講義よりも深く深く学ぶことができ、学生のうちにこのセミナーに参加できたことはとても幸運に感じました。

学会で得られた学び、経験を今後にしっかりと生かしていけるよう、今後より一層精進してまいる所存です。今回このような機会を与えてくださった先生方、皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

医学部６年　坂村　颯真さん

久留米市にて開催された第56回日本小児外科学会学術集会に参加させていただきました。小児外科は、以前から興味のある科でしたので学生の間にこのような機会をいただき、大変嬉しく、また貴重な経験となりました。

会期中は、異物誤飲による腸閉塞の症例発表や、4月に天使病院の外科で実習させていただいた際に何例も見学させていただいたLPECのビデオセッションなど、これまでの実習や授業で経験したことのない印象的な症例や講演がいくつもあり、日程表と会場マップを見比べながら会場内を忙しなく行き来していました。その中でも特に、私自身が幼少期に腸疾患で小児外科にかかっていた経験があり、その疾患に関するポスターや演題はほぼ逃さず聞きに行きました。

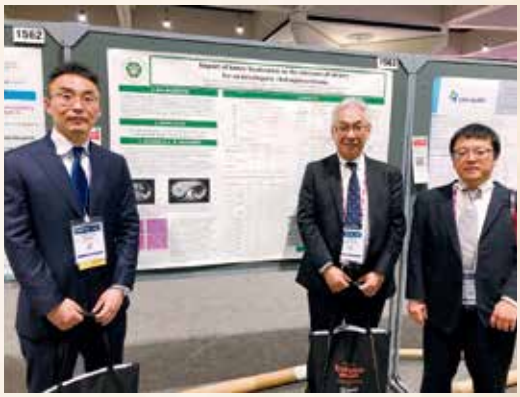
また北海道内の小児外科の先生、武冨教授が集まる懇親会にも招待していただき、4日間とても濃密な、そして充実した時間を過ごすことが出来ました。このような機会をくださったＩ外の皆様、本当にありがとうございました。

5/24 DDW2019帰朝報告

2019年5月18日～21日にかけて、DDW（Digestive Disease Week）2019が米国サンディエゴで開催されました。DDWは複数の消化器関連学会が同一期間に開催される消化器関連では世界最大規模の学会です。

当科からは折茂達也と神山俊哉先生、嶋村剛先生が参加し、また米国に留学している柿坂達彦先生も参加されました。私はImpact of tumor localization on the outcomes of surgery for an intrahepatic cholangiocarcinomaという演題名で肝内胆管癌の腫瘍局在の意義についてポスター発表を行いました。柿坂先生はA novel gene expression signature for predicting earlier recurrence in early-stage hepatocellular carcinoma patients undergoing surgical resectionという演題名で肝細胞癌の網羅的な遺伝子解析について口演発表を行いました。日本を含め世界中から多数の参加者が広大な会場に集結しており、内科的な話題が中心でしたが、外科系でもbig nameが講演を行っており、よい刺激を受けることができました。

最後になりましたがこのような機会を与えていただき感謝申し上げます。　（文責：折茂　達也）



6/1 同門会新人歓迎会が開催されました

令和元年6月1日（土）ニューオータニイン札幌にて、北海道大学第一外科同門会「楡刀会」総会、ならびに新入会員歓迎会が開催されました。

総会では楡刀会会長を長年務められました中島保明先生が辞任され、新たに高橋昌宏先生が就任されることが全会一致で承認されました。

今年は6名の新入会員を迎えることができました。例年安定して新入会員を迎えることができますのも、ひとえに諸先生のご支援あってのことと深く感謝しております。

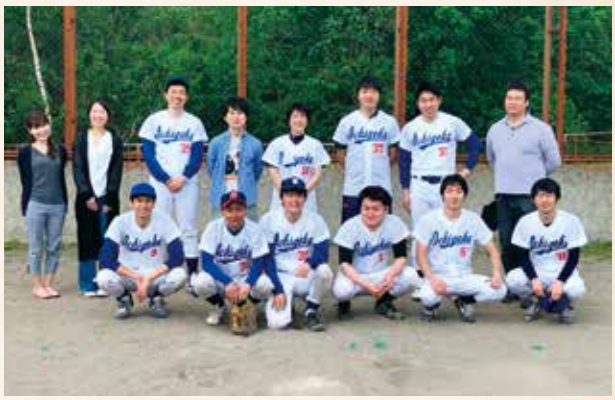
今年の総会・歓迎会も、新入会員を含め、かつて共に仕事をされた先生が、さながら同窓会といった様子で、各テーブルで大いに話に花を咲かせており、大盛況に終わりました。

ご出席頂きました諸先生に、厚く御礼申し上げるとともに、今後とも新入会員へのご指導・ご鞭撻頂きますよう重ねてお願い申し上げます。

（文責：近藤　享史）

6/2 平成31年度医局対抗野球が開催されました

2019年6月2日、晴天の中、大谷地流通団地東側緑地野球場にて内科Ⅱと医局対抗野球大会が行われました。随所に良いプレーも出ましたが、相手ピッチャーから点を奪うことが出来ず、0-15と敗退となってしまいました。しかし、函館から大渕先生、白川先生に参加いただいたり、JCHO北辰病院院長の高橋先生にノックをして頂くなど、皆様の協力で楽しく試合を終えることができました。この場を借りて感謝申し上げます。　（文責：消化器外科Ⅰ　杉山　昂）



6/11 第23回モーニングセミナーを開催いたしました

令和元年6月11日に第23回モーニングセミナーを開催しました。

今回は北海道大学大学院先端生命科学研究院 理学部・生物科学科（高分子機能学）蛋白質科学研究室 教授 相沢智康先生をお招きし、「生体分子のNMR解析 ー蛋白質立体構造解析・メタボローム解析への展開ー」というテーマでご講演いただきました。

体液や臓器、排泄物などの生物試料に対する新しい解析方法を、具体的な研究結果とともに、分かりやすくお話ししていただきました。より簡便で、再現性の高いメタボローム解析が可能といった点で、当科の研究にも広く応用できる可能性を秘めており、大変興味深く拝聴させていただきました。

ご講演終了後は活発な質疑応答が行われ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。 (文責：藤居　勇貴)

6/21 出張医局説明会を函館で行いました。

2019年6月20日に市立函館病院研修医2年目の先生方と、外科の魅力について様々な話をしてきました。

教室から長津・本多の2名が訪れ、市立函館病院外科の中西先生、植木先生、大渕先生、田仲先生、白川先生にも参加いただき、賑やかで大変楽しい時間を過ごすことができました。

参加された研修医の先生方には、将来一緒に北海道の外科医療を盛り上げていけることを心より期待しております。 （文責：本多　昌平）

6/22-23 医局旅行を開催いたしました

去る6月22-23日に第6回7-2病棟・医局旅行が開催されました。

今回は登別温泉への旅行でしたが、あいにくの雨模様で、予定していたクマ牧場や地獄谷への訪問はできませんでした。しかし、館内の温泉やプールでリラックスした時間を過ごし、普段の疲れを癒すことができました。また、夜の宴会にはJCHO登別病院の院長である伊藤美夫先生にもゲストとして参加していただき、非常に盛り上がり楽しい会となりました。二次会での新入局員・新人看護師さん達の余興も、その場にいたすべての人の心をつかむような素晴らしいものでした。

今回の旅行も、大きな問題なく有意義なものとすることができました。しかし、参加者が30名と例年と比較して少人数であり、皆様に参加していただけるような魅力のある旅行にできなかったという幹事としての力量不足を痛感し、今後も精進しなくてはならないと再認識いたしました。

最後に、今回の旅行を素晴らしいものにしていただいた皆様のご協力に感謝申し上げます。　（文責：大平　将史）

7/1 6年生選択実習慰労会を行いました

7月1日に6年生選択科臨床実習慰労会が開催されました。消化器外科学教室Ⅰで実習を行った6年生が参加して下さいました。すすきのでとろけるようなおいしい焼肉とアルコールを皆で堪能し、研修先の病院・国家試験に向けた勉強法や留学・今後どのような道に進みたいかなど、様々な話題で盛り上がりました。

参加して下さった６年生の皆さまに、感謝申し上げます。

(文責：宮岡　陽一)

7/1 関根先生の懇親会を行いました

2019年6月27日　宇治徳洲会病院より見学に来てくれた関根先生を囲んでささやかながら懇親会を行いました。異なる環境での研修話におおいに盛り上がり楽しい時間を過ごせました。

お互いこれからも情報を共有しながら頑張って行きたいと思います。

（文責：本多　昌平）

7/5 医局説明会を開催いたしました

令和元年7月5日18時より消化器外科Ⅰ医局にて医局説明会が開催されました。

道内各地の研修医・医学生を合わせて45名程度が参加され、大規模な説明会となりました。本多昌平医局長より消化器外科Ⅰの沿革の他、研修プログラム、診療体制などが説明されました。

説明会が終了後、狸小路に場所を移し懇親会が開かれました。参加頂いた研修医・医学生の他、消化器外科Ⅰのスタッフ合わせて88人と大規模な会となり大変盛り上がりました。また、二次会も53人と多数の方に参加して頂きました。天使病院で研修中の別所先生、砂川市立病院で研修中の鈴木先生が消化器外科Ⅰに入局を決めて頂き、武冨教授と熱い握手を交わされました。

当日ご参加頂いた研修医・医学生の皆様に感謝申し上げます。また、医局説明会に関わられた関連病院の諸先生方の他、大学スタッフの皆様、準備にご協力頂いた秘書の方々に心から感謝申し上げます。

（文責：金沢　亮）

7/6 北海道肝胆膵内視鏡外科セミナーが開催されました

令和元年7月6日にセンチュリーロイヤルホテル3F「エレガンス」にて第6回北海道肝胆膵内視鏡外科セミナーを開催しました。

今回は一般演題として当科 蒲池 浩文 先生座長のもと札幌厚生病院の外科 田原宗徳先生をお招きし「腹腔鏡下尾側膵切除、問題点の整理」、特別演題として当科 教授 武冨 紹信 先生座長のもと東京医科大学 消化器外科Ⅰ・小児外科学分野 准教授 永川 裕一 先生をお招きし、「膵臓外科における新たな術式に向けて」と題しご講演いただきました。腹腔鏡下膵手術における解剖、手術操作、手術の流れまで実際の手術ビデオを交えながら大変わかりやすく、またチーム内での教育方法まで具体的にご講演頂き非常に興味深く拝聴させていただきました。

ご講演終了後は手術手技における細かい部分まで大変活発な質疑応答が行われ、その後は懇親会の場が設けられ有意義な時間を過ごすことができました。

数多くの方々が今回のセミナーに参加して頂き、大変実りのある会となりました。最後に、ご多用の中ご講演頂きました先生方並びにご参加頂きました方々、企画・運営して頂いた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

（文責：山本　啓一朗）

7/10 縫合結紮講習会を開催いたしました

令和元年7月10日に「消化器外科I縫合結紮講習会」を開催しました。

初期研修医、医学部生約20名が参加し、外科基本手技である縫合、結紮について教室員の先生方から熱のこもった指導を受けられていました。最初はたどたどしかった手技も、講習会の終わりには上手になっており、学生の皆さんの習得の早さに驚かされました。

講習会の後は、場所を盤渓に移し、BBQの懇親会となりました。総勢50名以上の参加者で、非常に盛り上がり、盛会のうちに終了しました。ご参加頂いた皆様に感謝申し上げます。

（文責：山本　啓一朗）

7/12 第8回札幌VTRカンファレンスが開催されました

令和元年7月12日、メルキュールホテル札幌にて第8回札幌VTRカンファレンスが開催されました。

まず北里大学北里研究所病院病院長 渡邊昌彦先生より、「自我作古、再び」と題しまして、大腸癌治療の変遷につきご講演いただきました。

続いて、北海道がんセンター 前田好章先生、札幌厚生病院 小柳要先生、旭川厚生病院 佐野修平先生より、ご自身の腹腔鏡下S状結腸切除の動画をご供覧いただき、渡邊昌彦先生をはじめとした、技術認定をもつ先生方からの講評をいただきました。手術のポイントを要所で御指導頂き、我々若手医師も数多く学ぶことができました。非常に熱気溢れる会となりました。ご講演いただいた先生方、ご参加いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

（文責：浜田　和也）

7/18 日本消化器外科学会　懇親会を開催いたしました

令和元年7月18日、第74回日本消化器外科学会総会に併せまして同門会を東京品川にて開催しました。本総会におきまして、大学と関連施設からの多数の演題に加え、砂川市立病院で初期臨床研修中の先生より症例報告のご発表もありました。同門会には関連施設や国内留学中の同門の先生方と、関連施設の研修医の先生方にもご出席頂きました。学会を通じて、消化器外科の魅力を研修中の先生方にも体感してもらえたと思います。

ご出席いただいた先生方に於きましては、この場をお借りして感謝申し上げます。　（文責：太田　拓児）

7/20 第2回da Vinci勉強会～ロボット支援手術～が開催されました。

2019年7月20日にACU-A (アスティ 45) にて「第2回da Vinci勉強会～ロボット支援手術～」が開催されました。

まず、北海道大学病院本間重紀先生から「ロボット支援下直腸切除術：再導入時に注意したこと」という演題で、本年4月からロボット支援下直腸切除術を再開した際の注意点や工夫、症例の推移等についてのお話がありました。続いて旭川厚生病院柳田尚之先生から「ロボット支援下胃切除術 -導入初期4例のまとめ-」についてご発表があり、導入にあたり準備段階や手術手技等でご苦労をされた経験などを交えたお話を頂きました。北海道がんセンター前田好章先生からは「当院におけるda Vinci手術の現状」という演題で、da Vinci手術を継続して行っていく上でのご苦労等についてお話があり、最後に札幌北楡病院服部優宏先生から「札幌北楡病院でのロボット支援下直腸前方切除術の取り組み」という演題でda Vinci手術再開までにご苦労された点や術後フォローの問題点等についてお話を頂きました。

非常に興味深い講演ばかりで、ロボット支援手術を本格的にすすめていくにあたりモチベーションを上げる良いきっかけとなりました。

最後に、週末のお忙しい中ご参加頂きました先生方、企画・運営して頂いたインテュイティブサージカル合同会社の方々に厚く御礼を申し上げます。　（文責：松井 博紀）

8/2 第7回北海道消化器癌カンファレンスが開催されました

2019年8月2日に札幌グランドホテルにて「第７回北海道消化器癌カンファレンス」が開催されました。

まず、北海道医療センター外科医長　植村一仁先生より「右側結腸癌について考える」という演題で、右則結腸癌の疫学や特徴、注意すべき解剖や手術のポイントについて基本から説明していただきました。とてもわかりやすい内容でとても勉強になりました。

その後特別公演として熊本大学大学院消化器外科学分野教授　馬場秀夫先生から「AI時代の臨床と教育」と題してご講演いただきました。直腸癌の術前治療についてや、技術や時代が進歩しつつある中での良き医師としての在り方や、若手医師の教育について説明いただきました。自分自身若手の外科医として今後も頑張らないといけないと意識を高めることができました。

最後にお忙しい中ご講演・ご参加いただきました先生方、企画・運営いただいた大鵬薬品工業株式会社の方々に厚く御礼申し上げます。

（文責：浜田　卓巳）

8/19 医局BBQを行いました

令和元年8月19日　医学部図書館横で医局BBQを開催しました。

去年は胆振東部地震の影響で中止になり、今年も直前まで台風が上陸していたため開催が危ぶまれましたが、当日は快晴で絶好のBBQ日和となりました。

医学生の参加は夏休みのため少なかったですが、消化器外科Ｉの医局員や看護師だけでなく、秘書さんや実験助手の方々も加わり盛大な会となりました。

キンキンに冷えたビールや国産和牛に舌鼓を打ち、盛り上がりが欠けることなく夜遅くまで会は開かれました。

業務が忙しい中参加して頂いた病棟の先生方や看護師さん、秘書さん、実験助手の方々に感謝申し上げます。また、準備、片付けを手伝って頂いたリサーチの皆様や後期研修医の皆様にも感謝申し上げます。（文責：金沢　亮）

8/24 アニマル・ラボが開催されました

2019年8月23日、24日に神奈川県川崎市のメドトロニックイノベーションセンターにて本年度1回目となるアニマルラボが開催されました。

初期研修医として鈴木麗美先生、石川昂弥先生、伊藤栄祐先生、津坂翔一先生、大橋慶太先生、別所光先生、馬場周平先生、清水康弘先生がご参加され、後期研修医5名とともに、腹腔鏡下幽門側胃切除術に挑戦しました。講師として川村秀樹先生、前田好章先生、服部優宏先生、長津明久先生、柴田賢吾先生にご指導いただき、普段経験することの少ない手技を集中的に実践することができました。スコピスト、助手、術者の役割を交代しながらタスクに挑戦し、非常に有意義な時間となりました。

お忙しい中ご参加くださった先生方、このような貴重な機会を設けてくださった関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

初期研修医の先生方には消化器外科に興味を持っていただいている方もいらっしゃいました。近い将来一緒に働ける日を楽しみにしております。

（文責：浜田　和也）

8/28 第２回HCC Preceptorshipが開催されました

当科教授武冨がChairmanを務めた2nd HCC Preceptorshipが2019.8.28に北大病院で開催されました。APPLE2019 in Sapporoに出席する東アジア（中国、台湾、インドネシア、タイなど）の医師約60名を対象に、本邦のHCC診療の実際について学んでもらう企画です（主催バイエル薬品）。午前中は北大病院から白土博樹先生（放射線治療科教授）、坂本直哉先生（消化器内科教授）、阿保大介先生（放射線治療科）、森川賢一先生（消化器内科）、川村典生先生（消化器外科Ⅰ）の各先生方に専門領域のHCC治療について講義をしていただき、その後各国から持ち寄られた治療困難HCC症例について議論しました。午後は陽子線治療センター、外来化学療法室、生体資料管理室の北大病院ツアーを行いました。東アジア各国の先生方に北大病院のHCC治療のレベルの高さを実感していただく良い機会になったと思います。

このような機会を与えていただきました北大病院々長の秋田弘俊先生、国際医療部のピーター・シェーン先生をはじめお世話になりました先生方および関係者の方々にこの場を借りまして厚く御礼申し上げます。

8/30 第24回消化器外科Ⅰモーニングセミナーを開催致しました。

8月30日(金)午前7時30分より、第24回消化器外科Ⅰモーニングセミナーが行われました。今回はアメリカのCleveland Clinicにて生体肝移植ならびに小児肝移植のDirectorを務めておられる橋元宏治先生をお招き致しました。

橋元先生は九州大学での研修ならびに大学院修了後USMLEに合格しCleveland Clinicに臨床留学、以降はCleveland Clinicの肝移植チームの中心として活躍しておられます。年間肝移植数150例を超えるHigh Volume Centerでの経験から、脳死ならびに生体肝移植のコツ・工夫につき実践的なレクチャーをして頂きました。最後には中堅・研修医への熱いエールもあり、実り多い会となりました。

Cleveland Clinic 橋元宏治先生とは当科教授武冨紹信と九州大学での同門であったこと、当科特任助教川村典生がCleveland Clinic留学中にお世話になったことでご縁ができ、以降は当科若手をCleveland Clinicに受け入れて頂き、アメリカの臨床・肝移植見学をする機会を与えて頂いております。この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

（文責：川村　典生）

9/13 ネパール医師、シンガポール南洋理工大学の医学生が訪問されました

9月2日から2週間、ネパールからSunil Maharjan医師、シンガポール南洋理工大学のLu Jundeさんが訪問されました。

多くの手術に参加し、たくさんの日本文化にも触れることもでき、とても有意義な2週間でした、とのことでした。またチャンスがあれば訪問してください。

(文責：渡辺　正明)

9/14 第7回北海道サージカルアカデミーが開催されました

2019年９月14日にセンチュリーロイヤルホテルにて「第７回北海道サージカルアカデミー」が開催されました。

まず、北海道大学病院　吉田雅先生より「直腸癌手術における縫合不全予防の為の取り組み」という演題でご講演していただきました。腸管血流、テンションの軽減、経肛門ドレーン、Covering Stomaという項目を中心に詳しく説明いただきました。外科医にとって縫合不全をなくすことは大きな課題であり、そのために必要な考え方を学ぶことができました。

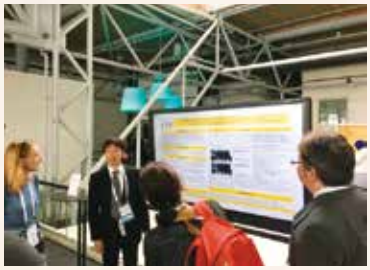
その後､特別公演として東北大学消化器外科学特命教授　内藤剛先生から「腹腔鏡下大腸癌手術におけるOncological Strategy」という演題でご講演いただきました。癌手術という特性に主眼をおいた再発させない腹腔鏡手術について左手の使い方や場面ごとの定型化といった手術操作のポイント等について説明いただきました。手術のクオリティーも大事であるという内容の話もあり、やはり外科医自身の技術が患者の予後に直接つながるのだという認識を新たにしました。

最後にお忙しい中ご講演・ご参加いただきました先生方、企画・運営いただいたジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社の方々に厚く御礼申し上げます。

（文責：浜田　卓巳）

9/15 -18 ESOT2019帰朝報告

2019年9月15日～ 18日にかけて、European Society for Organ Tranplantation（ESOT）2019がデンマークコペンハーゲンで開催されました。ESOTはヨーロッパで開催される臓器移植関連の学会で最も大きい学会の一つです。



当科からは柴田賢吾と巖築慶一先生、後藤了先生、深井原先生が参加しました。私はElucidation of lysophospholipids on hepatic ischemia and repercussion injury-comprehensive analysis by imaging mass spectrometryという演題名で温虚血再灌流障害の脂質変化について発表を行いました。巖築先生はThe functional alloreactivity in vivo of graft infiltrating lymphocytes in early phase post transplantation in mice.という演題名でGILsがグラフト拒絶、寛容に与える影響について発表を行いました。ヨーロッパではここ数年でDCDドナーに対してMachine Perfusionを行うことが当たり前となっており、その発表が多く見られました。わが国ではMachine Perfusionはまだ一般的ではないため、プロジェクトを立ち上げ、積極的に行っていこうと思いました。

最後になりましたがこのような機会を与えていただき感謝申し上げます。　（文責：柴田　賢吾）

9/18 ラグビー W杯2019前祝いを行いました

2019年は、念願のラグビー W杯が日本で開催されました。日本代表チームの活躍は目覚ましく、ラグビーの面白さ、素晴らしさが日本列島を駆け抜けましたことは記憶に新しいことと思います。全国に「にわかファン」が大発生するほんの少し前、開幕を2日後に控えた9月18日、我らがフルバック武冨教授をはじめ、総勢16名のラグビーを愛する者、愛そうとする者が集い、W杯開催の前祝いを行いました。この夜は、まさかあんなにW杯が盛り上がるとは夢にも思っておりませんでしたが、あれよあれよと勝ち進むジャパンの活躍、強豪国の連日の白熱した試合に仕事も忘れ観戦に没頭する素晴らしい2ヶ月を過ごせました。消化器外科もOne Teamとなって今後も診療、研究、教育に突き進んでいきましょう！

9/21-22 第3回北海道外科関連学会機構合同学術集会（HOPES 2019）が開催されました

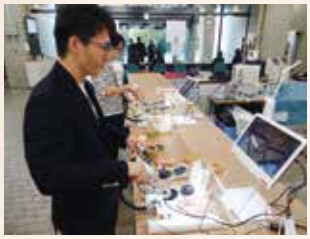
2019年9月21日・22日に、北海道大学学術交流会館にて第3回北海道外科関連学会機構合同学術集会（HOPES 2019）が開催されました。先にご報告させていただきました通り、今回は臨床外科学会北海道支部例会との合同開催でした。

HOPESのプログラムとして初期・後期研修医対象のハンズオンセミナーがあり、手縫いによる腸管吻合や鏡視下の縫合結紮コンテストなどが開催されました。縫合結紮コンテストでは当科の浜田卓巳先生が第2位を獲得しました。

また、当科 武冨紹信教授座長のもと、独立行政法人 日本学術振興会理事長 里見進先生をお招きして、東日本大震災における東北大学病院の対応と題して特別講演を行っていただきました。実際に当時の東北大学病院での様子や、震災後の対応などにつき克明に語っていただきましたが、中でも当時地震の真っ只中に記録された手術室の映像は、大変衝撃的でした。被災地で活動する中で、人員や物資の配置など今後の課題も多数挙げられたとのことでした。今回の里見先生のお話を伺うまで我々が知りえなかった現実も多く、今後より広く共有していく必要があると考えられました。

この度HOPES 2019ならびに第116回日本臨床外科学会北海道支部例会の運営に携わっていただいた関係の方々、ご講演いただいた先生方に、厚く御礼申し上げます。

（文責：石塚　千紘）



9/27 旭火華 医員が2019年度北海道外科雑誌 学会賞を受賞！

当科医員の旭火華先生が2019年度の北海道外科雑誌 学会賞を受賞しました。誠におめでとうございます。

この賞は北海道外科雑誌に掲載された原著論文の中から特に優れた論文に対し授与されるものです。

受賞論文は「血液透析患者の腹部緊急手術の検討」であり、日鋼記念病院において経験した血液透析患者対する腹部緊急手術19例の予後についてまとめた論文です。

今後の旭先生の益々の活躍を期待しております。

表彰状

旭 火華 殿

渡辺 敦

9/28 北海道移植免疫研究会

2019年9月28日、北海道移植免疫研究会を開催いたしました。

「免疫微小環免疫微小環境に着目した移植免疫応答の解析とその応用」と題しまして、獨協医科大学解剖学マクロ講座准教授 上田祐司先生、ならびに、「細胞老化―クリアランスーリモデリング連鎖に基づく新たな再生医療の可能性」と題しまして、北海道大学大学院保健学研究院准教授 千見寺貴子先生にご講演があり、各分野の最先端の知見をご紹介いただきました。

一般演題として6演題として、肝臓移植、腎臓移植、骨髄移植の各分野から、臨床ならびに基礎研究の発表があり、活発な質疑応答が行われますとともに、今後の共同研究の可能性についても議論されました。

北海道における移植医療に関わる皆さんが多くの情報を共有し、今後も北海道から新しい知見、新しい治療法を発信できるように会を発展させていこうと思います。

（文責：渡辺　正明）

10/4 CAST2019帰朝報告

2019年9月29日～ 10月2日にかけて、16th Congress of The Asian Society of Transplantation（CAST）2019がインド ニューデリーで開催されました。CASTはアジアで開催される臓器移植関連の学会で最も大きい学会の一つです。

当科からは柴田賢吾と深井原先生が参加しました。

私はElucidation of lysophospholipids on hepatic ischemia and repercussion injury- comprehensive analysis by imaging mass spectrometryという演題名で温虚血再灌流障害の脂質変化についてESOTでの発表に加え、lysophospholipidが細胞にどのような影響を与えるかを発表しました。

近年アジアで急速な発展を遂げるインドは、その発表内容もアグレッシブに移植症例を増やしている内容が多く見られ、経済などと同様に移植分野でも急速な発展を遂げてます。将来的にはアジアをリードする可能性が感じられ。我々も身が引き締まる思いを感じました。デリーの街も人が多く活気が見られ、我々も非常に大きなエネルギー、モチベーションを得ることができました。

最後になりましたがこのような機会を与えていただき感謝申し上げます。（文責：柴田　賢吾）

10/5 ロシナンテス活動報告会が開催されました。

2019年10月5日に北海道大学 臨床大講堂にて「ロシナンテス活動報告会」が開催されました。

認定NPO法人ロシナンテスの理事長である川原尚行先生がご登壇され、川原先生がロシナンテスを設立された経緯やスーダンでの活動開始当初の苦労話、スーダンの現在の状況や今後の見通し、新たに始まったザンビアでの活動の最新情報など、非常に多くの興味深い話をしていただきました。

無医村に「医」を届ける活動にとどまらず、水道の整備、現地のスタッフや子供たちの教育など活動内容は多岐にわたり、エネルギー溢れる川原先生に驚愕させられました。また、治安の悪化に伴い日本人スタッフが活動できないスーダンで現地スタッフが自立して活動を行っているエピソードも紹介され、ロシナンテスの活動が確実に実を結んでいる状況に強く感銘を受けました。

今回の報告会を聴き、活動のフィールドは異なりますが自身のモチベーションを向上させる大変良いきっかけとなりました。

最後にお忙しい中、非常に興味深い話をしてくださいました川原尚行先生に厚く御礼申し上げます。（文責：松井　博紀）

10/8 5年生慰労会を開催いたしました

2019年10月8日、コア科実習として消化管グループで4週間実習を行っていた5年生 辻野君の慰労会が開催されました。初めての長期実習とのことで苦労することも多かったと思いますが、辻野君は非常に勉強熱心で、4週間経った頃にはすっかり消化管グループの一員として活躍してくれました。今後の活躍に期待します。

（文責：石塚　千紘）

10/18 第3回札幌外科漢方セミナーが開催されました

2019年10月18日、札幌グランドホテルにて第3回札幌外科漢方セミナーが開催されました。

はじめに、特別講演1として北海道医療センター　外科系診療部長　川村秀樹先生の座長のもと、札幌東徳洲会病院　先端外科センター　センター長　河野透先生から『今日のがん治療を支える漢方薬の基礎的エビデンス』をご講演いただきました。LC-MS/MSを駆使した成分分析から、生薬毎のin vitro, in vivoの圧倒的なデータをご紹介いただきました。これらの科学的データより漢方薬の内服の適切なタイミングなどご教授いただき大変勉強になりました。

続いて、特別講演2として当教室　武冨紹信教授の座長のもと、徳島大学大学院医歯薬学研究部　消化器・移植外科学　島田光生教授をお招きし『外科漢方のOrthodox ＆ Serendipity』と題してご講演を頂きました。徳島大学に赴任されてからの漢方研究の変遷、全国規模の大建中湯のRCTの結果などご紹介いただきました。また大建中湯の腸管蠕動以外の作用についてのデータもご提示して頂き、漢方薬の可能性を期待させる内容でした。日常診療で漢方を処方する機会は多いですが、その機序については理解しておらず、両講演を通して漢方に対する知識が深まる機会となりました。

外科領域における漢方のトップランナーのお二方が一堂にご講演されるとあって、週末のお忙しい時間にもかかわらず非常に多くの先生方にご参加頂き大変盛況な会となりました。その後の情報交換会においても多数の方に参加いただき大変有意義な時間となりました。

特別公演をして頂きました島田光生教授、河野透先生を始め、ご参加いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

（文責：加藤　紘一）

10/19 関連病院院長・医長会議を開催いたしました。

平成31年10月19日13時より関連病院院長・医長会議を開催いたしました。北海道各地から消化器外科I関連の病院長、医長の先生方総勢30名にご参集いただきました。

まず、教室の近況とアクティビティについてそれぞれの臨床グループ、研究部門より報告致しました。

続いて、関連病院の現状につき各施設よりご報告いただき、武冨教授に総括いただいて会を終了致しました。

これからも教室と同門で情報を共有し、一致団結して魅力ある北海道の外科を作り上げるよう努力して参ります。どうぞよろしく御願いします。　（文責：後藤　了一）

11/1 第7回North Japan Cancer Forumが開催されました

2019年11月1日、ホテルニューオータニイン札幌にて第7回North Japan Cancer Forumが開催されました。

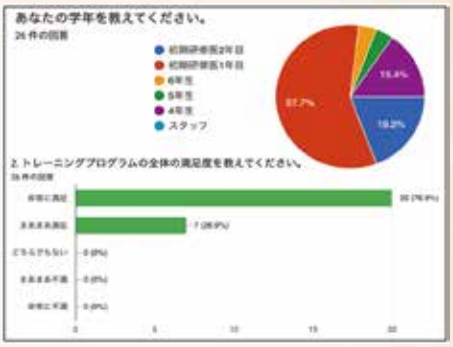
はじめに、一般講演として北海道大学病院　消化器外科教室I講師　本間重紀先生の座長のもと、札幌厚生病院外科部長　船越徹先生から『StageIV高度進行大腸癌に対する術前化学療法』について、また北海道医療センター　三野和宏先生から『当院における大腸癌術前治療の現状』についてご講演いただきました。近年本邦でも積極的に取り入れられている大腸癌に対する術前治療に関して治療成績等を詳しくご教授いただき大変勉強になりました。

続いて、特別講演として当教室　武冨紹信教授の座長のもと、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　消化器外科学　藤原俊義教授をお招きし『進化する胃がん診療の今と未来』と題してご講演を頂きました。岡山という地域についてから始まり、その後は胃癌に対する低侵襲手術、また噴門部胃癌に対する手術方法として「観音開きによる上川法」をビデオと共にご教授頂きました。その他、胃癌術後の逆流性食道炎に対する臨床研究、胃癌術後の化学療法から最近の研究としてテロメラーゼに関してまで大変濃い内容をご教授頂きました。

週末のお忙しい時間にもかかわらず非常に多くの先生方にご参加頂き大変盛況な会となりました。その後の情報交換会においても多数の方に参加いただき大変有意義な時間となりました。

特別公演をして頂きました藤原俊義教授を始め、ご参加いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。　（文責：山本　啓一朗）

11/2 wet-laboが開催されました



2019年11月1日、札幌センタービルにて2019年度wet-laboが開催されました。今年は生体材料の調達が困難となり腸管モデルなどを用いた講習であったものの、関連病院・大学内より28名の初期研修医・学生が参加し、武冨教授・本多医局長を含めた大学スタッフ11名、関連病院より4名の講師陣が指導に当たりました。

ドライボックスによる鏡視下縫合結紮は、たどたどしい動きで運針もままならなかった参加者の皆さんたちが、見る見るうちにスムーズに縫合結紮を行えるようになり、若者の上達の速さを講師陣も実感しておりました。手縫いの腸管吻合では連続縫合によるAlbert-Lembert縫合を練習し、消化器外科手術の原点となる消化管吻合の難しさ、奥深さを体験していただけたと思います。夜の懇親会にも30名以上の参加があり、講習会後の親睦を深めることができました。

事後アンケートでは以下のような、前向きな感想を参加者の皆さんから頂きました。

・非常にいい機会をいただきありがとうございました。
・ラパロを初めて操作できていい経験になった。また積極的に参加したい。
・腸管吻合の練習をもっとしたいと思いました。ありがとうございました。
・医者になる前に実践の練習ができてよかった。
・外科手技の楽しさを覚えました。

この場を借りて、お忙しい中お力添えくださいました関連病院・大学関係者の皆様、資材や会場設定など多大なご協力をいただきました頂いたジョンソン・エンド・ジョンソンの皆様に深く感謝申し上げます。

（文責：奥村　一慶）

11/23 医局対抗サッカー大会が開催されました

令和元年11月23日、札幌サッカーアミューズメントパーク屋内競技場にて医局対抗サッカー大会が開催されました。

初戦の精神科に7-0で勝利しましたが、準決勝の整形外科に1-14で敗北しました。準決勝では、試合成立に厳しい人数での試合となり大敗となりました。ボディコンタクトの多い試合でしたが、ケガ人はなく、無事大会を終えることができました。

関連施設よりご参加いただきました阪田敏聖先生（KKR札幌医療センター）、原田拓弥先生（札幌厚生病院）、高橋直規先生（帯広協会病院）、板倉恒輝先生（砂川市立病院）、ありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。

（文責：太田　拓児）

11/27 坂本譲先生がJDDW若手奨励賞を受賞！

2019年11月21日から24日まで神戸コンベンションセンターで開催された第27回JDDW（日本消化器関連学会週間）にて、消化器外科Ⅰ医員 坂本譲先生が演題「マスサイトメトリーを用いたNAFLD患者における免疫病態の網羅的解析」において若手奨励賞を受賞されました。

この賞は優秀な若手研究者の支援を目的とし、主題演題・一般演題の中から選出されています。

研究の成果がかたちとなり、大変嬉しく思います。これからも新たな知見を得るべく、臨床や研究に邁進いたします。

12/7 北大第一外科同門会「楡刀会」講演会および教室・同門会合同忘年会が開催されました

2019年12月7日(土)夕方よりホテルニューオータニイン札幌で北海道大学消化器外科Ⅰ同門会の講演会、忘年会が開催されました。

講演会では現在稚内市立病院に勤務中の藤好真人先生より、オランダのフローニンゲン大学に留学した時の肝移植を中心とした臨床経験、および肝移植における機械灌流に対する研究内容などを報告頂きました。また、現在北海道大学病院の消化管グループに配属されている宮岡陽一先生より、南極地域観測隊として1年半南極で勤務した際の仕事の様子や生活内容を報告頂きました。どちらの先生の話も日本にいる間は考えることの出来ないスケールの大きな話で、大変興味深い内容でした。

講演会終了後引き続き忘年会が開催されました。今年度より同門会長がJCHO札幌北辰病院院長の高橋昌宏先生に引き継がれました。新会長の高橋先生に始まり、武冨教授からもご挨拶の言葉を頂きました。北海道各地の病院から多数の先生方が参加頂き、盛大な会となりました。同門の絆の強さを改めて認識した1日となりました。　（文責：金沢　亮）

12/8 市川特任助教が短期国内留学から帰札しました。

千葉県柏市にある国立がんセンター東病院大腸外科で、1ヶ月間の短期研修を行って参りました。

同施設は、特に下部直腸癌の症例が多く集まる国内有数のハイボリュームセンターで、ここで、経肛門的アプローチによる鏡視下直腸癌手術を主軸に、肛門温存手術と拡大手術を学んで参りました。このアプローチでは、通常の頭側からの手術（腹腔鏡手術やロボット手術）では困難な体型や部位の癌に対しても、スムーズに手術可能な場合があり、また尾側に受けを作る事で局所進行癌をより安全に切除でき得ます。難易度の高い手技の為、十分な修練が必要ではありますが、自分の引き出しが確実に広がったと感じながら帰って参りました。

御指導頂いた伊藤雅昭先生を始め大腸外科の皆様に深く感謝申し上げます。また、このような機会を与えて下さいました武冨教授、本間チーフ、消化管Gメンバー、消化器外科Ⅰメンバーおよび家族に感謝致します。　（文責：市川　伸樹）

伊藤雅昭先生と

12/18 7-2病棟忘年会を開催いたしました

2019年12月18日メルキュールホテル札幌にて、消化器外科Ⅰ病棟医、リサーチ、7-2病棟スタッフで7-2病棟忘年会を開催いたしました。武冨教授、長田師長より一言をいただき、神山先生より乾杯のご発声をいただきました。1次会では、企画していたゲームを皆さんが大いに盛り上げてくださり、さらには武冨教授からの少し早いサプライズお年玉も飛び出したため、一年の最後を締めくくるとても楽しい会となりました。

2次会では後期研修医と新人看護師による余興を披露していただきました。Ⅰ外として恥じない大変お上品な余興であり、いつもは黙々と実直に病棟業務を行う後期研修医達の外科医として秘めた魂を垣間見た気がしました。令和の時代も外科医の中身は変わらないことがわかり、これからの病棟も安泰だと実感できました。本当にお疲れ様でした。

昨年はインフルエンザの流行に伴い急遽中止となりましたが、今年は皆さまのご協力で無事行うことができました。我々消化器外科Ⅰは、今後もさらなる発展のため邁進して参りますので、これからもよろしくお願いいたします。

（文責：（幹事）坂本　譲）

12/27 仕事納めの会を開催いたしました

12月27日の勤務終了後、医局カンファレンスルームにて仕事納めの会が開催されました。日常診療、研究に携わる大学スタッフ、大学院生、実験助手、医局秘書約30名が参加しました。

1年間を締めくくるとともに、新年に向けた抱負を語り合う楽しい時間となりました。　（文責：太田　拓児）

2019年の年表・年間行事

〈学会・研究会主催〉

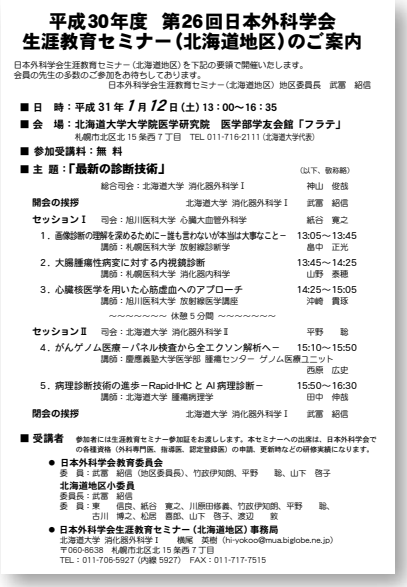
1/12 第26回日本外科学会生涯教育セミナー（北海道地区）

平成31年1月12日、「平成30年度　第26回日本外科学会生涯教育セミナー（北海道地区）」が北海道大学医学部学友会館フラテにて開催されました。「最新の診断技術」を主題として、第一線を行く先生方から5つの演題についてご講演いただきました。

セッションⅠでは旭川医科大学　心臓大血管外科学の紙谷寛之先生の司会の元、札幌医科大学　放射線診断学　畠中正光先生より「画像診断の理解を深めるために -誰も言わないが本当は大切なこと-」、札幌医科大学　消化器内科学の山野泰穂先生より「大腸腫瘍性病変に対する内視鏡診断」、旭川医科大学　放射線医学講座の沖崎貴琢先生より「心臓核医学を用いた信金虚血へのアプローチ」についてご講演いただきました。

セッションⅡでは当院　消化器外科学Ⅱの平野聡先生の司会の元、慶應義塾大学医学部 腫瘍センター ゲノム医療ユニットの西原広史先生より「がんゲノム医療 -パネル検査から全エクソン解析へ-」、当院 腫瘍病理学の田中伸哉先生より「病理診断技術の進歩 -Rapid-IHCとAI病理診断-」についてご講演いただきました。会場には各施設の先生方が多数出席されており、大変にぎわいました。最先端のお話だけではなく、画像診断の基本的な用語のお話や拡大内視鏡のお話、病理の遺伝子検索の仕組みや迅速免疫染色のお話等、我々若手医師にとっても身近な話題が多数あり、非常に有意義な会となりました。

最後に、お忙しい中、当セミナーにご参加くださいました先生方に感謝いたしますとともに、このような会を企画・運営してくださいました関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。　（文責：佐藤　彩）



平成30年度　第26回日本外科学会
生涯教育セミナー（北海道地区）のご案内

日本外科学会生涯教育セミナー（北海道地区）を下記の要領で開催いたします。
会員の先生の多数のご参加をお待ちしております。
日本外科学会生涯教育セミナー（北海道地区）地区委員長　武冨　紹信

■ 日　時：平成 31 年 1 月 12 日（土）13：00～16：35
■ 会　場：北海道大学大学院医学研究院　医学部学友会館「フラテ」
札幌市北区北 15 条西 7 丁目　TEL 011-716-2111（北海道大学代表）
■ 参加受講料：無 料
■ 主 題：「最新の診断技術」　（以下、敬称略）

総合司会：北海道大学 消化器外科学Ⅰ　神山　俊哉
開会の挨拶　北海道大学 消化器外科学Ⅰ　武冨　紹信
セッションⅠ　司会：旭川医科大学 心臓大血管外科学　紙谷　寛之
1．画像診断の理解を深めるために－誰も言わないが本当は大事なこと－　13:05～13:45
講師：札幌医科大学 放射線診断学　畠中　正光
2．大腸腫瘍性病変に対する内視鏡診断　13:45～14:25
講師：札幌医科大学 消化器内科学　山野　泰穂
3．心臓核医学を用いた心筋虚血へのアプローチ　14:25～15:05
講師：旭川医科大学 放射線医学講座　沖崎　貴琢
～～～～～～～ 休憩 5 分間 ～～～～～～～
セッションⅡ　司会：北海道大学 消化器外科学Ⅰ　平野　聡
4．がんゲノム医療－パネル検査から全エクソン解析へ－　15:10～15:50
講師：慶應義塾大学医学部 腫瘍センター ゲノム医療ユニット　西原　広史
5．病理診断技術の進歩－Rapid-IHC と AI 病理診断－　15:50～16:30
講師：北海道大学 腫瘍病理学　田中　伸哉
閉会の挨拶　北海道大学 消化器外科学Ⅰ　武冨　紹信

■ 受講者　参加者には生涯教育セミナー参加証をお渡しします。本セミナーへの出席は、日本外科学会での各種資格（外科専門医、指導医、認定登録医）の申請、更新時などの研修実績になります。
● 日本外科学会教育委員会
委　員：武冨　紹信（地区委員長）、竹政伊知朗、平野　聡、山下　啓子
北海道地区小委員
委員長：武冨　紹信
委　員：東　信良、紙谷　寛之、川原田修義、竹政伊知朗、平野　聡、古川　博之、松居　喜郎、山下　啓子、渡辺　敦
● 日本外科学会生涯教育セミナー（北海道地区）事務局
北海道大学 消化器外科学Ⅰ　横尾　英樹（hi-yokoo@mua.biglobe.ne.jp）
〒060-8638　札幌市北区北 15 条西 7 丁目
TEL：011-706-5927（内線 5927）FAX：011-717-7515

1/26-27 第33回札幌冬季がんセミナー

2019年1月26.27日にロイトン札幌にて、当科の武冨紹信教授を当番世話人として第33回札幌冬季がんセミナーが開催されました。

1月26日はSession1としてがん治療の最前線について各臓器別に、血液がん治療の最前線について北海道大学大学院医学研究院血液内科学教授　豊島 崇徳 先生、肺がん治療の最前線について近畿大学医学部呼吸器外科主任教授　光冨 徹哉 先生、尿路上皮癌に対する個別化医療の現状と将来展望について筑波大学医学医療系腎泌尿器外科学教授　西山 博之 先生、卵巣癌におけるBRCA1/2変異状況とPARP阻害薬の現況について慶應義塾大学医学部婦人科教授　青木 大輔 先生、膵がん治療の最前線について東北大学大学院医学研究科消化器外科学分野統括教授　海野 倫明 先生よりご講演頂きました。特別講演としては当科教授　武冨 紹信　先生座長のもと、九州大学名誉教授/公立学校共済組合　九州中央病院病院長　前原 喜彦 先生より「外科学の進化」についてご講演頂きました。外科学の進化の歴史や、様々な研究についてご説明頂き、とても貴重な時間となりました。

1月27日 はSession2としてがん診療を取り巻く新しい社会的取り込みについてご講演頂きました。連携が進むCardio-Oncologyについて順天堂大学大学院医学研究科臨床薬理学教授　佐瀬 一洋 先生、地域緩和ケアについて昭和大学保険医療学部がん看護専門看護師教育課程教授　梅田 恵 先生、クラウド時代における医療情報管理について一般財団法人医療情報システム開発センター理事長　山本 隆一 先生、特別講演として一般社団法人北海道医師会会長　長瀬 清先生座長のもと、弘前大学大学院医学研究科社会医学講座　特任教授　中路 重之 先生より「青森県の短命県返上活動とがん予防活動」についてご講演頂きました。

2日間に渡り、数多くの方々が今回のセミナーに参加して頂き、大変実りのある会となりました。最後に、ご多用の中ご講演頂きました先生方並びにご参加頂きました方々、企画・運営して頂いた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

（文責：南波 宏征）

6/8　第30回北海道肝がん研究会及び北海道消化器癌懇話会

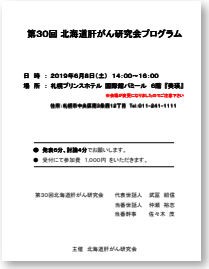
2019年6月8日　札幌プリンスホテル国際館パミールにて第30回北海道肝がん研究会および北海道消化器癌懇話会が開催されました。

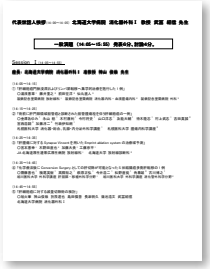
14時より肝がん研究会が開催され、各施設の内科・外科より計11題の発表がありました。当科からは旭　火華先生が「肝細胞癌に対する減量切除術の検討」と題して発表を行いました。それぞれの演題に対して、道内各地より集まった参加者より多くの質問が飛び交い、大いに盛り上がりました。

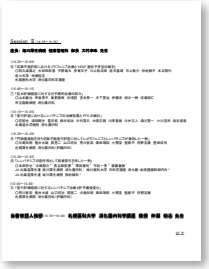
16時からは特別公演として、近畿大学医学部　消化器内科学　主任教授　工藤　正俊先生より『肝細胞癌診療の最近の進歩』のご講演をいただきました。BCLC-Bの中等度振興肝がんに対する治療戦略としての分子標的薬治療を行うタイミングなど、我々若手・外科医にとっては悩ましい外科治療以外の分野の最新の話題について、大変わかりやすく説明していただきました。

今回の研究会ならびに懇話会では、外科医以外にも、内科の先生方の視点にも触れることができ、とても貴重な機会となりました。お忙しい中ご講演・ご参加いただきました先生方に、厚く御礼申し上げます。

（文責　石塚千紘）







6/22 第11回北海道手術医学研究会

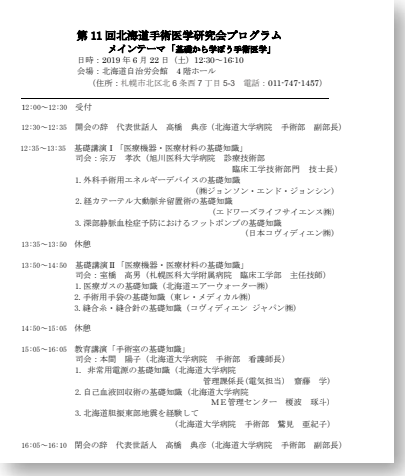
2019年6月22日（土）、北海道自治労会館にて、第11回北海道手術医学研究会が開催されました。本会は、主に手術室に勤務する道内の看護師・臨床工学士・医師など対象に、手術室で問題となっているテーマについて情報交換する研究会として毎年開催されています。

今回は、基礎講演として「医療機器・医療材料の基礎知識」をテーマに、各企業の方々に医療機器・材料などの基礎知識を紹介していただき、取り扱う際の注意点などをわかりやすく講演していただきました。また、教育講演としては、「手術室の基礎知識」と題して、北海道大学病院から管理課・ＭＥ機器管理センター・手術部ナースセンターの3部署からそれぞれ非常用電源・自己血輸血・胆振東部地震の経験について講演をしていただきました。

看護師・滅菌技師・臨床工学技士・医師など様々な分野の方々約220名にご参加いただき、活発な質疑応答が交わされました。

ご発表いただきました先生方、ご参加いただきました多くの方々に深く感謝申し上げます。

当番世話人：高橋　典彦（北海道大学病院　手術部　准教授）



第 11 回北海道手術医学研究会プログラム
メインテーマ「基礎から学ぼう手術医学」

日時：2019 年 6 月 22 日（土）12:30～16:10
会場：北海道自治労会館　4 階ホール
（住所：札幌市北区北 6 条西 7 丁目 5-3　電話：011-747-1457）

12:00～12:30　受付

12:30～12:35　開会の辞　代表世話人　高橋　典彦（北海道大学病院　手術部　副部長）

12:35～13:35　基礎講演Ⅰ「医療機器・医療材料の基礎知識」
司会：宗方　孝次（旭川医科大学病院　診療技術部
臨床工学技術部門　技士長）
1. 外科手術用エネルギーデバイスの基礎知識
（㈱ジョンソン・エンド・ジョンシン）
2. 経カテーテル大動脈弁留置術の基礎知識
（エドワーズライフサイエンス㈱）
3. 深部静脈血栓症予防におけるフットポンプの基礎知識
（日本コヴィディエン㈱）

13:35～13:50　休憩

13:50～14:50　基礎講演Ⅱ「医療機器・医療材料の基礎知識」
司会：宝猿　高男（札幌医科大学附属病院　臨床工学部　主任技師）
1. 医療ガスの基礎知識（北海道エアーウォーター㈱）
2. 手術用手袋の基礎知識（東レ・メディカル㈱）
3. 縫合糸・縫合針の基礎知識（コヴィディエン ジャパン㈱）

14:50～15:05　休憩

15:05～16:05　教育講演「手術室の基礎知識」
司会：本間　陽子（北海道大学病院　手術部　看護師長）
1. 非常用電源の基礎知識（北海道大学病院
管理課係長（電気担当）　齋藤　学）
2. 自己血液回収術の基礎知識（北海道大学病院
ＭＥ管理センター　榎波　琢斗）
3. 北海道胆振東部地震を経験して
（北海道大学病院　手術部　鷲見　亜紀子）

16:05～16:10　閉会の辞　代表世話人　高橋　典彦（北海道大学病院　手術部　副部長）

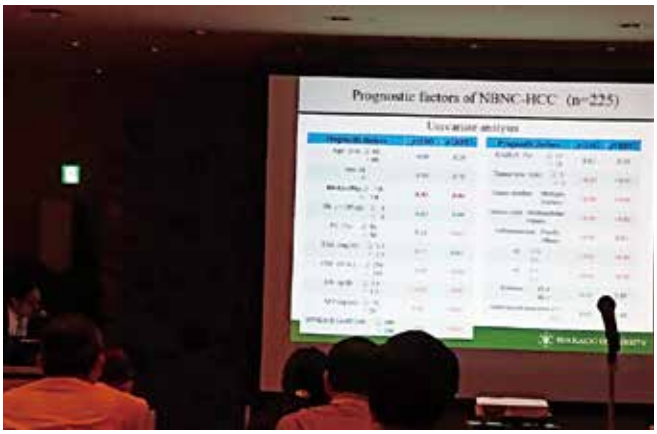
8/29-31 第10回Asia-Pacific Primary Liver Cancer Expert Meeting(APPLE)

2019/8/29-8/31の３日間、ロイトン札幌ホテルにて第10回Asia-Pacific Primary Liver Cancer Expert Meeting(APPLE)が開催されました。国立国際医療研究センター國土典宏理事長がChair、当科教授武冨紹信がCo-chairを務め、17か国1100人以上の参加者を集め盛大に執り行われました。

APPLEは、世界の原発性肝癌死亡の80%が東・東南アジア地方に集中していることから、原発性肝癌の治療成績の向上ならびに教育を目的として設立されました。

今回は節目の10周年にあたる記念開催となり、教育企画として新たにAPPLE academyが始まる等、新たな動きが見られた会となりました。

今回北海道大学消化器外科Ⅰ教室はlocal hostとして参加させて頂き、運営に携わらせて頂いた他、口演６題、ポスター４題が採択され発表させて頂きました。例年より多数の参加者が集まり、昼は学会場、夜は宴席で熱い議論が交わされ、大いに盛り上がりました。　(文責：川村　典生)



9/21-22 第116回日本臨床外科学会北海道支部例会

2019年9月21日（土）、9月22日（日）に北海道大学学術交流会館で、当科の武冨紹信教授を会長として第116回日本臨床外科学会北海道支部例会が開催されました。今回の第116回日本臨床外科学会北海道支部例会は、第3回北海道外科関連学会機構合同学術集会（HOPES2019）との初の合同開催となり、両学会の棲み分けや演題数などの運営に関して大変だった点もありましたが、結果的に日本臨床外科学会北海道支部例会には65演題が登録され盛況に開催することができました。

ランチョンセミナーとしては、大鵬薬品工業株式会社を共催として、札幌医科大学　消化器・総合・乳腺・内分泌外科　教授　竹政伊知朗先生の座長のもと、国立病院機構大阪医療センター　下部消化管外科　科長　加藤健志先生より「大腸癌治療ガイドライン2019年度版を考慮した進行再発大腸癌に対する治療戦略」の御講演をいただきました。

HOPES2019との合同開催で多くの先生方に演題登録などの点でご負担をおかけしましたが、数多くの先生方にご参加いただき予定通り開催できましたことを厚く御礼申し上げます。

（文責：折茂　達也）

10/5 第2回日本手術医学教育セミナー

2019年10月5日（土）、北海道大学医学部フラテホールにて、2019年第2回日本手術医学会教育セミナーが開催されました。本会は、日本手術医学会教育委員会（中田清三教育委員長）の主催により年2回全国持ち回りで開催されております。今回は、「今、手術を考える」をテーマに看護師・臨床工学士・滅菌技師・医師など幅広い分野の方々に参加していただきました。

一般公演では、北海道大学病院の手術部ナースセンターと麻酔科から一般演題のご発表があり、それらに対して活発な質疑応答が交わされました。

教育講演としては、北海道大学病院から感染制御部部長の石黒先生と医療安全管理部部長の南須原先生、そして札幌医科大学麻酔科の新山先生にそれぞれの分野でのトピックスを交えてご講演をいただきました。

ご発表いただきました先生方、ご参加いただきました多くの方々に深く感謝申し上げます。

当番世話人：高橋　典彦（北海道大学病院　手術部　准教授）

関連病院紹介

学会資格

令和２年１月現在

卒業年	氏　名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本内視鏡外科学会	日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆膵外科学会		日本小児外科学会		日本乳癌学会			日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	技術認定医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医
S34	檀上　泰		●	●																			
S42	圓谷　敏彦		●	●																			
S46	米川　元樹		●	●	●		●	●	●														
S48	川崎　和雄	●																					
S49	久木田和丘		●	●																			
S49	目黒　順一		●	●	●		●																
S50	井齋　偉矢		●																				
S50	佐藤　直樹	●					●	●	●			●											
S52	櫛田　隆久		●		●							●											
S53	熊谷　文昭		●		●																		
S54	高橋　弘昌	●	●	●																●	●	●	
S54	高橋　昌宏		●	●			●																●
S55	伊藤　浩二		●																				
S55	松江　弘一	●																					
S56	川向　裕司		●																				
S56	田口　宏一		●	●	●																		●
S56	松岡　伸一	●	●	●		●	●	●	●											●			
S57	伊藤　美夫	●			●																		
S57	長渕　英介	●																					
S58	青木　茂		●	●																			
S58	有里　仁志	●	●																				
S58	小笠原和宏	●	●	●		●	●	●	●												●		●
S58	小池　雅彦		●		●																		●
S58	西川　眞		●	●	●															●			
S58	堀江　卓																						
S59	阿部　厚憲		●		●																		
S59	石津　寛之		●	●		●	●					●				●							
S59	大森　一吉		●	●		●	●	●															
S59	上泉　洋		●	●	●															●			
S59	倉内　宣明		●			●	●	●	●	●						●							
S59	田中　康夫	●	●		●																		
S59	田村　元		●	●																	●	●	●
S59	濱田　朋倫	●	●	●	●	●	●																●
S59	浜田　弘巳	●	●	●		●	●	●										●	●	●			●
S59	三澤　一仁		●	●		●	●	●	●														●
S60	数井　啓蔵	●	●	●		●	●																
S60	神山　俊哉		●	●		●	●	●	●			●				●							●
S60	高橋　宏明	●	●	●	●	●	●	●	●														●
S61	小林　清二		●	●	●	●				●													
S61	内藤　昌明	●	●	●																			

卒業年	氏　名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本内視鏡外科学会	日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆膵外科学会		日本小児外科学会		日本乳癌学会			日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	技術認定医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医
S61	中野　詩朗		●	●	●															●			
S61	益子　博幸		●			●	●																●
S61	山本　浩史		●		●																		
S62	赤羽　弘充		●		●															●			
S62	大川　由美		●	●		●	●	●										●			●	●	●
S62	川上　雅人	●																					
S62	嶋村　　剛		●	●	●	●	●					●											
S62	高橋　　学	●	●	●	●															●	●		●
S62	福島　　剛		●	●		●	●													●			●
S63	小川　秀彰	●			●			●															
S63	高田　譲二		●	●		●	●	●	●	●													●
S63	増子　佳弘		●		●																		
S63	鈴木　友己	●	●	●								●											
H1	安念　和哉	●																					
H1	飯田　潤一		●	●																			
H1	池田由加利																						
H1	大島　隆宏		●		●																		
H1	高橋　典彦		●		●																		
H1	武田　圭佐		●			●																	
H1	高橋　將人		●	●																	●	●	●
H1	中川　隆公	●	●	●	●	●	●									●							
H1	中山　雅人		●		●																		
H1	秦　　庸壮		●		●																●	●	
H1	広瀬　邦弘	●	●	●	●	●	●																
H1	柳田　尚之		●		●					●													
H1	山賀　昭二	●			●																		
H1	渡邊　健一	●	●																	●	●	●	●
H2	篠原　敏樹	●	●	●	●	●	●	●						●	●								
H2	武冨　紹信	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●			●							●
H2	中西　一彰		●	●		●	●	●				●	●			●							●
H2	羽田　　力		●	●																			
H2	越前谷勇人	●	●	●	●																		
H3	蒲池　浩文		●	●		●	●									●							
H3	川村　秀樹		●	●		●	●	●	●	●													●
H3	今　　裕史	●	●	●	●	●		●		●													
H3	津田　一郎		●	●		●																	
H3	富岡　伸元	●	●			●															●		●
H3	中村　貴久	●	●		●																		
H4	松久　忠史		●	●		●	●																●
H4	横尾　英樹	●	●	●	●	●	●	●	●			●				●							●

卒業年	氏　名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本内視鏡外科学会	日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆膵外科学会		日本小児外科学会		日本乳癌学会			日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	技術認定医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医
H5	植村　一仁	●	●	●		●	●			●													●
H5	高橋　周作	●	●	●	●	●	●			●													●
H5	野村　　克		●			●																	
H5	服部　優宏	●	●	●		●	●	●		●		●											●
H5	前田　好章	●	●	●	●	●	●			●										●			●
H5	渡辺　義人		●		●	●																	
H5	横山　良司		●																				
H6	河合　朋昭	●	●	●		●	●													●			
H6	崎浜　秀康		●																				
H6	砂原　正男	●	●	●		●	●	●		●		●											●
H6	橋本　　卓																						
H6	深井　　原																						
H6	横田　良一	●	●	●		●	●	●		●													●
H7	林　　俊治		●	●																			
H7	細田　充主		●	●																	●	●	●
H8	安達　大史		●																				●
H8	正村　裕紀	●	●	●		●	●	●		●				●									
H8	田原　宗徳		●			●	●										●						●
H9	今井　　敦		●	●		●																	●
H9	許　　理威	●	●																				●
H9	花本　尊之	●	●	●		●	●																●
H9	本間　重紀	●	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●								●
H9	森田　恒彦		●																				
H10	植木　伸也		●			●	●									●							
H10	片山　知也	●	●	●		●	●	●															●
H10	菊地　弘展		●																				
H10	喜納　政哉		●																				
H10	工藤　岳秋		●			●																	●
H10	下國　達志	●	●	●		●	●	●		●				●									●
H10	本多　昌平		●	●														●	●				●
H11	柿坂　達彦		●	●		●	●	●				●					●						●
H11	谷　　安弘		●			●				●													●
H11	敦賀　陽介	●	●	●		●																	●
H11	皆川のぞみ	●	●			●	●	●		●													●
H11	山本　　貢	●	●																		●	●	●
H12	折茂　達也	●	●	●		●	●	●				●					●						●
H12	葛西　弘規		●																				
H12	後藤　了一		●																				
H12	高橋　　徹	●	●			●				●													●
H12	三野　和宏	●	●	●		●		●															●
H13	大浦　　哲		●																				

卒業年	氏　名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本内視鏡外科学会	日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆膵外科学会		日本小児外科学会		日本乳癌学会			日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	技術認定医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医
H13	佐々木彩美		●																				
H13	寺崎　康展		●		●																		
H13	渡辺　正明		●																				
H14	蔵谷　大輔		●	●		●																	●
H14	腰塚　靖之		●									●											
H14	佐藤　正法		●			●																	●
H14	上徳ひろみ		●																		●		●
H14	柴崎　　晋		●	●		●	●	●		●													●
H14	舩越　　徹		●			●				●													●
H14	若山　顕治		●	●		●	●	●				●					●						●
H15	市川　伸樹		●	●		●	●			●				●									●
H15	川村　典生		●			●																	
H15	木村　鐘康		●																				
H15	財津　雅昭		●																				
H15	常俊　雄介		●																				●
H15	馬場　　基		●																		●		●
H15	藤好　真人		●																				
H15	宮城　久之		●															●	●				
H15	吉田　　雅		●	●		●	●			●				●									●
H16	島田　慎吾		●	●		●	●	●				●											●
H17	旭　　火華		●			●																	●
H17	大場　　豪		●			●												●					●
H17	川俣　　太		●			●	●																●
H17	長津　明久		●			●				●													
H17	山田　健司		●			●																	
H18	江本　　慎		●			●																	
H18	大野　陽介		●			●				●													
H18	大畑多嘉宣		●			●		●															●
H18	小野　　仁		●			●																	●
H18	小丹枝裕二		●			●				●													
H18	小柳　　要		●																				
H18	湊　　雅嗣		●																				
H19	相山　　健		●			●																	●
H19	荒　　桃子		●																				
H19	石川　隆壽		●			●		●		●													
H19	正司　裕隆		●			●																	
H19	高橋　秀徳																						
H19	深作　慶友		●			●	●																
H19	本間　友樹		●																				
H19	水上　達三		●																				●
H20	石黒　友唯		●																				

卒業年	氏　名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本内視鏡外科学会	日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆膵外科学会		日本小児外科学会		日本乳癌学会			日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	技術認定医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医
H20	梅本　浩平		●																				
H20	辻　　健志																						
H20	豊島雄二郎		●																				
H20	松澤　文彦		●			●		●												●			●
H21	岡田　尚樹		●																				
H21	巌築　慶一		●																				
H21	鈴木　崇史		●																				
H21	藤好　　直		●																				●
H22	蔵谷　勇樹		●																				
H22	今泉　　健		●																				
H22	木井　修平		●																				
H22	小山　良太																						
H22	坂本　　譲		●			●																	
H22	沢田　尭史		●																				
H22	柴田　賢吾		●			●																	
H22	渋谷　一陽		●			●																	
H22	杉山　　昂		●					●															
H22	藤居　勇貴		●			●																	
H22	宮岡　陽一																						
H22	脇坂　和貴		●			●																	
H23	大平　将史		●			●																	
H23	奥村　一慶																						
H23	加藤　紘一		●																				
H23	金沢　　亮		●																				
H23	谷　　道夫		●																				
H23	松井　博紀		●			●																	
H24	石川　倫啓		●																				
H24	太田　拓児		●																				
H24	柏倉さゆり																						
H24	加藤　拓也		●																				
H24	近藤　享史		●																				
H24	杉井　沙織		●																				
H24	坂本　聡大		●																				
H24	志智　俊介		●																				
H24	村田　竜平		●																				
H24	吉田　祐一		●																				
H25	大渕　桂祐		●																				
H25	河北　一誠		●																				
H25	小林　展大		●																				
H25	佐野　修平		●																				
H25	田仲　大樹																						

卒業年	氏　名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本内視鏡外科学会	日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆膵外科学会		日本小児外科学会		日本乳癌学会			日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	技術認定医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医
H25	矢部　沙織		●																				
H26	海老沼翔太		●																				
H26	阪田　敏聖		●																				
H26	田中　友香																						
H26	中本　裕紀		●																				
H26	原田　拓弥																						
H26	浜田　和也		●																				
H27	小林　正幸																						
H27	斎藤　智哉																						
H27	佐藤　　彩																						
H27	白川智沙斗																						
H27	鈴木　麻由																						
H27	羽田　光輝																						
H28	市村健太郎																						
H28	鈴木　琢士																						
H28	高橋　直規																						
H28	南波　宏征																						
H28	和久井洋祐																						
H29	石塚　千紘																						
H29	髙橋　　遼																						
H29	深澤　拓夢																						
H29	浜田　卓巳																						
H29	山本啓一朗																						

2018年関連病院手術数

▼施設名▼		全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	食道癌	鏡視下	胃癌	鏡視下	結腸癌	鏡視下	直腸癌	鏡視下	原発性肝癌	鏡視下	転移性肝癌	鏡視下	膵癌	鏡視下
北海道がんセンター	呼吸器外科	228	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	消化器外科	228	1	28	6	0	32	14	47	39	41	29	3	0	9	1	6	1
	乳腺外科	358	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
市立札幌		665	3	215	0	0	42	18	95	75	28	20	9	6	13	6	22	3
岩見沢市立		459	12	420	0	0	30	15	52	31	22	18	3	0	4	0	8	0
市立苫小牧		380	8	21	0	0	26	6	40	26	14	9	9	0	4	0	7	0
釧路労災		579	2	58	0	0	51	51	76	72	34	34	7	0	7	2	3	0
札幌厚生		981	0	35	0	0	90	58	110	70	52	43	73	15	15	2	43	3
旭川厚生		823	0	12	1	0	79	19	118	64	44	28	5	0	1	0	17	0
帯広協会		459	18	1	0	0	27	10	35	25	31	20	1	0	0	0	3	0
KKR札幌		732	0	37	4	2	30	17	65	49	24	18	5	2	4	1	7	0
JCHO札幌北辰病院（旧社保総合）		352	0	29	0	0	16	8	61	52	14	8	3	0	5	2	3	0
日鋼記念		354	13	71	0	0	17	8	51	32	15	8	11	0	7	0	6	1
函館市立		767	5	58	2	0	34	6	78	76	43	43	15	2	10	4	14	1
北海道医療センター（旧国立西札幌）		464	0	93	0	0	34	28	70	54	11	9	2	0	3	0	7	0
市立稚内		191	4	21	0	0	6	5	16	11	3	2	0	0	0	0	3	0
市立士別		67	3	62	0	0	8	0	10	1	2	0	0	0	0	0	1	0
砂川市立		428	1	78	0	0	16	14	53	44	16	16	4	2	7	1	3	1
小樽市立		481	7	85	0	0	19	8	34	25	29	17	1	0	3	0	12	0
千歳市民		252	1	1	0	0	17	12	27	13	18	13	0	0	0	0	0	0
網走厚生		254	0	49	0	0	16	1	32	19	6	6	1	0	3	0	1	0
JCHO北海道病院（北海道社保）		427	0	39	2	0	21	8	41	28	12	10	9	0	6	1	7	0
天使		628	0	2	0	0	11	3	30	22	12	5	2	0	2	0	4	0
渓和会江別		281	17	283	3	0	16	3	26	12	13	9	7	0	1	0	5	0
北楡		256	0	989	1	0	12	3	50	35	17	15	2	1	5	0	0	0
恵み野		384	0	13	0	0	20	13	30	22	9	7	4	0	2	0	3	0
苫小牧日翔		171	0	169	1	0	12	8	19	18	10	10	0	0	0	0	1	1
市立美唄		3	3	29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
森町国保		0	0	150	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
静和記念		83	0	14	0	0	4	2	5	0	9	0	0	0	0	0	0	0
対ガン協会		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
網走中央		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北クリニック		0	0	51	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北札幌病院		0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
すずかけセントラル		101	0	22	0	0	6	5	10	7	5	5	0	0	0	0	0	0
篠路はまなすクリニック		61	0	45	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新札幌聖陵ホスピタル		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
JCHO登別		0	0	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
まるせっぷ厚生クリニック		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		11897	98	3234	20	2	692	343	1283	922	534	402	176	28	111	20	186	11

胆道癌	鏡視下	乳癌	鏡視下	甲状腺癌	鏡視下	肺癌	鏡視下	胆石症	鏡視下	虫垂切除	鏡視下	小腸切除	鏡視下	鼠径ヘルニア根治術	鏡視下	その他	鏡視下
0	0	0	0	0	0	152	127	0	0	0	0	0	0	0	0	37	37
2	0	0	0	0	0	0	0	10	10	4	4	4	2	13	0	74	20
0	0	358	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7	0	81	0	0	0	0	0	81	76	42	41	79	4	36	22	348	20
3	0	22	0	12	0	8	8	63	54	36	25	19	1	68	31	541	33
4	0	15	0	0	0	2	2	72	69	48	45	18	3	53	23	0	0
0	0	64	0	0	0	1	1	102	99	33	27	18	4	89	58	154	42
12	0	55	0	22	0	24	22	128	96	33	15	63	3	62	31	234	0
9	0	86	0	0	0	0	0	129	93	46	35	20	1	138	34	130	41
5	0	83	0	0	0	1	0	56	48	44	31	2	0	95	36	95	18
6	0	93	6	2	0	77	70	83	72	42	40	14	4	54	36	141	53
3	0	23	0	0	0	5	5	69	55	26	20	7	2	72	52	85	3
13	1	44	0	0	0	1	1	55	50	18	12	9	0	41	23	160	20
14	0	57	0	0	0	0	0	125	113	61	60	41	27	99	46	0	0
2	0	22	0	1	0	0	0	77	72	43	42	20	3	68	53	197	15
0	0	7	0	0	0	0	0	35	30	12	8	7	1	65	53	62	0
2	2	2	0	0	0	3	2	7	7	5	5	6	2	18	0	68	0
5	2	50	0	0	0	-	-	83	82	46	42	18	5	57	33	151	20
3	0	33	0	2	0	17	12	51	50	29	29	24	6	72	59	246	60
3	0	15	0	0	0	0	0	52	44	32	29	8	1	37	29	47	0
0	0	19	0	0	0	0	0	60	55	36	35	5	4	42	12	34	10
10	0	4	0	6	0	42	41	60	53	52	48	6	0	48	7	0	0
1	0	20	0	0	0	15	15	40	40	31	30	15	0	227	223	229	30
2	0	3	0	1	0	3	2	62	59	31	21	8	1	44	0	257	0
2	2	0	0	0	0	0	0	47	45	19	18	8	2	31	19	1053	14
7	0	7	0	4	0	0	0	97	93	47	41	13	0	65	56	80	20
1	0	10	0	0	0	0	0	22	22	7	7	4	4	39	39	44	13
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	150	0
0	0	0	0	0	0	0	0	20	11	30	23	0	0	9	0	34	4
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	51	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	20	0	0	0	2	2	10	10	2	2	2	2	27	21	42	18
0	0	0	0	0	0	0	0	8	7	7	0	0	0	14	0	75	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	173	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
116	**7**	**1194**	**6**	**50**	**0**	**201**	**183**	**1704**	**1515**	**862**	**735**	**438**	**82**	**1685**	**996**	**4982**	**454**

関連病院総手術件数（2010年～2018年）

▼施設名▼		2010年			2011年			2012年			2013年			2014年			2015年			2016年			2017年			2018年		
		全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔
がんセンター 北海道	呼吸器外科	–	–	–	–	–	–	261	0	16	245	0	21	330	0	40	243	0	26	238	0	32	244	0	38	228	0	20
がんセンター 北海道	消化器外科	526	3	47	206	3	37	286	0	31	282	1	47	232	0	22	247	0	22	258	0	39	229	0	38	228	1	28
がんセンター 北海道	乳腺外科	280	0	180	300	0	120	300	0	150	312	0	141	270	0	50	349	0	106	384	0	75	406	0	77	358	0	0
市立札幌病院		604	34	161	625	33	217	617	48	223	609	38	280	641	24	287	732	5	272	689	8	205	614	5	182	665	3	215
岩見沢市立病院		383	73	43	311	71	34	328	75	35	313	28	19	403	34	18	437	33	349	427	24	396	505	13	353	459	12	420
苫小牧市立総合病院		395	50	28	424	42	16	355	18	22	371	14	16	376	9	5	454	12	9	390	10	36	427	7	29	380	8	21
釧路労災病院		639	4	93	590	3	73	629	1	43	663	3	42	583	1	56	537	1	42	563	2	43	546	3	65	579	2	58
札幌厚生病院		934	2	32	964	1	27	953	1	38	1034	0	32	1058	0	29	1017	0	17	1003	1	34	963	0	36	981	0	35
旭川厚生病院		652	80	16	719	0	0	702	0	0	711	5	12	753	6	6	758	0	4	726	0	2	763	0	7	823	0	12
帯広協会病院		427	0	20	436	3	22	459	10	10	438	13	12	468	27	9	447	21	13	488	15	5	461	10	4	459	18	1
KKR札幌医療センター		740	0	26	704	0	90	720	0	6	693	2	36	693	3	34	681	–	149	715	1	146	658	2	194	732	0	37
JCHO札幌北辰病院（社保総合）		360	0	22	387	0	21	383	0	22	320	0	33	317	6	45	405	2	25	270	2	1	341	0	43	352	0	29
日鋼記念病院		583	31	24	540	33	22	514	35	22	602	23	23	503	25	21	478	3	1	421	13	27	325	13	40	354	13	71
市立函館病院		765	21	89	683	32	69	703	32	72	641	60	83	707	56	53	706	11	45	662	10	32	685	11	26	767	5	58
北海道医療センター		484	1	58	415	5	48	440	12	49	463	2	39	419	0	86	487	0	60	492	3	66	452	3	81	464	0	93
市立稚内病院		226	42	7	226	32	2	225	11	0	240	0	0	208	4	0	183	2	47	129	6	75	117	4	45	191	4	21
市立士別病院		91	46	79	123	26	76	147	1	91	106	2	100	127	2	109	76	9	118	18	0	82	53	0	87	67	3	62
砂川市立病院		370	0	30	395	7	32	430	5	34	389	3	35	434	5	34	415	3	20	425	6	71	450	2	102	428	1	78
小樽市立病院		244	26	130	265	38	137	276	29	135	299	31	105	346	20	122	420	34	158	453	13	107	583	8	97	481	7	85
千歳市民病院		206	40	6	245	4	12	201	25	5	215	17	9	208	8	13	226	3	6	224	6	2	221	3	7	252	1	1
網走厚生病院		312	12	27	315	4	19	316	6	22	316	6	12	318	5	18	298	2	9	326	7	39	341	0	30	254	0	49
JCHO北海道病院（北海道社保）		399	3	14	450	3	11	385	2	3	424	–	8	408	0	13	394	0	8	436	0	16	419	0	22	427	0	39
天使病院		407	1	20	412	0	14	407	0	12	489	0	13	465	0	22	516	0	19	611	0	3	559	0	4	628	0	2
渓和会江別病院		210	61	180	213	83	219	253	50	127	261	49	262	308	12	210	278	14	183	301	32	222	324	37	225	281	17	283
札幌北楡病院		563	14	741	548	30	768	479	20	720	345	6	840	436	143	913	432	143	900	439	114	1009	266	0	1036	256	0	989
恵みの野病院		339	0	28	343	0	14	329	1	20	314	2	27	348	0	25	342	2	16	359	2	16	410	1	12	384	0	13
苫小牧日翔病院		198	29	83	193	11	99	213	4	102	200	6	115	142	3	79	151	2	89	173	0	132	156	0	139	171	0	169
市立美唄病院		41	35	124	25	16	124	1	4	120	3	4	33	1	2	29	0	2	23	2	8	37	2	3	81	3	3	29
市立三笠病院		50	27	126	53	24	68	50	16	98	56	15	124	35	18	57	37	13	55	22	17	40	14	7	36			
斜里町国保病院		12	7	5	22	18	21	16	10	23	21	15	32	15	11	31	–	–	–	*	*	*						
町立中標津病院		165	21	11	168	19	11	218	3	4	193	1	3	146	3	1	165	7	8	134	6	9						
十勝いけだ医療センター		0	0	0	0	0	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*						
厚岸町立病院		0	10	8	0	7	7	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*						
長万部町立病院		0	0	27	0	0	12	0	0	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*						
せたな町立国保病院		0	0	65	0	0	65	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*						
森町国保病院		0	0	100	0	0	100	0	0	0	0	0	200	–	–	–	–	–	–	0	0	200	0	0	150	0	0	150
西さっぽろ病院（旧河西外科）		72	64	175	124	65	166	166	56	142	169	40	131	154	59	117	115	58	84	*	*	*						
静和記念病院		148	0	24	150	0	21	144	2	14	121	0	15	213	1	22	136	1	16	127	0	23	133	0	21	83	0	14
洞爺協会病院		46	7	70	62	2	70	69	9	100	61	–	100	68	10	86	81	0	100	47	3	100	57	0	60			
網走中央病院		24	21	不明	29	13	不明	–	–	–	–	–	–	–	–	–	0	0	不明	–	–	–	0	0	不明（外来分）	0	0	0
北札幌病院		0	6	31	0	9	23	0	3	28	0	1	26	–	–	23	–	–	22	–	–	20	0	0	25	0	0	10
北クリニック								–	–	–	–	–	–	0	0	10	0	0	14	0	0	10				0	0	51
北海道対がん協会								0	0	0	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	0	0	0	0	0	0
すずかけセントラル								–	–	–	74	2	40	104	4	43	119	0	57	122	0	66	105	0	40	101	0	22
篠路はまなすクリニック								2	1	20	4	–	22	40	1	27	74	0	36	56	0	34	72	0	46	61	0	45
日高徳洲会（静仁会静内病院）								83	6	66	–	–	–	3	2	7	121	17	44	0	0	0	0	0	0			
新札幌聖陵ホスピタル														0	0	93	–	–	173	–	–	–	0	0	143	0	0	0
JCHO登別病院																	10	0	15	–	–	16	0	0	21	0	0	24
まるせっぷ厚生クリニック																										0	0	0
総計		12,429	942	3,685	12,269	788	3,552	11,799	496	2,609	11,752	389	3,067	11,950	504	2,825	12,567	400	3,360	12,130	309	3,468	11,657	132	3,661	11897	98	3234

旭川厚生病院

旭川厚生病院外科チームは、北大一外6名、旭川医大二外2名を含む計10名の外科医と、研修医1から2名で診療に当たっています。

当院の診療圏は道北全般に及び、遠くは稚内市や紋別市、遠軽町などからも患者が訪れます。診療対象は上下部消化管、肝胆膵、ヘルニア、乳腺と多岐にわたります。PD/DP、肝切除などの高難度手術は年間20例近くあります。食道癌は少ないです。LACや肝切除は大学から応援の先生に来て頂くこともあります。進行癌が多く、胃癌/大腸癌に対する腹腔鏡手術の割合はやや低めですが、最近は症例を絞ってロボット手術の導入を開始しております。つまり若い外科医にとっては開腹、腹腔鏡、ロボットいずれの手術も経験、執刀できる、なかなか魅力的な病院ということになります。またラパアッペ、ラパヘルも数多く実施しています。

2018年に引き続き、2019年も年間手術症例数（全麻）が800例を超えました。 さらに症例数を増やすべく、チーム一丸となって今後も患者さんによい医療を提供していく所存です。みなさま今後とも旭川厚生病院外科をどうぞ宜しくお願い致します。

網走厚生病院

網走厚生病院は外科として24床のベッドを活用し、年間約300件近くの手術を行っています。主な疾患は、胃癌16例（うち腹腔鏡下手術は1例）、結腸癌32例（19例）、直腸癌6例（6例）、肝癌1例（0例）、膵癌1例（0例）、乳癌19例、胆石症60例（55例）、虫垂炎36例（35例）、鼠径ヘルニア42例（12例）で、従来の開腹手術も行いつつ腹腔鏡手術も積極的に行っています。特に、胃や大腸は大学にご協力頂き、内視鏡技術認定医による指導の下、技術認定医申請に必要なビデオ収録を頻繁に狙っています。また、外科専門医申請に必要な末梢血管や大血管の症例もシャント手術やペースメーカー埋め込み術で不足分を補充することが可能です。何より当院は若手に多くの執刀機会を与えるよう心がけており、経験値を増やしたいと思っている後期研修医やリサーチ上がりの先生たちのニーズにこたえられるものと思います。

学術面では、チーム制のため抄録や論文作成に時間を割くことができ、実際に2019年度は日本外科学会（齋藤智哉）、日本内視鏡外科学会（杉井沙織）、APPLE（相山健）、HOPES（杉井沙織）にて発表しました。
皆さんの研鑽に当院がお役にたてるよう今後も努めて参りたいと思います。

（文責：相山　健）

網走中央病院

当院は昭和35年に先代有里伸一（北大29期）が網走中央病院として開業し、私有里仁志（昭和58年卒）が網走に戻ったのを機に平成９年医療法人社団網走中央病院と致しました。開院当初から夜間救急の輪番当番を担う急性期病院として診療してきましたが、地域医療のニーズに応え平成24年に入院を療養病床（86床）に転換しました。

網走市の医療は厚生病院が基幹病院となり、当院は急性期治療後の在宅復帰や施設入所への橋渡し的存在となっております。以前は医局からの出張医師と全身麻酔手術施行しておりましたが、現在手術は行っておりません。

外来は従来通り外科（有里）と内科（２名）体制で診療しており、互いに連携の元で総合的に診断する様に心掛けて、通院患者の急性期疾患には別個に入院対応出来る様にしております。

現医局員の先生方には魅力のある病院ではありませんが、将来「総合診療医」として地方医療に貢献されたいとお考えになった際は是非ご連絡頂きたいと思っております。

（文責：有里　仁志）

岩見沢市立総合病院

岩見沢市立総合病院は人口約8万人の岩見沢に位置しています（医療圏の南空知地区の人口は16万人）。16の診療科からなり病床数は484床で南空知地区の基幹病院として地域医療に取り組んでいます。伊藤浩二副院長、上泉洋副院長、羽田力、河合朋昭、谷安弘、寺崎康展、辻健志、小林正幸の8人態勢で診療を行っており、その他に柏倉さゆりが乳腺外科を主に診療しております。外科は38床で年間約450～470件の手術を行っております。毎週水曜日に大学、消化管チームの吉田先生に指導に来ていただき、鏡視下手術も積極的に行っており、内視鏡外科技術認定取得をできる人材育成にも取り組んでいます。2019年10月から直腸癌に対してda Vinci Siによるロボット支援下手術を導入し、今後適応を広めていきたいと考えています。約200名の維持透析患者を外科もかかわりながら診療しており、内シャント作製、シャントトラブルに対するPTAなども外科で行っております。敗血症などに対する血液浄化も積極的に外科で行っております。数年後の新病院建設の話も具体的になってきており、今後、益々地域の方々から信頼される医療の提供を行っていけるように外科医一同で頑張っています。

渓和会江別病院

江別病院は昭和62年11月に野幌地区住民の念願であった総合病院として故品田佳秀先生が開院されました。本年開院32周年を迎え、ますます地域に貢献できるよう診療に励んでいます。スタッフは大森一吉、野村克、佐々木彩実、梅本浩平、藤好直の5名です。毎週水曜日は肝胆膵グループの蒲池先生に、第一土曜日は乳腺外科の先生に外来診療を行って頂いております。週末は大学の諸先生方に当直の応援に来て頂いており感謝申し上げます。

病床数は200床でそのうち外科病棟は52床です。2018年の手術件数は581件で、全身麻酔症例が281件でした。悪性疾患は食道癌3例、胃癌16例、結腸癌26例、直腸癌13例、肝癌8例、胆管癌・膵癌7例、肺癌3例、乳癌3例、甲状腺癌１例でした。非悪性疾患に関しては鼠径ヘルニア44例、胆石症62例、虫垂切除31例、他に消化管穿孔などの臨時手術も多くあります。透析も担当し、約180名の血液透析患者さんを大森院長を中心として管理しています。内シャント作成、血管拡張なども行っております。今年度から梅本、藤好を中心に鼠径ヘルニアの腹腔鏡手術を開始しました。2019年の手術件数は現時点で304例と昨年よりも増加しており、地域の中核病院としての機能を担っております。

小樽市立病院

2014年12月1日、小樽市立病院は地上７階地下１階、21診療科を備えた総病床数388床（一般302床、精神80床、結核４床、感染2床）の新病院に生まれ変わり早5年が経過しました。この間の外科手術件数は、ⅰ）新築特需による著増、ⅱ）病院の実力と広報活動による増加、ⅲ）看護師数減少に伴う入院制限による減少、という大きく3つの時期を経て変遷してきました。小樽市立病院全体として看護師数減少に伴う入院制限の影響がいまだに尾を引いています。現在は、ⅳ）病院全体として逆紹介を増やす取り組みを中心に対策を行いここ数カ月でようやく回復の兆しをみせています。2018年の総手術件数は621件で前年度比10%減です。2019年は10月31日までの10か月間で456例、12月末までの予想手術件数は547例であり、昨年度比約10%減ですが医師会および地方への広報活動・情報共有・各種連携を図り徐々にではありますが着実に盛り返してきています。当院は「地域がん診療病院」として小樽後志地区を牽引する役目を担い、病院全体を挙げてそれを実行して行く責務があり外科はその大きな一翼をなしているという自覚をもって日々の診療に臨んでいます。　（文責：越前谷　勇人）

帯広協会病院

当院は病床数300床を有する病院で、十勝医療圏において歴史ある急性期総合病院です。本年度の外科スタッフは阿部厚憲院長・橋本卓・水上達三・本間友樹・高橋直規と昨年度同様5名で診療を行っています。

本年度の手術件数に関しては、全身麻酔540件と前年度より70件程度増加しており、当教室同門である上徳ひろみ先生とタッグを組み乳腺外科診療にも力を入れております。当科では、十勝医療圏の各病院、クリニックとdoctor to doctorで即座に連携のとれるピッチを常に当番の外科医が携帯しており、24時間体制で各施設からの臨時手術の依頼を受けております。その甲斐あってか、本年度は臨時手術が114件と例年よりも多く手掛けています。私のような若輩者にも積極的に手術を当てて頂けるため、毎日非常に多くの経験をさせて頂いております。

また、街自体にも丁度良い活気があり、食事も大変美味しいです。科内・病棟の雰囲気も良く毎週末には飲みに出かけることも多いです。（橋本先生の許認可制ではありますが、節度ある範囲での恋愛も可能です。）

来年度以降も、益々地域の方々から信頼される医療を提供できるよう外科スタッフ一同力を合わせて頑張っていきます。　　（文責：高橋　直規）

北札幌病院

医療法人社団北札幌病院は1963年（昭和38年）開業、一般病床35床、療養病床60床で、外科スタッフは小川秀彰１人です。平成29年７月より理事長小川秀彰、院長幾世橋経人の新体制になり2年が経過しました。現在、北大消化器外科Ⅰの医局から外来診療や当直の多大なる応援を頂いており、心より感謝申し上げます。年間手術件数は約20例で、最近は局所麻酔の小手術（CVポート留置、胃瘻造設など）のみになりました。当院の特色としては、JR学園都市線新琴似駅及び地下鉄南北線麻生駅のいずれからも徒歩数分で公共交通アクセスが良好です。また、医局の関連病院で北大病院より北に位置する病院は少ないため、札幌市北部や石狩市の患者さんの受け入れに適しています。関連病院としての北札幌病院の役割は、北大病院への外科手術症例の紹介、北大病院での手術後の転院療養継続、入院・外来での癌化学療法、入院して北大病院に通院放射線療法（送迎あり）、癌終末期緩和ケアなどと考えております。今後も医局との連携を維持して頂きながら、地域医療に貢献していきたいと考えておりますので、何卒御協力の程宜しくお願い申し上げます。

札幌北クリニック

札幌北クリニックは今忠正先生が地下鉄北18条駅ほど近くに開設し45周年を迎えました。大平整爾先生などの大先輩から伝えられた透析医療を津田一郎（平成3年卒）が引き継ぎ2年経過しました。軸足はほぼ完全に透析に置いていますが、外科医としてはシャント関連の手術を年間40例程度と、ささやかですが続けています。メスを患者に語りかける言葉に持ち替えて、外科と比べ派手さはないのですが、地道に透析臨床を展開しています。

当院では透析の導入と維持に関しては透析専門医、看護師、臨床工学技士、薬剤師、管理栄養士、ソーシャルワーカーらが協力し行っており、チーム医療で札幌市北区と東区の地域透析患者を支えています。

透析患者の高齢化に伴い、状態が急変することも少なくありません。北大第一外科の関連病院である札幌北楡病院、KKR札幌医療センターなどには大変お世話になっています。開業以来、北大第一外科教室員の先生には当院の夜間透析を応援していただき、大変助かっています。これからもかわらないご支援を賜りますようにお願いいたします。

釧路労災病院外科

8 階東（外科）病棟カンファレンスルームにて
後列左から
石川隆壽　石黒友唯　海老沼翔太　水町浩暢（研修医 1 年）　村田竜平
前列左から
小笠原和宏　高橋弘昌　小林清二

今年の釧路は例年通り雪が少なく、雪かきの要らないクルマにとっては天国のような冬を過ごしております。昨年11月の病棟移転から約１年、すっかり新しい環境に馴染んで参りました。と言っても、今年度赴任してきた３名にとっては、初めからの外科病棟なので感傷に耽っているのはロートルだけということですね。

当科の診療は、消化器外科・乳腺外科・緩和ケアを三本の柱としています。今年度途中から緩和ケア専門医を招聘したので、緩和ケアについてはサポートする側に回っております。麻酔科枠は相変わらず減ったままなのですが、釧路市内他病院の消化器内科医の減少により当院消化器内科の患者が急増して、2019年の手術実績（年末の臨時手術は含まず）は723件（全身麻酔656件）と、大幅な増加を達成できました。主な疾患ごとの症例数は胃癌57例、結腸癌96例、直腸癌58例、肝胆膵癌14例、乳癌62例、虫垂炎33例、胆石症113例、鼠径ヘルニア88例でした。

釧路市医師会との連携で二次救急当番を分担しているほか、地域のクリニックの先生方からの信頼も得て、紹介患者と臨時手術が増えています。これまで同様、腹腔鏡下手術の推進・標準最新の乳癌診療・初診から看取りまでの緩和ケアを当科の診療のコアとして、これまで以上に手術を増やしていく所存です。来春には当院の初期研修医が消化器外科Ⅰに入局します。写真に写っている研修医も「一般外科は面白い」と言っています。道東の自然を満喫しつつ、ワーク・ライフ・バランスを保ちながら、総合力で勝る臨床外科医を目指そうという若い力を期待しています。　（文責：小笠原　和宏）

KKR札幌医療センター

当院は地下鉄平岸駅から歩いで数分のところにある、410床の急性期病院です。

外科のスタッフは小池（副院長）、田村（乳腺）、武田、今、桑原（呼吸器）蔵谷、阪田、植田、和久井の9人です。手術件数は昨年は780件ほどで、ほとんどが全身麻酔の手術です。2018年は大腸癌が90件、胃癌が30件、乳癌が93件、肺癌が77件、膵癌7件、胆管癌6件、原発性肝癌5件、転移性肝癌4件、食道癌4件、などの悪性疾患の他に、胆石症87件、鼠径ヘルニア54件、虫垂切除42件などの良性疾患の手術もたくさん行っています。

特徴は腹腔鏡や胸腔鏡を用いた手術が非常に多いことで、大腸癌や肺癌、胆石症、虫垂切除はほとんど鏡視下手術で行われます。鼠径ヘルニアの手術も66%が腹腔鏡で行われています。また、透析も外科で管理しているため、シャント造設やシャントPTAなども行っています。今Drが透析学会の指導医であり、透析学会の認定医・専門医も育成しています。

また、救急にも力を注いでおり、年間の救急車搬入台数は3000件を超え、増加傾向です。

院内では卓球大会なども行われ、他職種との交流も盛んにおこなわれています。　（文責：小池　雅彦）

札幌厚生病院

2019年度の外科は、石津副院長のもと田中（浩）、秦、高橋（周）、山上、田原、若山、舩越、北、小柳、原田、瀬戸嶋のスタッフ12名と、嘱託の安達の計13名で診療していました。当科では臓器別に中心となる医師を配置し、胃は高橋（周）・北、大腸は山上・舩越、乳腺は秦・田中（浩）、呼吸器は田中（浩）、肝は石津・若山、胆膵は田原が主に担当していました。

手術件数は例年1000件前後あり、2018年度の総件数も1016件で甲状腺癌・甲状腺腫瘍：43例、胃癌：90例、大腸癌：162例、炎症性腸疾患：23例、乳癌・乳腺腫瘍：55例、肺癌・肺腫瘍：31例、肝癌・肝腫瘍：98例、膵癌・膵腫瘍：56例、胆道悪性腫瘍：12例、胆嚢良性疾患：128例、虫垂炎：33例、鼡径ヘルニア：62例でした。

当科では高度な癌手術からアッペ・ヘルニアなど多数の手術症例を有していますが、スタッフの高齢化・業務の縦割りなど今後改善していかなければならない点もあります。安定した手術成績を継続していくことやロボット手術などの新しい手技の導入にも取り組みつつ、若手外科医をきちんと指導・育成していくことも重要です。若い医師にとっても魅力的な科と思われるように努めていきたいと思います。　（文責：高橋　周作）

札幌北楡病院

当院は一般・消化器外科の推進、移植医療の展開、人工臓器開発と臨床応用、高度先進医療技術の開発と実践を旗印に急性期医療施設として昭和60年に開院されました。総病床数は281床で、15の診療科があります。外科は米川元樹、目黒順一、久木田和丘、小野寺一彦、堀江卓、高橋宏明、服部優宏、後藤順一、谷山宜之、佐藤正法、木井修平の11名です。透析・血管外科チームと消化器外科チームに分かれて、お互いに協力し合って診療しています。消化器外科は内視鏡外科を重点的に行っております。2013年に道内初のロボット支援下低位前方切除を当院で行って以降、一時頓挫していましたが、2019年から再開し2例施行しました。今後も地道に症例を重ねてまいります。

透析関連では内シャント造設、血管グラフト留置、Blood Accessトラブルに幅広く対応し道内の多くの透析施設からの信頼を得ております。

2018年の外科の手術件数は1242例で消化器系の全麻手術は233例です。今後も、地域の方々からの信頼に応えられるように臨床と研究に日々精進していく所存です。今後ともよろしくお願いいたします。

士別市立病院

士別市立病院は常勤医１名体制ですが、大学からの出張と今年から旭川の医療法人より週1回外来支援をいただいて外科と透析の診療を行っております。

人口減少と手術の減少に伴って外来患者は減少し続けており、20kmほど北にある名寄市立病院を基幹病院として周辺の医療機関は縮小していく流れにあります。

当院も夜間週末は緊急手術はできませんので、緊急手術が必要な患者さんは名寄市立病院にお願いしています。

名寄市立病院にICUができたことで以前と違ってスムーズに受け入れてもらえるようになりました。

その代わり術後安定した患者さんはすぐに当院に引き取り退院調整を行うという体制になっています。

平日は当院でも手術を行っていますが、約1年前から大学からリサーチの先生方を派遣していただき、主にどうしても当院で手術をしてほしいという方を手術していただいております。月2回の出張ですが、それでも平成30年は全麻手術67例、胃癌8例、大腸癌が12例ありました。

私は主にシャントの設置やPTAを行っていますが、局麻か伝麻のシャント関連の手術が60例ほどでした。

私事ですが今年夏に新たな転移がみつかり、今は脳、肺、肝、骨の多発転移を治療中です。

これまで私にあきれながらもご指導して下さった先生方、また厄介な症例をお引き受けいただき御加療いただいた先生方、理不尽でも支えてくれた後輩の先生方には深く感謝申し上げます。

今後もどうかご支援のほどお願い申し上げます。

市立札幌病院

一般消化器外科・乳腺外科として、外科スタッフは三澤一仁副院長をはじめ計9名で診療しています。今年度は病棟編成があり、泌尿器科との合同病棟となり科の垣根を越えて協力しやすい環境となりました。 2018年の全麻手術件数は661件 (臨時・緊急手術は183件)でした。主な手術の件数は、乳癌：81例、胃癌：37例(腹腔鏡下14)、大腸癌：110例(腹腔鏡下89)、胆摘：79例(腹腔鏡下71)、肝切除：24例(原発10例) (腹腔鏡下12)、PD：19例、DP：9例(腹腔鏡下4)、成人の鼠径/大腿ヘルニア：36例 (TAPP：22例)です。そのほか、他科からCVポート留置の依頼も多く引き受けています。

病院全体672床、32科と多くの科を有する総合病院であることから、臓器移植後の患者様や維持透析を必要とする患者様をはじめ重篤な基礎疾患がある患者さんの手術や、精神医療センターで管理が必要な患者さんの手術の受け入れも行っております。ハイボリュームセンターと目されている他院外科からハイリスクの患者さんの手術依頼をいただくこともしばしばです。救命救急センターに関しても3次救急をはじめ2次救急の受け入れも行っており、年間1000件の救急搬送があります。一般の腹部救急疾患に加え外傷手術も対応しています。周術期管理については、術後ハイケアユニットを有し当科スタッフが交代で宿直を担当しています。緩和ケアチームの介入や、せん妄などの状態管理については精神リエゾンも行っており、術後管理についても充実しています。

（文責：田中　友香）

千歳市民病院

2019年度、市立千歳市民病院外科は、昨年度に続き、福島副院長・安念・許・深作の4名で診療を行っています。

手術件数・入院患者数・外来患者数いずれも緩やかな伸びが続き、非常に安定した診療体制ですが、今年度の大きな変化といえば、この10月から緩和ケア病床(2床)が稼働となったことでしょうか。

昨年秋に緩和ケア外来が開設して以来、これまでも一般病床で院内外の様々な診療科から多くの患者さんを受け入れてきましたが、緩和ケア病床ができてさらに質の高いホスピタリティを提供できるようになりました。

今後も福島副院長を中心に、近隣の訪問診療医や訪問看護ステーション・MSWと連携しながら、地域ぐるみで緩和医療の充実に貢献できればと思っています。

ここ数年は、大学から、あるいは近隣の関連施設から、各分野のエキスパートの先生方に鏡視下手術のご指導をいただいています。この場を借りてお礼申しあげます。

今後も教室の若い先生方が一層スキルアップできるよう、よりよい環境づくりに尽力したいと思っています。

千歳は札幌にも空港にも近く、自然にも恵まれた住みやすいところです。

研修先として当科を希望する先生がひとりでも多く増えることを願っていますので、よろしくお願いします。　（文責：安念　和哉）

市立函館病院

1860年に創立された市立函館病院は地域医療支援病院、3次救命救急センター、災害拠点病院として、道南全域から下北半島北部までの広い医療圏の救急医療をドクヘリも運用しながらカバーしております。また、地域がん診療連携拠点病院、がんゲノム医療連携病院として癌治療についても道南をリードしています。

消化器外科は弘前大との協力関係のもと、“One Team”として診療を開始して3年が過ぎました。現在は北大5名（中西一彰、植木伸也、大渕佳祐、田仲大樹、白川 智沙斗）と弘前大6名の計11名です。本年も若手・中堅が手術・病棟管理を担当、上級医がサポートする体制は変わらず、消化器外科のあらゆる疾患のみならず、3次救急施設のため外傷や救急疾患も多く経験できます。専門医研修で必要な心臓血管外科や呼吸器外科の手術症例も関連診療科の協力で獲得可能です。内視鏡外科の症例も豊富で若手も多く経験できます。また肝胆膵高度技能修練施設でもあり肝胆膵外科を希望される方の“受け皿”にもなります。今後も様々な方々の協力を得て、若手にチャンスを与えるように心がけるとともに外科医として医師として成長できるように教育していきたいと思っています。

市立美唄病院

2019年の市立美唄病院外科は松江院長のもと、田中、大阪大学卒業で救急科専門医取得している総合診療科の毛利の３名で診療しました。

市立美唄病院は現在、一般病床53床（うち地域包括病床8床）、療養病床45床、合わせて98床となっています。各科の中でも入院患者数に占める外科入院患者数は最も多く、全体の65%以上を占める時期もありました。

当科では一般外科、乳腺甲状腺外科、血液透析、救急医療が診療の中心です。

中でも血液透析は病院全体の売り上げの50%以上を占めており、当院の中心的存在で、12月6日時現在、透析患者数は69名です。

そのため今年もこれまで、シャント造設手術関連（15例）、血管グラフト留置手術関連（10例）、バスキュラー・アクセス・トラブルに対する対応関連（52例）が手術の中心となっており、全体の手術件数の40%以上を占めています。

当院では、一昨年、病院新築の具体的内容が発表され、2020年春には完成している予定でした。しかし、議会や市民の反対もあり設計が凍結されていたところ、市長交代があり、計画が白紙化されています。今後、新しい計画を立てる予定となっておりますが、紆余蹋躇が予想される事態となっております。

（文責　田中　康夫）

市立稚内病院

市立稚内病院は、宗谷管内唯一の総合病院で、離島を含めた同地域の医療をカバーしています。診療は、常勤の藤好真人、小丹枝裕二、豊島雄二郎と、大学からの出張医4人で行っています。総病床数362床のうち外科は28床で、年間手術数は例年200件前後ですが、今年度から大学から1－2週間毎に大学院の先生方に来ていただき、同門の諸先生のご助力を頂きながら、手術数を順調に伸ばすことができ、日々の診療を行うことができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。腹部手術以外にも、約100名の血液透析患者の診療を兼任し、シャントトラブル等の対応を行っています。警察の検案嘱託医も行っており、年間80件前後の検案業務も施行しております。常勤の循環器内科医、泌尿器科医不在のため、当該疾患が発生した場合は各科で協力して搬送業務を行っています。以上のように、業務は多種多様ですが、他科医師との連携も非常に良好なため、手術に支障を来すことなく業務を行っています。今後も近隣医療機関と連携し、宗谷地方を支える基幹病院としての役割を担っていきたいと思います。

JCHO札幌北辰病院

JCHO札幌北辰病院は札幌の東端に位置しておりますが、地下鉄およびJR新札幌駅に近く、札幌市内や新千歳空港へのアクセスが非常に良い環境にあります。そのため札幌市内だけでなく石狩・江別・北広島・恵庭・長沼・夕張などからも患者が来院します。2019年度の外科メンバーは髙橋昌宏院長、中川隆公副院長、西川眞乳腺外科部長、下國達志外科部長、小林展大、３ヶ月交代で浜田卓巳（4-6月）、石塚千紘（7-9月）、深澤拓夢（10-12月）、山本啓一朗（1-3月）の6人体制で診療に当たっています。2018年の手術件数は全身麻酔352例、局所麻酔29例であり、胃癌16例（鏡視下手術50%）、結腸・直腸癌75例（80%）、肝癌8例（25%）、膵胆管癌6例、乳癌23例、肺癌5例（100%）、胆石69例（80%）、虫垂炎26例（77%）、ヘルニア72例（72%）となっています。各種学会での専門資格を有した医師主導のもと、消化器領域（胃・大腸・小腸・肝臓・胆嚢）やヘルニアにおける鏡視下手術、高度技能を要する肝胆膵領域の拡大手術、乳腺疾患、良性疾患、緊急手術、透析関連の手術など、幅広い領域に対して安全で確実な手術を目標に行っています。当院は救急科がなく夜間に呼ばれることが少ないため、学会発表や論文作成などに当てられる時間が多く、学術活動の面でも非常に充実しています。今後も質の高い医療を提供出来るよう全員で取り組んでいきます。

（文責：小林　展大）

JCHO登別病院

JCHOが発足し6年目となり、同時に第1期5年間の中期計画が終了し、第2期目に入りました。全国のJCHO57病院はさらなる飛躍を目指しております。JCHO登別病院は病床数104床2病棟で、内科、外科、整形外科、リハビリテーション科、麻酔科、脳神経内科、泌尿器科の7診療科の小規模病院です。外科は北大第一外科から月2回程度診療応援に来て頂いております。外来患者の診療、乳がん検診の他、CV挿入、CVポート造設、PEG造設・交換などの手術、処置をお願いしています。当院は現在JR登別駅から徒歩7-8分の場所に新病院を建設中で、令和2年4月に開院予定です。現在の温泉地から比べてアクセスが良くなるので、患者の通院、職員の通勤の負担は軽減されます。病床数は110床と少し増えますが、診療内容は現在と殆ど変わりありません。新病院のコンセプトは白老町を含む登別市の地域医療の要としての役割を果たすことで、地域住民、医師会、登別市、商工会議所、観光協会など様々な方面から期待されております。病院建設の他にも医療機器の整備、電カルの導入、移転の準備など業務量は多く大変ですが、職員一同開院に向けて全力で取り組んでおります。　（文責：伊藤　美夫）

JCHO北海道病院

当院は豊平川沿いの病床数322床18診療科からなる札幌市南部地域約50万人を診療圏域とした急性期病院です。外科は28床で2019年度は数井啓蔵副院長のもと、正村裕紀、敦賀陽介、正司裕隆、齋藤智哉の5名で、胃、食道や大腸などの消化管、HCC・膵癌などの肝胆膵領域、肺癌・気胸などの呼吸器疾患、甲状腺、乳腺など内分泌疾患やシャントなど多岐にわたる臓器の手術を全麻局麻合わせて約450例行っています。大学や同門の諸先生のご助力をいただきながら肝門部胆管癌などの困難な症例も行っています。来年度からは循環器内科医が常勤予定で循環器疾患合併のため他院へお願いしていた症例も当院で行えればと考えております。内視鏡手術は本年度も教室から毎週本間重紀先生に指導していただいています。全麻手術の約半分が鏡視下手術です。若手がたくさん執刀してもらう方針のもと4月から9カ月で正司が120例、齋藤が150例前後執刀しています。胆膵領域は敦賀が主体となりPD、肝切除などを約40例行っています。また呼吸器外科学会の認定施設であり、肺癌などの呼吸器疾患を数井、正村が主体となり約60例行っています。　（文責：正村）

新札幌聖陵ホスピタル

「リサーチグループの出張先に、札幌市内で、出入りが比較的融通の利く関連病院は少ない！！」私が外務委員長だったとき（内野教授時代）に大谷地の康信病院（三内関連）をリサーチメンバー何名かの出張先とした。私も毎週、手術のネーベンを行っていたのだが、そこの内科医が開設したのが、「新札幌聖陵ホスピタル」であり、関連４病院を有する（佐竹博史理事長）。関連病院には同門の片山富美夫先生がいる。

私は北大病院手術部を退任後に病院長として就職したのだが、私自身の手術や透析の関係で顧問に退き、今は北大循環器外科出身の奥出潤先生が院長に、あとは脳外科医１名、北大二内出身の内科医２名、出張医として内科、循環器外科、放射線科医が来訪している。病床は６０床、外来の他に約２０施設の訪問診療を手分けして行っている。ＣＴ、ＵＳ、ＭＲＩがフル稼働していて専門医の読影もされており、私も肺癌、早期膵臓癌など１０例ほどを北大病院へお願いしてきた。近くには同門の北辰病院（高橋昌宏院長）、江別病院（大森一由院長）があって最近、お世話になっている。影ながら武冨教授以下、教室員の皆さんのご活躍と発展を切に願っています。

（文責：佐藤　直樹）

すずかけセントラル病院

静岡県浜松市南区に位置するすずかけセントラル病院外科 今井です。鈴木 友己先生と自分で2013年4月から勤務し、7年目となりました。今年は近くの袋井市でラクビーワールドカップアイルランド戦もあり、浜松でも大変にぎわいました。台風の被害は昨年、停電が起き大変でしたが、2019年は特に大きな災害はありませんでした。当院は病床数309床で、うち外科のベッド数は20床です。手術件数ですが2013年から2019年の6年間で全身麻酔症例は約100件/年のペースで行っております。現在、自分は健診業務をメインに働いて、手術の手伝いと今までの患者の外来フォローを行っています。外科業務は大学から3か月ごとに医師を派遣していただき、その先生方中心に働いてもらっています。来ていただいた先生方は皆一生懸命働いてくれるため、大変感謝しています。手術体制は週2日の定期手術のほか、臨時手術は随時対応しています。周囲の開業医とも連携し、さらに当院は浜松では2番目の健診センターを抱えているためそこで異常の見つかった症例の手術も行っております。施設認定は医局のおかげで日本外科学会、日本消化器外科の関連施設の認定は取得しております。

砂川市立病院

約500床25診療科の地域がん診療拠点および救命救急病院です。旧炭鉱地域のため人口は減少していますが、当院へ諸科の集約化も進み役割は増しています。今年度のスタッフは田口宏一院長・横田良一・細田充主・山田健司・石川倫啓・中本裕紀の6名です。消化器外科は緊急手術が40%弱と多く、腹腔鏡手術を積極的に行い、消化器内科医が少ないため救急・化学療法・緩和医療での当科の果たす役割は大きいです。乳腺外科は細田先生の活躍で、若い乳癌患者も増えています。田口先生は病院長を務められており、多忙なこともあり緩和ケアは全員で、消化器疾患のみならず内科・耳鼻科・婦人科・泌尿器科など全科および退院からも終末期の患者さんを受け入れています。

さらに2学年で約20名の研修医が、前面に出て救急外来を担っており、当科の彼らへのバックアップはとても大切です。普段のサポートと教育に対する科内の共通認識は重要で、外科が魅力的な存在として認識されることに繋がると考えています。今後も一丸となって頑張っていきたいと考えております。

（文責：中本　裕紀）

静和記念病院

当院は札幌市西区を中心に、医療・介護事業を施設・在宅において展開している医療法人社団静和会の旗艦病院として位置づけられており、外科を含む一般病床95床を有しております。

当法人は静和記念病院だけでなく、平和病院、昆布温泉病院、平和リハビリテーション病院、エル・クォール平和等の各施設事業体において内野純一元教授をはじめ、施設管理者等を含め第一外科の諸先輩、医局員の方々の多大なる御支援のもと運営させていただいております。あらためて感謝申し上げます。

当院は本年6月から、朝蔭直樹新院長（順天堂大／昭和62年卒：消化器外科専門医）とする新体制となり、院内外における既成との対峙、救急患者の受け入れ拡大等を実施し、病院全体が活性化しつつあります。

それに伴い、長らく当院において獅子奮迅の働きをしてくださった檀上先生が、全てを後進に譲るためメスを置かれました。孤軍奮闘と思われる環境の中で当院を支えてくださったことに、法人を代表して深謝したいと思います。

その反面、手術、診療、当直の応援をいただいている本多医局長、嶋村診療教授、医局員の先生方には多大なる負担をおかけしている現況です。

手術件数に関しては檀上先生の影響もあり、若干の減少傾向がありましたが、後年に入り増加し、年間100例は突破できそうです。

また色々と紆余曲折がありましたが、ようやく新病院建設実現の目途が立ち、第一外科の諸先生方が一緒に働きたいと思える病院、医療を通して地域住民に信頼され貢献できる病院を目指して粉骨砕身する所存です。

今後とも御力添えいただけますよう、何卒よろしく御願い申し上げます。

北海道対がん協会

北海道対がん協会札幌検診センター外科（乳がん検診部門）の固定医師は1名、病床も手術もありませんので、簡単に乳がん検診の現況を報告させていただきます。

札幌検診センターでの検診数は年間約2万5千例、道内各地で行われるバス検診も約２万５千例です。

2017年度から厚生労働省の指針がかわり視触診がなくなりましたが、大学や関連病院の先生方には、今後とも読影や精査でお助けいただけたらと存じます。

（文責：池田　由加利）

天使病院

現在外科スタッフは、山本浩史、中山雅人、大場豪、湊雅嗣、岡田尚樹、高橋遼の6名で診療しています。周産期医療を中心としていることから小児外科の手術件数は道内最多で2019年は327件(内、新生児手術25件)の小児外科手術を行っています。成人の外科手術は277件で、あわせて604件でした。成人の悪性腫瘍手術は、胃癌6件、大腸22件、直腸10件、肝4件、膵３件、乳癌16件、肺癌15件と、ひとつひとつの件数は決して多くはないものの幅広い範囲で手術を行っています。

また、教育に注力しているのも特徴で、若手外科医には指導医講習やプログラム責任者講習を受ける機会が与えられています。初期研修医の教育はもちろんですが、学生の見学も本年は200名ほどを数えました。2006年から昨年までで、初期研修医の北大第一外科入局は10名おり、本年は新たに1名（別所）が入局いたしました。後期研修医の高橋遼はこの１年で全身麻酔手術件数100件を超えるペースで活躍しています。今後も外科医の養成に貢献していきたいと考えています。

外科医として成長していくのみならず、指導医として、また病院の運営などに関しても知識や技能を身につけることのできる病院です。

（文責：湊　雅嗣）

洞爺協会病院

当院は､社会福祉法人北海道社会事業協会が設置する7病院（函館・小樽・余市・岩内・帯広・富良野・洞爺）の一つとして、昭和5年に創立された歴史と伝統のある病院です。公的病院に指定され、地域医療に貢献しており周辺住民の方々に大変親しまれております。

洞爺は洞爺湖・有珠山・昭和新山等を有する道内屈指の観光地であり、国内はもとより海外からの観光客も多く、救急告示病院として24時間診療している救急外来には多数受診し、国際色豊かな病院となっております。

外科常勤スタッフは2名（青木茂院長、大浦）で外科・整形外科・リハビリ科を中心に診療をしております。外科全身麻酔件数は年間約６０件で腸切をはじめ、鏡視下手術を積極的に取り入れております。血液透析は外科で管理しており、シャント手術・PTA・下肢切断術も当院で完結しております。年々患者数が増加している周辺地域の期待に応えるべく、透析ベッドを拡充し現在25床で約80人前後の透析患者の治療をしております。

抜群の自然環境の中でOn/Offの区切りを付けながらも、外科に限らず幅広く知識と技術を身に付け、責任を持って診療したい医師には最適の病院だと思います。

（文責：大浦　哲）

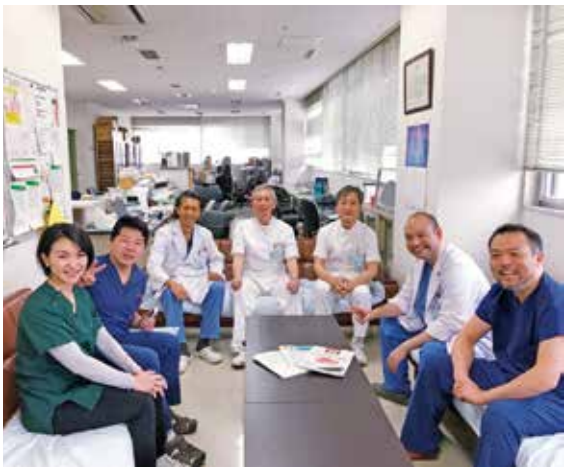
苫小牧市立病院

当院は苫小牧市を中心とする東胆振～日高地方の１市11町、人口約30万人を医療圏とする広域中核病院です。苫小牧市は道央自動道を利用すれば札幌市から車で約１時間と近く、千歳空港とのアクセスも便利です。総病床数は382床(外科23床)で､外来出張のみの科も含めると全診療科は17科です。ＰＥＴ－ＣＴ、デジタルMMG、放射線治療装置（リニアック）なども導入され、放射線科専門医も常勤しているので高い画像診断能力とＩＶＲも可能です。2019年度の診療スタッフは松岡院長以下、広瀬、花本、財津、南波の計５名です。初期研修医は病院全体で計13名、その中、１名が交代で当科へローテーションしています。

当院では2019年６月にda Vinciが導入され、10月には泌尿器科で前立腺癌の手術が施行されました。胃癌・大腸癌に対してもda Vinci手術を導入しなければならないと考えてはいますが、常勤の技術認定医や胃癌・直腸癌の必要症例数などクリアーしなければならない条件があるため、悩んでいるのが現状です。技術認定医の資格があってda Vinci手術に興味のある若手Ｄｒがおりましたら是非、当院に来ていただけることを希望しております。

（文責：広瀬　邦弘）

苫小牧日翔病院



当院は、札幌市の南東約65km、苫小牧駅のやや西側に位置しています。病床数は168、透析センター　97床あり、11の診療科を有する病院です。胆振地方において、血液透析治療を積極的に行っています。

スタッフは 、熊谷先生（S53卒, 血液透析）、櫛田先生（S52卒, 血液透析、麻酔）、飯田先生（H1卒, 血液透析）, 松久先生（H4卒, 血液透析）、崎浜（H6卒,外科）、鈴木崇史先生（H21卒, 外科）、鈴木麻由先生（H27卒, 健診センター）です。麻酔科医は常勤医１名､非常勤医２名です。大学から移植G（後藤、渡辺、川村典生、厳築）が手術の手伝いや当直などで応援に来ていただいています。時々、リサーチの先生にも応援できていただいています。

2019年の手術件数は359件（内全麻184）でした。　主な手術の内訳は原発胃癌7例（鏡視下5)､大腸癌32例（鏡視下32)､下部胆管癌2例（PD 2)、肝癌4例（原発3, 転移1)、胆石胆嚢炎14 例（鏡視下13)、虫垂炎9例（鏡視下9)、鼠径ヘルニア 44例（視下42)、腹壁瘢痕/白線ヘルニア4例（鏡視下4）, 乳癌 19例でした。消化管癌のほとんどの手術は鏡視下にて行っております。

今後も近隣の医療機関と連携しながら、胆振～日高地方を支える病院としてその役割を担っていきたいと思います。　（文責：崎浜）

日鋼記念病院

当院の外科スタッフは益子博幸（86年卒)、喜納政哉（98年卒)、高橋秀徳（09年卒)、矢部沙織（13年卒）の4名と、東室蘭サテライトクリニックで所長をしてます高田譲二（88年卒）のあわせて5名です。偶然ですが、毎年北大医学部バスケット部出身のスタッフがいます。写真に写っております初期臨床研修医2年目の大橋慶太もバスケット部出身で、2019年に入局が決まっております。ご指導よろしくお願いいたします。

2018年の手術件数は438件で、私以外の3名が執刀医として活躍しております。病院のある室蘭市は高齢化率37.1%で、全道平均の31.1%を上回り、人口の減少と高齢化がさらにすすんでいます。90歳以上の超高齢者の手術や透析はもはや珍しくない時代となりました。せっかく手術を無事に乗り切っても､帰る先を探すのに時間がかかり､在院期間も長くなっております。

室蘭市は人口わずか8万の街に3つの総合病院があり、合併話が何かと話題になっておりますが、具体策が全く決まっておりません。病院の外では高齢化がすすんでおりますが、医局の中は若い医師がたくさん働いており、エネルギーをいただいております。

医療法人はまなす

・はまなす医院（石狩市花畔）：院長　工藤立史（80期､北大第2内科同門)、会長　工藤謙三（46期）
・篠路はまなすクリニック（札幌市北区）：院長　工藤岳秋（74期)、栗林　弘（45期）

はまなす医院は2019年3月15日に開院25周年を迎えました（写真は祝賀会のものです)。現在は腎臓内科を中心とした診療体制になっていますが、シャントなどの手術や外科疾患にも対応しています。リハビリ室が2017年から稼働しており、透析患者のフレイル対策に力を入れています。2019年末から、ガス発電機（コージェネレーションシステム）を用いた自家発電を開始し、停電時にも透析が可能になります。

篠路はまなすクリニックは一般外来・入院手術の設備を整えて5年目です。消化器系疾患の診断から治療までをこなす施設として、また地域の無床クリニックの後方ベッドとして定着しつつあります。

石狩市、札幌市北区北部地区とも、入院可能な病院が少ない地域であり引き続きニーズに応えていきたいと思います。両院とも第一外科医局から手厚い診療応援を頂戴しており、改めて感謝申し上げます。今後とも教室、同門の皆様の御支援を賜れれば幸いです。　（文責：工藤　岳秋）

北海道医療センター

北海度医療センターは500床を有し、100人以上の医師と30診療科を備えた札幌市西区唯一の総合病院です。災害医療や急性期医療の拠点として三次救命救急センターを設置し、24時間の救急医療を受け持っている一方、難病、結核、精神科身体合併症、小児慢性疾患などの政策医療も担っています。附属看護学校も併設されており、また、2020年10月からは筋ジストロフィー、重症心身障害の病棟、札幌山の手養護学校、体育館、保育所とヘリポートを含んだ新棟群も完成し、ますます北海道の医療センターとしての機能が拡充される予定です。外科は５人が在籍し（川村、植村、三野、大畑、鈴木、時々初期研修医もいます）、手術はほぼすべて腹部疾患で、2018年は全麻464件、局麻93件でした。徐々に手術件数は増加してきておりますが、北海道の医療センターとしてはまだ十分ではないと思っております。今後は癌の手術はもちろん、外科救急、炎症性腸疾患、身体合併症のある術患など当院の特性を生かして症例の増加に努力したいと思います。

北海道がんセンター呼吸器外科

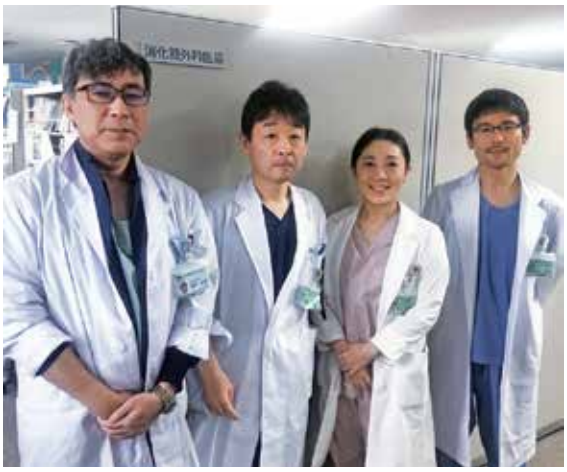
北海道がんセンター呼吸器外科は平成10年4月に単科として診療を開始してから、原発性肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍などを対象に、病床数18床で年間二百数十件の全身麻酔手術を行っています。このうち原発性肺癌の手術は毎年160例前後で道内有数の症例数です。

スタッフは札幌医科大学呼吸器外科から1名の医師派遣があり現在3名体制です。

最近の話題は、これまでの内視鏡手術の技術を生かし創部の数を減らした単孔式胸腔鏡手術とロボット支援手術の導入です。単孔式胸腔鏡手術はアジアやヨーロッパで広がっています。当科の胸腔鏡技術の応用で、対象手術が増えてきました。ロボット手術は当科では2019年3月から開始し、初期の10例を終えて保険診療に移行しました。対象は肺悪性腫瘍に対する肺葉切除と、縦隔腫瘍です。

また臨床研究も積極的に行っています。呼吸器外科分野にご興味のある方はぜひご相談ください。

北海道がんセンター消化器外科



濱田朋倫、篠原敏樹、前田好章、皆川のぞみ、小山良太

私共の施設は2000年代初頭に国立札幌病院から北海道がんセンターへ改称し、現在に至り、新病院の建て替えも順調に進んでおります。乳腺外科と呼吸器外科が独立していますので、当科では消化器外科の悪性腫瘍手術中心の診療を行っています。

手術は少ない出血量で、郭清のきちんとした質の高い手術を実践するよう努めています。腹腔鏡手術は大腸癌では可能なものはほぼ全例を適応にしており、骨盤内臓全摘なども他科と協力しながら行っております。胃癌についても原則早期胃癌から、進行癌へ適応を広げつつあります。

2015年11月から胃癌に対するロボット支援手術を開始し、現在まで10例を合併症なく施行しました。2019年7月からは直腸癌に対するロボット支援手術も開始し、こちらは4例になりました。これからも慎重にこの手術に取り組んでいきたいと思います。

尚、2019年10月30日、当科を長らく牽引してきた濱田朋倫が永眠致しました。今までご指導、お見舞いを頂きました方々に深謝申し上げます。引き続きこれまでの伝統を大切にしつつ新しい発展を目指し、臨床・研究活動に精力的に取り組みたいと考えております。　　（文責：皆川　のぞみ）

北海道がんセンター乳腺外科

関連病院ではほぼ唯一の乳癌診療に特化した診療科です。

スタッフは、高橋將人（副院長・1989年卒）、渡邊健一（医長・1989年卒）、富岡伸元（医長・1991年卒）、山本貢（1999年卒）、前田豪樹（2000年卒）、寺井小百合（2015年卒）、岩村八千代（非常勤・1998年卒）の計7人体制で、高橋、渡邊、富岡、山本の4名が第一外科同門です。

2019年は、新規乳癌手術417例（前年比60例増）、平均1日入院患者33.5名、外来数104.7名、化学療法約4500件で増加傾向が続いています。

乳房再建（形成外科と連携）、遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC）に関するカウンセリング・遺伝子検査や、HBOCに対するリスク低減乳房切除も実施可能です。治験・臨床試験への参加を重視し、エビデンスの創出、新規薬剤・治療の開発にも貢献したいと考えています。症例登録数は全国有数です。当科は、確定診断前の症例から、初期治療、転移再発乳癌を含め、すべての症例をお断りすることなく診療する方針です。同門の皆さま、ご多忙な外科診療のなかで変化の急速な乳癌診療を行うことはご苦労が多いことと案じています。お困りの症例などございましたらいつでもご相談下さい。

（文責：渡邊　健一）

まるせっぷ厚生クリニック

まるせっぷ厚生クリニックは常勤医1名の診療所で、私が月曜から金曜まで内科外来および在宅診療を唯一の常勤医として担当しています。外科に関しては毎週水曜と金曜の午前に外来があり、遠軽厚生病院の外科出張医が担当しています。従いまして外科手術に関しては、局麻下の縫合や創処置を私が年間数件する程度です。地域に密着した小さな診療所でスタッフは看護師3名、放射線技師1名、事務3名です。検査は遠軽厚生病院に外注していますが、採血後２時間程で電子カルテ上に報告されます。64列CTもあり検査から診断までレベルの高い診療が可能です。救急に関しても第1外科で鍛えられたお陰で、迅速に遠軽北見などの近隣医療機関に搬送しております。幸いこれまで医局にご面倒をお掛けせずに何とかやって来る事が出来ました。今後も宜しくお願いします。

恵み野病院

恵庭市は札幌市と千歳市の中間に位置し、今年人口7万人を超え、現在人口が増加している街となります。恵み野病院は恵庭市・千歳市・北広島市を中心とした地域をカバーする、病床数199床（一般病棟150床、地域包括病棟49床）の急性期病院です。今年度は中村貴久、林俊治、森田恒彦、羽田光輝の4名が常勤で診療し、武冨紹信教授や大学移植グループの出張医の助けも借りながら日々の診療にあたっております。

手術件数は2017年に400件を超えましたが、2018年・2019年は370～380件程度で推移しています。悪性腫瘍の手術は、胃癌65%、結腸癌68%、結腸癌70%を腹腔鏡手術で行っており、腹腔鏡手術数も安定してきております。さらに肝癌5件、膵癌9件と肝胆膵領域の手術も積極的に行っております。今年はICG蛍光法を使用した血流評価も導入し、更なる安全な手術を行えるよう努めております。良性疾患では胆嚢炎99%、虫垂炎100%、鼠径ヘルニア77%を腹腔鏡手術で行い、侵襲の少ない手術を心がけております。

臨時手術は93件あり、急性虫垂炎、ヘルニア嵌頓、消化管穿孔など多岐にわたります。また、甲状腺4件、乳腺12件、肺5件と地域の一般外科として様々な疾患の診療を行っています。

今後も地域の中核病院の外科として日々の診療にあたっていきますのでよろしくお願いいたします。

（文責：羽田　光輝）

森町国民健康保険病院

スタッフ数：３名（主任外科医長１名と71歳の嘱託医師２名）
病床数：60床（内科との混合病棟）
年間手術件数：全身麻酔・腰椎麻酔０
　　局所麻酔160件
病院の特色：

令和１年９月30日の森町の人口は、15,306人です。そのうち65歳以上の方は6,809人で、高齢化率は44.5％です。森町国保病院を訪れる受診者も高齢の方が中心です。

内科医３名、外科医３名の計６名が常勤医です。その他、週２回の整形外科医、週２回の泌尿器科医、２週に１回の眼科医がいます。以上の陣容で、入院・外来・救急を支えています。

救急車は年間520台で、１日平均1.5台です。医療機器としては、ＭＲＩ（永久磁石・0.4テスラー）・ＣＴ（16列・ヘリカルＣＴ）・一般撮影・マンモグラフィー・ＵＳ・骨密度計が稼働しています。ＣＦ、ＧＩＳは内科で担当しています。病床稼働率は平成30年度71.2％で経過しています。

高齢者の整形外科疾患、労災事故、交通事故を中心にみています。

高齢者が安心してかかれる医療を行うよう努力しています。

（文責：昭和48年卒　川崎　和雄＝嘱託）

編集後記

2019年の北海道大学大学院 消化器外科学教室Ⅰ教室年報の編集責任者の大役を拝命して1年がたちます。2019年は、元号が31年続いた平成から令和に変わった大きな節目の年でした。おめでたいムードの中、ラグビーワールドカップ日本大会が開催され、日本チームは大活躍を演じ史上初の8強に進出しました。それに伴い「One Team」という言葉も新語・流行語大賞に選ばれました。また、2020年は日本でオリンピックが開かれるということで、社会全体に明るい機運が漂っていたように思えます。そして、現在COVID-19は日本のみならず世界に暗い影を落としています。昨年の時点で、このようなことになることを誰が予想できたでしょうか。全世界中が停滞ムードとなっています。

さて、私自身は今まで教室年報作成のサポートをすることはありましたが、全てを統括して作り上げていくことは初めての経験でした。この経験を通して、北海道大学消化器外科学教室Ⅰは教室員（教官、インストラクター、後期研修医、大学院生）、実験助手さん、秘書さん、関連病院の多くの先生の力で成り立っていることがよくわかりました。この先の社会がどのようになっていくか不安なことも多いですが、臨床・研究ともに今できることを「One Team」で全力をもって取り組んでいければきっと明るい未来へつながるのではないかなと思っております。本年報をそんな当教室の結晶のひとつとして一読いただければ幸いです。

教室年報作成に際して、未熟な私を支えてくださった編集委員の巖築先生、渋谷先生、医局秘書の鈴木さんには本当に感謝しております。

最後に、このような貴重な経験の機会を与えてくださった武冨教授、本多前医局長に深く御礼申し上げます。

みなさま、今後ともご指導のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

（文責：島田 慎吾）

消化器外科学教室Ⅰ　教室年報2019

令和２年５月発行

発　行　北海道大学大学院医学研究院消化器外科学教室Ⅰ
TEL：011-706-5927
FAX：011-717-7515
ホームページ：http://surg1-hokudai.jp/

印　刷　北大生協　印刷・情報サービス部